文学部附置人文科学研究所報告

第二号

青山学院大学文学部

２０２０

目　　次

シンポジウム記録「東西の聖なるもの―比較文化論を拓く―」
…… 佐伯眞一・他 …… 1

The Modernist Studies in Asia Network（MSIA）
第二回国際学会 Modernism and Multiple Temporalities の
企画・開催・運営に関する研究プロジェクト報告書…… 秦　邦生 …… 61

文学部附置研究「公共空間における〈短文のジャンル〉」の活動報告
…… France Dhorne …… 79

研究プロジェクト「動詞とその項
－英語とフランス語の格構造を中心に－」報告書
…… 尾形こづえ …… 89

「現代詩人ケネス・レクスロスの日米に亙る文学活動についての基礎的研究」
の研究状況についての報告 …… 小松靖彦 …… 103

「雑誌を用いた日本現代史研究」について …… 小宮　京 …… 109

Contents

Symposium : "The Sacred in the East and the West
:Opening the Comparative Cultural Theory" ····· Shinichi SAEKI ··· 1

Final Report of the Research Project: Planning, Organizing and Managing of the Second International Conference of the Modernist Studies in Asia Network (MIA), "Modernism and Multiple Temporalities"
····· Kunio SHIN ··· 61

Le genre bref dans l'espace public ·····France DHORNE ··· 79

On the Verb and Its Arguments:With Special Reference to the Syntax and Semantics of Case in English and French ·····Kozue OGATA ··· 89

A Report on the Progress of Research on Kenneth Rexroth's Literary Works in Japan and the United States
····· Yasuhiko KOMATSU ···103

Research on Japanese Contemporary History Using Magazines
·····Hitoshi KOMIYA ···109

シンポジウム記録
「東西の聖なるもの―比較文化論を拓く―」

Symposium：“The Sacred in the East and the West
:Opening the Comparative Cultural Theory”

人文科学研究所所長　佐伯眞一・他
Shinichi Saeki

青山学院大学総合研究所・人文科学研究所共催シンポジウム

2019 年 12 月 21 日（土）14:00 ～ 17:30
於：青山学院大学 14 号館 12 階大会議室

パネリスト・報告タイトル

二宮文子（青山学院大学文学部准教授）
　「ムハンマド崇敬―イスラームにおける聖なるものの諸相―」
秋山聰（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
　「聖像と聖なるモノのエージェンシー：比較宗教美術史の試み」
阿部泰郎（名古屋大学名誉教授、龍谷大学教授）
　「聖徳太子に顕現される聖なるものと聖徳太子宗教テクスト文化遺産の探究」
浅井和春（青山学院大学名誉教授）
　「聖なるものとしての東大寺大仏―その美術史的、歴史的意味を考える―」

司会

佐伯眞一（人文科学研究所所長）
水野千依（総合研究所運営委員）

開会の辞

人文科学研究所所長　佐伯眞一

本日はお寒い中多数お集まりいただきまして誠にありがとうございます。青山学院大学総合研究所・人文科学研究所共催シンポジウム「東西の聖なるもの―比較文化論を拓く―」と題しまして、シンポジウムを始めたいと思います。

総合研究所は青山学院大学全体の教員から研究プロジェクトを募集し、さまざまな研究を推進する組織であり、昨年30周年を迎えました。一方、人文科学研究所は、文学部の附置研究所として今年の４月に生まれたばかりですが、これから人文科学の研究を推進して参りたいと思っております。

本日は、その人文科学研究所の発足を記念すると共に、総合研究所の研究の一環でもある共催シンポジウムとして、「東西の聖なるもの」という比較文化論的テーマで議論をしてみたいと思います。人類は皆、何かしら聖なるものを心に抱かざるを得ず、今その相互理解ということが世界的に本当に重要な問題になっているのではないかと思います。けれども一方で、人文科学がそれを総合的に包み込むような形で推進されているかというと、そういう面ももちろんあるわけですけれども、一方では専門分野の細分化なども進みまして、必ずしも全体を視野に入れることができていない局面もあるかと思います。そうした状況の中で、幅広く歴史学、文学、美術史学、宗教学といった諸分野に渡る展望を広く眺め渡してみたいのです。そしてまた同時に国際的な視野を広く保った学問をこれから切り拓いてゆければよいなというようなつもりで、本日のシンポジウムを開催いたしました。

それでは、最初のパネリストの二宮文子先生にお話しいただきたいと思います。

「ムハンマド崇敬・イスラームにおける聖なるものの諸相」

二宮文子

ただいまご紹介いただきました、本学文学部史学科准教授の二宮と申します。今日はムハンマド崇敬のお話を、イスラーム全体のこととしてお話するような形になっておりますが、私の専門はインドのイスラーム教徒です。インドと言っても歴史的なインドですので、今のパキスタンやバングラデシュも含んだ意味での南アジアですけれども、そのイスラーム教徒のことをやっております。ということで、どうしても例はそちらに偏りがちになります。なぜそのようなことを申し上げなければならないのかと言いますと、イスラームという宗教の特徴についてちょっとまず―ご存知の方も多いと思うのですけれども―お話しておきたいのは、イスラームというのは、日本の今の認識では、コーランがあり、アッラーだけを信仰

し、というような非常に統一的な部分というのが押し出されているわけです。けれども同時にイスラームという宗教の特徴として、実は統一的な教義を打ち出すような教会組織を持たないであるとか、コーランの解釈は各人に委ねられている－もちろんコーラン解釈学という伝統がありますけれども－最終的にどのコーラン解釈が正統なものであるというようなことを決めるような仕組みを持たないのです。全世界のイスラーム教徒がコーランを信じていますというものでありながら、しかしその解釈は極めて緩く、統一されていないという状態で残されているような、そういう特徴を持つ宗教であります。なので、私が「インドのイスラーム教徒の事例はこうです」と言ったときに、「それは私の知っているイスラームではない」というふうに言い出すイスラーム教徒は必ずいるはずなのですけれども、ただそれに関してはどちらがどうとも言えません。そういうものになってしまいます。ということで私は必ず「自分はインドの事例を申し上げます」と言うことになっておりまして、私自身は「これは私の知っている、私の見たイスラームの事例です。それに関してこういう理論的な裏付けがあると思われます」というような形でお話するということになります。

今日のシンポジウムは「比較文化論を拓く」ということになっておりまして、比較の一端を担う者として、西と東の真ん中あたりのイスラームという、そしてインドというものをやっている私にお声がかかったわけですけれども、ちょっと言い訳をさせていただきますと、私は美術史などの専門家ではありません。なので今日特に専門的に深いお話ができるわけではありません。そういう学術的な深みのあるお話はあとに続いて発表して下さる先生方にお任せして、基本的にはイスラームにおいて、ムハンマド崇敬というものがどういう形をとるのかというお話を、なるべく雑多なというかさまざまな事例をざっと紹介していくという形でさせていただきます。

ということで、長い長い前置きの言い訳が終わったわけです。ここまでで、ハンドアウトの「イスラーム：共通の要素と統一性の不在」というお話はもういたしましたけれども、続きまして、イスラームにおいてムハンマドというのは神のメッセージをあずかった存在ですけれども、彼に対する崇敬というのは確かに存在をしておりまして、それがどのような形をとるかということをお話していきたいと思います。その形を作るというときに、イスラームでは偶像崇拝が禁止されておるのであるからして、そういう崇拝の対象は図像化されないのである、というのが一般的な理解かと思います。が、今日のシンポジウムのポスターの下の段の真ん中に、青い背景に金色のオーラをまとった人面馬に乗った人物の像がありますが、これはムハンマドの絵なのです。14 世紀にイランで描かれたムハンマドの絵です。このような形でムハンマドが絵に描かれるということは、普通に行われておりました。そして今でも行われておるのですけれども、ということで偶像崇拝を否定するからといって崇拝の対象が図像化を全くされないかというと、そういうことはありません。ただ気を付けなければならないのは、これはキリスト教におけるイコンのようなお祈りの対象になることは基本的に

なく、このような絵というのは写本挿絵として、美術品鑑賞の対象として、主に貴族や王様、そういう世俗の権力者の宮廷において作られたものであったということです。

また同時にこういう平面までは人物像がありますが、立体像としてムハンマドが表されるということは、私が知る限りではほとんどない、非常に稀な例だと思います。偶像崇拝の禁止がありながら図像化というのはあり得るのだけれども、そこにある種の段階があるらしいということは言えるわけです。最後にもう一つ、偶像を作る際の「段階」の存在というものは、もしかしたら必ずしも宗教的概念によるものだけではないかもしれないというのが、最後の「宗教と資本と芸術」というお話です。イスラームにおいては、キリスト教における教会であるとか、日本における寺社の総本山があって各地に支部のお寺があるというような、そういう形の組織力を持った宗教団体というのは極めて近代的な在り方であって、前近代においてそういう資本を吸い上げるような強固なネットワークを持つ聖職者の組織というのはほとんど存在しておりません。もちろん村々に礼拝所というのはあるのですけれども、その礼拝所というのはあくまで村や町の単位で運営されているような礼拝所であって、そこにたくさんのお金が集まって美術品を生み出すというような組織ではないのです。ですので、宗教的な教義的なものだけではなく、美術品というのはどうしても作るのにお金がかかりますから、そのお金を集められるような仕組みをイスラームの宗教的な組織の在り方として持たなかったということは言えると思います。というのが前置きです。

続きまして、ハンドアウトの「ムハンマド崇敬」です。事例を紹介する前に、一応理屈の面をお話しておこうということで、こういうところでコーランをどうしても引用してしまうので、みんなコーランのイメージがとても強くなってしまうのは、問題といえば問題です。ただこれは先程申し上げましたように、コーランの句があるので例えばこれから言うような「ワリー、神の友、聖者」というようなものがいるということは、イスラーム教徒は了解するわけです。一方、現実的に実際に誰が神の友、聖者であるのかということにおいて、常に千差万別、解釈のありようがあるということは頭に置いておいていただきたいと思います。クルアーンにワリーのことが書いてあるからといって、目の前にあるワリーだと言っている、イスラームにおける聖者だと言っている人について、100 人が 100 人、この人は聖者だよねと認めるわけではなく、そこに解釈議論の余地が大いに残されているということです。それはそれとして、理論面で申し上げますと、まずこういう聖者崇拝で必ず登場する概念が「バラカ」というものです。詳しい説明はハンドアウトの方に―そんなに詳しくもないですけれども―コーランの引用と共に挙げてありますが、バラカというのは－コーランでは人に与えられるものというふうにはされていないのですけれども－神に由来する祝福の力です。アメリカ大統領のバラク・オバマさんのバラクや、エジプトのムバーラク大統領のムバーラクも、この「バラカ」から来ています。この神に由来する祝福の力というのは、物であるとか人に付与するものであります。その力によってさまざまな、例えば病が癒えたりと

いうような奇跡的な出来事が起こせるというような力であります。このバラカというものは、人に与えられた場合、物でもそうなのですが、人や物自体がもちろん力を発しているのですけれども、その人や物に触れることによっても力が発揮されるという特性を持っているというふうに考えられています。死後の聖者様の墓にもその聖者に対するバラカが残っていると認識されますので、私のような異教徒でもその聖者の墓に行って近寄ってペタンと触るとその力にあずかれるということになっております。そういうものが授けられ得る人間として、神の友、ワリーというものがいる。ワリーというのはもともとアラビア語で、もともとのコンセプトとしては「何かに近いもの」という意味であります。ワリーが神の友というふうに解釈される場合、普通の人間よりも、その敬虔さゆえに、神に一段近いというふうに考えられます。そういう神の友は、神に近いがゆえに神様から特別に目をかけられてバラカという力を貰ったりします。それによって奇跡などを起こします。それゆえに崇敬に価する人間であるというような図式が、理論上成り立つわけです。あともう一つ重要なのが、「執り成し」（シャファーア）というものであります。ムハンマド自体は自分が執り成しができると言ったことはないようなのですが、執り成しというのは特に、イスラーム的来世に関係が深い考え方です。イスラームの場合、人生１回でその後最後の審判があり、ここで復活をして、１回きりの人生における行いにおいて裁かれて天国か地獄かというのが決まるという、キリスト教と同じようなコンセプトがあり、その天国か地獄かというのが来世と呼ばれます。この最後の審判において、あるいは現世でもいいのですけれども、人のためのお願いごと、例えば「この人悪いこともしたのですけれども、いいこともこれだけしているから天国に入れてあげて下さい」というような、人の為にお願いを神様にするということは基本的にはできないというふうにされているのです。自分だけの行いで裁かれるということになっているのですけれども、こういう神に近い人は神に近いがゆえに他の人の為に「神様お願いします」ということをできるという考え方があります。ハンドアウトで引用しているコーランは「（神の）お許しなくして、だれがみもとにとりなすことができようか」ということで、みもとにとりなすことなんかできないみたいに読めるのですけれども、同時に神のお許しがあればできるとも読めるわけです。というわけでワリーというのは、神のお許しをもらって神様に、他の人のためにお願いを取り次げる人間だというのです。そういう理解がなされているわけです。私のような異教徒でも、聖者様のお墓に行って「神さまにこれのお願いを取り次いでください」と言ったら、取り次いでもらえるかもしれないということになっています。

以上がコンセプトのところです。これからは残り時間を使って、なるべく長くならないように、バラカを与えられた神の友－ムハンマドは預言者ですけれども、神の友ワリーというのが預言者も含むカテゴリーなので－であるところのムハンマドに対する崇敬がどういう形をとるのかということに移っていきたいと思います。まず分かり易いのが、誕生日にお祭り

があります。「マウリド」とも呼ばれるのですけれども、何をするかというのが本当に地域的にさまざまなバリエーションがあります。私はインドのマウリドしか見たことがありませんが、例えばエジプトもマウリドを大々的にやることで有名です。エジプトのマウリドというのは砂糖菓子がたくさん店に出回ったりするらしいのです。私が見たインドの預言者生誕祭というのは、町でイスラーム教徒がお祝いのパレードをするというものでした。これは完全に地域のお祭りで、学校ごととか地区ごとにおみこしを仕立ててとか子供たちを選んでトラクターに乗せてやりましょう、とかそういうものなのです。この写真では、アラブ風の服装をした人が花びらを巻き散らかしています（二宮図 1）。この辺りに何というか、預言者ムハンマドがアラブ人であるということでアラブ風の扮装をするというある種の固定されたイメージがあるわけです。これはメッカですね（二宮図 2）。ここまでくると完全におみこしではなかろうかと思うわけですけれども、ミニチュアメッカの黒石です。これは神の家と呼ばれたりもするのですけれども、これをこういう形でトラクターの上に乗せたりします。あともうひとつ、本論とは特に関係ないのですが、こういうパレードのときに、鼓笛隊が出るということもあるわけなのですね。イスラーム＝音楽禁止と言われているかもしれないのですけれども、インドでは少なくとも、こういうお祭りのときに鼓笛隊が普通に出ます。この鼓笛隊の拡声器についているのは、ヒンドゥー教の神のクリシュナの絵です。恐らくこのバンド自体は、ヒンドゥー教のお祭りみたいなものにも出るような団体で、そのままその装備を使っているのです。一応、上に「預言者生誕祭のなんたら」みたいな垂れ幕を掛けているのですけれども、クリシュナが見える状態のまま預言者生誕祭のパレードにバーンと出ているというこの緩さが何とも言えないわけです。これが預言者生誕祭の祝い方のひとつの形ということになります。マウリドですね。ちなみにマウリドはヒジュラ暦の 3 月 12 日にやるので、ヒジュラ暦はご存知の通り 1 年が 11 日ちょっと短いので少しずつ季節はずれていきます。

次は絵がないのですけれども、もうひとつ分かり易いムハンマド崇敬の形として「ハディース」というものがあります。このハディースというのは、お手元のハンドアウトの方が分かり易いと思うのですが、預言者ムハンマドの言行録です。これは語りをもとにしたものでありまして、預言者ムハンマドの時代のアラビア半島は文字が書ける人の方が少ないところなので、預言者ムハンマドの行いというのを、神を最も知る人の行いとして、模範にすべきものとして、後々信徒が語っていくわけです。そういう語りが 100 年、200 年経ってだんだんテキストとして編纂されていくというわけです。そして編纂されてきた結果、イスラーム教徒が従うべき、例えばシャリーア、イスラーム法とかいうものの法源となっていくというのが、ハディースというテキストのあらましです。現在、教科書的な勉強から入るとハディースというのはどうしてもイスラーム法の法源というような堅いイメージがあるのですけれども、例えばこのハンドアウトに引用しているのは、ムハンマドがどういう姿かたち

をしていたかということです。「背は高からず低からず中背だ」「肌の色は輝くほど白くて、髪の毛はちりちりに縮れてもおらず、真っ直ぐでもなく、白髪はあまりなかった」「すごく力が強かった」とかです。そういう預言者の姿を眼前にイメージさせるような、語りのテキストというのもハディースには含まれております。

ついでにこれはちょっとムハンマドとはあまり関係はないのですけれども、イスラームの美術で外せないのが、実は「カリグラフィー」です。アラビア文字のカリグラフィーは礼拝所などでも装飾に用いられていますし、カリグラフィー作品が、ムハンマドの存在を象徴するように用いられていることもあります。例えば、トルコのアヤソフィア、ご存知のようにビザンツ時代に作られたキリスト教の聖堂を、多少手を加えてイスラームの礼拝所として使っているものです。後から引っ付けられた装飾の中に、「ムハンマド」と記された巨大な円盤状の装飾板があります。これはちなみに礼拝の方向です。とても都合がいいことに、キリスト教の大聖堂の向いている正面に当たる方向と、イスラーム教徒がお祈りする方向がほぼ変わらない方角になっているのです。一番お祈りの方向として重要な方向に、「アッラー」と「ムハンマド」とアラビア文字ででかでかと書かれた装飾板が付けられているのですね。側面にはスンナ派の重要なカリフの名前とかがあります。

続いて「語りとテキスト」として、ハディースよりは宗教的な法律、決まり事というものに直接結びつかない、例えば預言者伝であるとか預言者賛歌、あるいは「ミウラージュ・ナーマ」と言われるような文学のジャンルがあります。一番有名な預言者伝はイブン・イスハークという人が編纂したものです。これは日本語にも翻訳されています。図像史的に重要なのがミウラージュ・ナーマというものでありまして、本日のポスターに使われている絵もミウラージュ・ナーマから取ったものです。預言者ムハンマドというのは生前自分自身で奇跡はほとんど行っていない人なのです。ただの人というのを繰り返し言っていますし、彼自身は何の奇跡を起こす力もないのです。ただ預言者ムハンマドの生前起こった数少ない奇跡のひとつとして―これは預言者ムハンマドが経験したものであって他の人が見たわけではないというのが面白いのですが―夜の旅と昇天（ミウラージュ）というものがあります。まだメッカで苦労して布教しているときに、ある夜ムハンマドはメッカからエルサレムに不思議な力で旅をして、現在の岩のドームのあるところから今度は天に昇って行くのです。天に昇って、イスラームでは天国は階層に分かれているとされていて、ミウラージュ・ナーマでは7階層なのですが、その階層ごとに過去の預言者に会い、最後に神に会うというのです。これはダンテの神曲のモチーフになったと言われているものなのですけれども、そういう奇跡的な出来事であるミウウラージュというものが文学作品のモチーフになっていきます。ミウラージュ自体はハディースや、イブン・イスハークによる預言者伝－これは8世紀から9世紀にかけて今の形になったのですが－にもちらっと出てきます。それがさらに膨らまされて、「ミウラージュ・ナーマ」という文学作品が生まれていくわけです。ちなみにエルサレ

ムにある岩のドームの中には文字通り岩がありまして、その岩からムハンマドが天国に昇っていったとされています。この天国に向かっていくときの絵というのがよく描かれるもので、特徴的な姿の人面馬に乗っていくわけです。大体 13 世紀の後半くらいから―モンゴルによるユーラシアの征服後に、モンゴルの王族がイスラーム化して、イランを中心として建てたイルハン朝の時代に、ミウラージュ・ナーマというのが挿絵付きで大量に描かれるようになります。ちなみに、ムハンマド画自体はモンゴル勢力が入ってくる前から描かれていたものが残っています。13 世紀半ばの写本挿絵がムハンマド画として最も古いものだというのが今分かっているものなのですけれども、この初期の頃のムハンマド画というのは顔が描いてあります。そういうものを経てミウラージュ・ナーマというものが 13 世紀後半くらいから大量に描かれていくということになります。続いて、顔が描かれていないムハンマド画が登場します。大体 16 世紀ぐらいからメジャーになってくるというふうに言われております。つまり最初のころのムハンマド画というのは普通に顔が描かれていたのですが、あるときに顔を隠すという表現方法が発生し、ムハンマドを表すときに適切なものとして定着していくという過程がありました。なお、これは今のインドのものですが、人面馬、ブーラークが、インド版のものになって出てきたりするのです（二宮図 3）。これは繰り返しになりますけれども、別に祈りの対象ではないのですけれども、ただ身近に置く宗教的なアートとしてこういう形で、ミウラージュ・ナーマで親しまれたモチーフというのが表現されてくるということになります。ブーラークのクジャクの尻尾は古典的な絵画でも書かれていますが、このインドのものはパッと見た目の印象がだいぶ派手です。

続いて預言者の墓というのがありますという話です。これはメディナの預言者モスクというもので、正面から見て奥側の、緑色のドームがあるところというのが預言者の墓です。今サウジアラビアを支配しているワッハーブ派の人達というのは、非常に原理主義的な集団でありまして、イスラーム教徒の墓というのは簡素であるべきで、どんなに偉い人間でも立派な墓を作ってはいかんのであるというそういう急進的な思想の持主です。実はこのメディナの預言者の墓のそばにはかつて「永遠の楽園」墓地というものがありました。これも聖者崇拝、預言者崇敬のひとつの形なのですが「あやかり墓（ばか）」というふうに日本の専門家は呼ぶことがありまして、聖者様の墓のそばに墓を作ることによって、その聖性にあずかるのですね。イスラームの共通の理解として、墓にいる間も最後の審判まで墓で待機しているわけですけれども、悪いことをしていると墓の中で苦しめられたりするのです。けれども聖者様の墓のそばにいるとそういうことがありません。安らかに眠れるのです。それで復活の際には、聖者様のバラカの力によって一緒に天国に行ける可能性が高いということで聖者の墓のそばに墓を作るわけです。こういうものがあったのですけれども、今のサウジアラビア政府を牛耳っているワッハーブ派というのが、20 世紀にメディナを征服した結果、かつて「永遠の楽園」墓地にあった建築物は全て取り壊されてしまったというわけです。今でも墓

地らしいのですけれども、何の個性もない土饅頭が並んでいる、極めてつまらないものになってしまったわけなのです。実はこのサウジアラビア政府は度々、預言者の墓も気に食わないので壊すというようなことを言いだしているわけなのですけれど、その度に全世界のイスラーム教徒がそれはけしからんということで抗議行動を起こしたりというようなことがあります。

続いて「預言者聖遺物」というものがございます。これは現在のトルコ共和国のトプカプ宮殿にあるコレクションが一番有名です。例えばムハンマドのマントがあります。展示で見えるのは豪華な入れ物だけで、マント自体は全然見えないのですけれど、オスマン帝国の財力を尽くして、素晴らしい容器を作って入れてあるわけです。このコレクションの大元はアッバース朝という王朝が持っていたもので、モンゴル勢力がやってきたときにカイロに遷り、オスマン帝国のスルタンがカイロを征服したときにイスタンブールに持ってきたという、そういうものです。面白いのが墓の土ですね。甲子園の土じゃないのですが、豪華な容器に墓の土を入れてあります。更に歯もあります。あとは、髪です。髪と訳しますが、元の言葉は「毛」です。髭かもしれません。そして、足跡があります。この髭と足跡というのがとても面白いもので、これはインドにも結構あるのです。足跡や髪は増えます。特にインドにある有名な髪というのは時々枝毛になって増えて、枝分かれしてどこかに貰われていくらしいのです。ということで、結構小さな町のどこかのモスクが「預言者の髪」と称するものを持っていたりするわけです。そういうものが、最初に言った預言者生誕祭のときに御開帳されたりします。これはアフマダバードのシャー・アーラムという聖者の廟にあるものですけれども、この預言者の足跡はいつも見られます（二宮図 4）。あとこれはデリーの何かとんでもなくゴチャゴチャした地区の中にある足跡なのですけれども（二宮図 5）、この 2 つは由来が比較的分かっているもので、デリーのものは 14 世紀に持ってこられたものということになっております。足のサイズが各自全然違うじゃないかという野暮なことは言ってはならないということです。

これは最後になりますが、ひとつキリスト教や仏教と大きく違うところは、ムハンマドには子孫がおります。ということで、ムハンマド崇敬の現れ方として、ムハンマドの子孫、男系子孫、これをサイイドと言いますけれども、サイイドというのがイスラーム教徒の社会の中で特殊な地位を占めています。全てのサイイドが崇敬されているわけではないのですけれども、例えば今のモロッコ王家というのはサイイドでありまして、その血筋を誇り、その血筋ゆえにモロッコ王家になれたというような歴史があります。私が専門としておりますスーフィズムの師弟関係も、ムハンマドに発する系譜を持ちます。スーフィズムはイスラームの中でも若干特殊とされているような教えなのですけれども、ムハンマドに発するとされており、その教えがどういう師弟の関係を通ってきたかというような情報が系譜にされるのです。

ムハンマド崇敬について、ざざっとお話してまいりました。こういう形のもの―怪しげなと言ったら悪いのですけれども―ワッハーブ派のような人々から見たら、こういうもの全て、人類平等の中で特殊な人間を作った、崇めている、しかも偶像崇拝になりかねないとんでもない異端、というふうになるわけです。でも大半のイスラーム教徒はそういう堅いことを言わずに、ありがたいものとして日常接しています。今回事例をさまざま紹介したのですけれども、崇敬と言った場合に大きく大体２つの方向があるかと思うのです。一つは素晴らしい人に対して称える気持ちというものを出したようなもの、もう一つは、例えば病気が治りたいとか頭が良くなりたいというような、あるいは来世で天国に行きたいというような願いを込めるものと言っていいかと思います。それはムハンマド崇敬の場合、全体としてグラデーション的に繋がっているものではあるのですけれども、学問的に考える時にはちょっと若干違う方向性として考える必要はあるのかもしれません。基本的には今日お話したのは、だんだん後ろに行くにつれて―サイイドは除きますけれども―「預言者の墓」「聖遺物」あたりが願掛けの対象になりやすいものというような感じで整理をさせていただきました。

あと時間がないのであまり喋れませんけれども、預言者崇敬でとられる形というのは、預言者以外の聖者に対しても非常にとられやすいものであります。イスラームの神学的な理論では、預言者と聖者は理論的には違うということにされているのですけれども、その関係というのは学術的に分析するべきこととして挙げられますということになります。ということでちょっと長くなってしまいましたけれども、以上でございます。

「聖像と聖なるモノのエージェンシー：比較宗教美術史の試み」

秋山　聰

秋山でございます。この講演のタイトル、とっさに決めたものですが、少し後悔はしております。「エージェンシー」という人文学における最近の流行り言葉を使ってみたものの、あまりもともと難しいことが好きではないために美術史を選んだということもありまして、それほど理論的に難しいことを考えているわけではありません。具体的にはモノが持つ力、モノが作用する力という程度にお考えいただければと思います。これはもともと社会学や文化人類学における用語で、特に最近では文化人類学でアルフレッド・ジェルとかブリュノ・ラトゥールの影響もあって、広く人口に膾炙するようになっております。この用語は美術史学にとっても有用な部分があるので、最近使われ始めていますが、我々が使う場合、かなり単純化されて用いる傾向があります。僕自身も大体「作用力」ですね、要するに造形物が人に及ぼす力、というような意味合いでもっぱら使う程度です。この言葉が便利なのは、人とモノとをほぼ同格に見做すという点です。美術史学には伝統的にやはり制作者を芸術家と見

做して、こちらを主とし、作品に対しても圧倒的に芸術家が主導権を握ると考える傾向がありました。しかし受容美学などが1960年代以降影響を及ぼしてきて、美術史では80年代になって作品の受容であるとか、作品そのものが持つ機能・作用ということが言われ始めてきました。この辺りのことも大雑把には「エージェンシー」という言葉を使えば簡単に済むのではないかという気がしております。実際に特に近代以前の聖像の類を扱うときには、やはりモノ、制作者が分からないようなモノが特別な力を持つというふうに考える必要が出てきます。「エージェンシー」という言葉は使っておりませんけれども、ドイツでは「行為する（彫）像（Das handelnde (Bild)Werk）」いうような言葉が用いられてきていますし、最近では、ジェルやラトゥールの文化人類学ではなく、オースティンやサールの言語行為論から着想されたと思われる「Bildakt（イメージ行為論／イメージ動態論）」がドイツの美術史家ホルスト・ブレーデカンプにより提唱されています。本日も、「エージェンシー」を専ら像が人に及ぼす力ということにして、話を進めて行きたいと思います。ここ10年くらいいろいろ勉強しようとしながら、なかなかまとまらないままきている「像の生動性」というテーマについてです。聖遺物に関しては、2009年に1冊の本（『聖遺物崇敬の心性史―西洋中世の聖性と造形』、講談社　2009（現、講談社学術文庫、2018））にまとめたのですが、その段階で「まあ4、5年中に聖像についてまとめられるかな」と思っていたのですが、大変甘い考えで、今なおまとめきれておりません。しかしキリスト教の中近世においては、神が地上でその力を発揮するメディアとしては、かたや聖遺物、かたや聖像であったことは恐らく確実なので、やはり美術史家として探究すべき重要なテーマであろうとは思います。そこで本日は、これまで、とにかく右往左往しながらいろいろ調べてきたことの一端をお話させていただきたいと思います。キリスト教中世、特に西欧キリスト教社会において像がどのような作用を人に及ぼしてきたのか、あるいは像がどのような作用をするかという期待を持って人に見られてきたのかということを雑駁にお話させていただきます。

最初に一例、「ヴュルツブルクのノイミュンスター聖堂の磔刑像」[秋山図1] をお示しします。正確に言うと「磔刑像」と言ってはいけないのかもしれないのですが、この像、何がおかしいかということはすぐにお分かりになるかと思います。学生さんに「これ何？」って聞くと「キリストの像」という答えがまず出てくるのですが、正確に言うとこれはキリストの像ではなくて、「『キリストの像』の像」と言うことになります。というのは、キリストがこのように自分で十字架から両腕を離したという記録はもちろん聖書等にはありませんし、実際に両手を外すことができたら足も外せたろうから降りてどこかへ行ってしまったに違いないのです。ですので、これはキリストの生涯の一コマを表わしているわけではなくて、キリスト像を巡る奇跡を示しているとしか考えようがありません。ではどのような奇跡かというと、参考になるのが、十字軍の呼びかけに大いに貢献したことで知られるクレルヴォーのベルナールという神学者を巡る伝説の一つ、「キリスト磔刑像が現れて彼を抱きしめた」と

いう奇跡です。中世後期の絵画にしばしばみられる磔刑のキリスト像に抱きしめられるベルナールという図像は、僕自身キリスト教徒ではありませんので、一見ホラーにしか思えないのですけれども、当然キリスト教の方から見ると、これは大変な恩寵であるということになります。この奇跡についての初出の文献では「磔刑のキリスト像が出現し」となっており、磔刑のキリストはヴィジョンとして出てくるのですが、その次の段階の伝説以降は「祭壇上に置かれた磔刑像」とあり、モノとしての造形物が動いたというふうに記述されてまいります。

キリスト教中世で有名な像が動いたり喋ったりする、これをとりあえず「生動性（せいどうせい）」というふうな言葉で説明させていただきたいのですが、生きて動くという性質が重要となります。例えばアッシジの聖フランチェスコに向かって磔刑画像が喋りかけたという有名なエピソードでは、「描かれた唇を動かして、語りかけた」とあります。それでこちらの画像は現存しておりまして、確かに画像ですので両手で抱擁するというのはさすがに現実性に欠けるということからか、喋っただけのようです。このように像が、いろいろなところである段階から蠢き始めるということに興味を持って、以前少し調べてみたことがありまして、それを中心に今日はお話させていただきます。

聖像については、しかし教義との整合性と言う点が非常に難しいようです。と申しますのも、聖遺物に比べてその聖性の原理が曖昧だからです。聖遺物と聖像が、キリスト教の中近世における、神が力を地上へ発揮する為の重要な二大メディアであったと申し上げましたが、聖遺物の方は非常にはっきりとしています。神に由来する力、何らかのパワー、あるいはエネルギーというものが聖人の身体に宿り、それが聖人が亡くなっても遺体に宿り続け、そしてその遺体はどんなに分割されてもあらゆる欠片に宿ります。今日は多分「歯」というのがこの後あちこちに出てくると思いますが、歯でも爪でも髪の毛でもいいのです。ですから遺体全体を持っていることが大事かというと、それに越したことはないかもしれないけれども、歯が一つあれば十分、効能は同じだというふうに理解されます。その聖性は、とりあえず「力（パワー）」と訳しましたが、ラテン語でいう「virtus」、ギリシャ語だとdynamis、ダイナミックの語源ですが、virtus とか dynamis と言われます。身体聖遺物（Body Relics）というのは聖人の体の一部で、これは絶対的にその力が宿っているので聖なるモノであるといえます。そしてこの virtus はどんどん伝染するというふうにお考えいただければよくて、学生諸君には「t を取ってみると virus になる」などといい加減な説明をしていますけれども、とにかく接触によってどんどん移っていくので、聖人が身にまとったものとか、生きながら皮剥ぎの刑に処せられた聖人の皮剥ぎに使ったナイフとか鞭打ちのときの柱とか、こういったもの（接触型聖遺物 Contact Relics）にも接触によって力が宿ります。このように聖遺物に関しては非常に簡明な原理があるのですが、聖像はそもそもユダヤ教から派生したキリスト教では本来は認められないはずのもので、モーセの十戒の中でも

「神の像を作るなかれ」とあります。

とはいえ常に例外は存在していて、早い段階から実は周縁地域では立体のキリスト像が作られていたというような史料（エウセビウス『教会史』等）もあるようですけれども、公にはビザンチンの方でイコンが早々に普及し始めます。ただこれは専ら絵画でして、立体ではありません。しかも最初期の段階ではこれも実は聖遺物であるのだというエクスキューズが準備されていて、人が描いたものだということが前面に出されると、恐らくそれはいけなかったという状況があります。これに対して西ヨーロッパではどうかと言いますと、結構長らくイコンはモノだからだめだという意見が主流をなしていました。東ローマ（ビザンチン）側で正規に認められるようになっても、西側では長い間聖遺物は尊ぶべきだが、画像はだめだとされ、当然立体像もここではだめな方に含まれております。

事実、初期キリスト教時代にはさまざまな偶像破壊の記録が残されております。テオドレトス（『教会史』）によると、神官が神像の中に入って喋っていたことがばれて、それで破壊されたという事例が出てまいります。ちょっと先取りしますと、こういうことをしておきながら、実は中世後半になってきますと、キリスト教でもさまざまな仕掛けをもった像が作られるようになって、やがて宗教改革者たちが同じように暴いて破壊するということが行われます。

そしてどうもその 12 世紀、13 世紀辺りが転換期に当たるのですけれども、12 世紀半ばの『皇帝年代記』の中には異教の神像、ギリシアの神像と聖遺物との対決…とまではいかないのですが、その競り合いという物語があります。ややこしいことにメルクリウスという神像と聖メルクリウスという同名の聖人の遺体が競り合うのですけれども、「神様の方のメルクリウスの像が口をきいただけではなくて、皇帝の手に噛みついて離れなかった。自分の為に神殿を建ててくれると約束するまで離れてくれなかった。結局ユリアヌスはそれでキリスト教を捨てて、ギリシアの神々への信仰に復帰したのだ」というかなりいい加減な話ですけれども……。そうしたら聖母マリアの方が今度は聖メルクリウスの遺体を起こして、つまり墓に眠っていた遺体に命じて、ユリアヌスを殺させたといいます。拡大解釈するとこのエピソードは、像に対して聖遺物がいかに強いかというか、あくまでもやはり聖遺物が正統なものであって、像は異教の、敵対宗教のものなのだという意識がうかがわれるように思います。

やはり「異教の像って怖いね」という感覚は、この時代の書物にはところどころ出てまいります。これ（マームズベリーのウィリアム『英国国王の事績』より）もわりと有名な話ですが、ヴィーナスの像が置いてあってボール遊びをしようという男性がその指輪を傷つけてはいけないからと言って、その像の指に自分の指輪を嵌めるのですね。そうしたら像の指が曲がって、その指輪が取れなくなってしまったという話です。それだけではなくて、夜、妻と共にベッドに寝ていたら、どうも妻との間になんかよく見えない、よく分からないのだけ

れども障害物があって、妻を抱きしめようとしたらそれが邪魔をするというのです。何かと思ったらこれがヴィーナスで「あなたは私を妻としたのだから、私と一緒になりなさい」と言います。という一応、怪談に近い話なのだと思いますが、こういう話がまことしやかに書かれているのです。ただ 12、13 世紀が転換期だというのは、この次の話が全く同じなのですが、ヴィーナスではなくて聖母について語られ始めるからです。ほとんど話は一緒なのですが、こちらの場合（アルフォンソ 10 世『聖母マリアのカンティーガ』第 42 話）は妻ではなくて、最初は婚約段階だったのだけれども、結婚したら、やはり寝台にマリアが横に寝ていたという話です。結末は、こちらの方はこの青年は「すぐに起き上がり、一月の間、森をさまよい、後に、棕櫚の木の茂る森の洞窟に隠者として棲み、聖母に仕えた」というきわめてキリスト教的な話になっています。先程のヴィーナスの方は祓魔師、魔術師のような人に頼んで結局それを調伏してもらうという全く違う結末になっています。

この辺りからキリスト教の聖人、マリアやイエス、あるいは聖人の像が動き出し始めたような気がするのですけれども、同時にその像に対してもちゃんと崇敬しなきゃだめですよというような話も出てまいります。これ（ハイスターバッハのカエサリウス『奇跡をめぐる対話』第 8 章第 25 章）もかいつまみますと、聖遺物容器として使われていた磔刑のキリスト像から聖遺物が取り出された。そうしたらもうその像は重要じゃないよね、と考えた鐘撞の男性がその像に対して十分な敬意を払わなかったところ、夜、その像がやってきて怒りながら彼を殴って、大変な病気になったという出来事です。つまり聖遺物および聖遺物を収めた容器が大事で、聖遺物を収めていない像が重要でなければこういう罰は当たらないはずなのですけれども、像そのものも尊ばなければならないということがこの話の背景にあります。実際この 12 世紀、13 世紀の書物を見ていくと、本当にたくさん像が蠢く話があります。例えば今引用した、ハイスターバッハのカエサリウスの著作から主だったものを並べてみても、いろいろ像が動きます（会話する聖母子像、跪く聖母像、汗をかく聖母像、修道女を殴打する磔刑像、聖母の王冠をかぶる幼子キリスト像、抱擁する磔刑像、お辞儀する磔刑像、向きを変える聖人像（画像）・聖女像、出血する磔刑像ほか）。それからアルフォンソ 10 世の『聖母讃歌』でも、これはあくまでもごく一部なのですが、さらにたくさんさまざまに像が動きます（出血する幼子イエス像、母乳を出す聖母像、後ろの人を救うために膝で矢を受けた聖母像、悪魔によって落下させられるところを聖母像に救われた画家、幼子イエス像に投げつけられた石を肘で防いだ聖母像、祭壇から降ろされる度に祭壇上に戻る聖母像、修道士が逮捕された時に叫んだ聖母像、感謝の意を述べる聖母像、お辞儀をする聖母像、手招きする聖母像、少女に幼子イエス像を渡す聖母像、聖堂内を勝手に移動する聖母像、寝台で寝返りを打つ聖母像ほか）。

それだけではなくて、この時期以降になりますと女子修道院でもさまざまに像が動くのですね。なぜかと言うと、彼女たちは小振りな幼子イエスの木彫像を所有することが認められ

ていて、こういったものを自室に持ち帰って、これをあやすふりをします。つまり聖母マリアの立場に身を置いて、日々敬虔な信仰生活を送ることが推奨されていました。要するに平信徒や修道女に対してはこういったものがないと、十分正しい信仰深い生活を送れないだろうというふうに神学者や教会が考えていたようなのですね。こうした裸体の幼子イエス像は、着装することが想定されていたようで、つまり着せ替え人形の要領で、修道女たちは本当に母親の立場でイエスの面倒を見たようです。実際、例えば抱いていたキリスト像が突然人の体になった、本物のイエスになってしまった、驚いて手を握ったら強く握り過ぎて腕が取れちゃったという、これもよく分からない話ですが、あるいはキリスト像が夜泣きをして睡眠を妨げられたので、その度に抱いたり揺り籠を揺すったり、接吻したりして泣き止ませたというような話が伝わってきています。

こういう伝説が満ち溢れてくると、では次にどういうふうに展開するかということが問題となります。像が動いてくれるかもしれないという期待を持った人々が多くいる中で、「じゃあ像を動かしてみましょう」という方向に話が進むのは、自然の理かもしれません。教会で行われる儀礼の中で、さまざまに像が重要な役割を果たすようになります。これを僕自身は「像と人との共演」というふうに言ってみたり、あるいは「像の生動化」というふうに言ってみたりしておりますが、具体的には例えば両腕が体側に折り畳めるキリスト像です。「可動腕付き」というふうに、ドイツ語を直訳するとそうなるのですけれども、なんと初期ルネサンスを代表する彫刻家ドナテッロ（Donatello）が作ったものもフィレンツェのサンタ・クローチェ聖堂に現存しております。こうした磔刑像は聖金曜日に十字架から外して、両腕を体側に折り畳みます。では折り畳むとどうなるのかというと、なかなかいい感じに埋葬にふさわしい形に折り畳めるようになっています [秋山図 2（磔刑時および埋葬時）]。聖金曜日に十字架から取り外して折り畳んで、そしてどこに入れるかというと、一部教会には石像で聖墳墓、キリストの墓というのが作られて今でも残っているところがあるのですが、こういうものを作ったところにはここに葬ります。それから場合によっては可動式の台車付きの木造墓というものがあったりしまして、ここに葬ったり、もっと簡便には要するにシーツのような白い幕を使って一時的にエフェメラル（ephemeral）な墳墓を作って、そこに埋葬するということが行われていました。

こうしたものの中で少し時代は下るのですが、大変リアルなものを一度見に行ったことがありまして、これはその時に撮らせてもらった写真です [秋山図 3]。躯体は木造なのですが、その上に牛の皮をかぶせているので大変リアルに見えます。それで頭がつるつるに見えるのは、これはカツラないし植髪していたからです。髪の毛の方は失われていますが、髭の方はまだ若干残っていまして、辺鄙な場所までかなり苦労して見に行ったのですが、あまりこの前に長くいたいと思わないくらいリアルなものでした。寺男の人がずっと横にいてくれるのが、通常だと煩わしいのですが、この時は「どうか傍にいて下さい」という感じで、

ちょっと一人で残されるのは嫌だなというくらい迫真的なものでした。首の所にも実は仕掛けがありまして、恐らく息を引き取る時にガクンと前方に倒れるようなそういう仕掛けが施されています。更には体内には、液体を納める入れ物も設置されていて、恐らくあそこに血としての赤い液体を入れておいて、そしてロンギヌス（Longinus）役が脇腹の傷口を槍で突くのですね。傷口は多分蝋で固めてあって、槍でそこを突くと血のような赤い液体が流れます。もうそこまでどうもやっていたということがうかがえる像です。こういったもので年一回、キリストの死そのものが非常にリアルに再現されるということが、どうも 14 世紀以降ヨーロッパ各地で行われています。ドイツは比較的遅くて 15 世紀以降――これは多分 16 世紀なのですけれども――いちばん古いものとしては、トスカーナの辺りで 14 世紀初頭のものが数点確認されています。あとはイベリア半島でも、それからボヘミアでもなお確認されつつあります。その一例としては、ブルゴス大聖堂の磔刑像が挙げられますが、19 世紀の段階では人間の皮膚が使われているというふうに信じられていたというくらいリアルな像です。僕自身実見したことはありませんが、15 世紀の末にカスティリャのイザベラ女王がこれを特に見たいと言って、よせばいいのに梯子を掛けさせて間近に見たところ、気を失ったという記録があるぐらいです。

それからもう一点、昇天儀礼用キリスト像というのを簡単にご紹介しておきます。左端と向こうから二つ目に、頭の上に輪が取り付けられていることからもご想像いただけると思いますが、天井の真ん中あたりに穴が、ゴシック教会には多く開けられておりまして、それはドイツではヒンメルロッホ（Himmel Loch）＝「天の穴」という名前まで付けられているのですね。そこに引き上げる為のキリスト像です。昇天の際に教会の天井裏に引き上げられます。つまり「キリスト昇天」を再現するための像です。これも結構たくさん現在では確認されております。これはフリブールの美術館にあるもので、実際ちょっと流線形に昇ることを明らかに想定しての造形となっております [秋山図 4]。ちなみに全ての像の頭に輪が付いているわけではないのですね。これでも輪が付いているものと付いていないものがありますが、付いていないものにはマンドルラという光を表現した枠に据え付けられて、その枠ごと教会の天井まで昇ります。こちらがそれを描いた銅版画で、これはプロテスタントの立場から「カトリックはこんな愚かしいことをやっている」と攻撃する為の文献にこういう版画が用いられています。この種のことに関しては、実際これをやっていた側に、式次第書 (Ordo) みたいなものはあるのですが、なかなか詳しい資料は残っていないようなのですが、むしろ批判して攻撃する立場のプロテスタント側に存外面白い資料が残っていたりするというのも特徴です。一点大変僕が気に入っているのが、ダルムシュタットにある可愛らしいものなのですが、この像をこれだけ見ると単なる復活像で昇天だとなかなか思わないかもしれないのですが、よく見ると台座は雲の形状です [秋山図 5]。更に台座の下を見ると、足の裏が造形されています。単純に考えてあり得ません。ここに足があるのに、足の裏がそこ

にあるというのです。何の為かというと、明らかに引き上げることを想定していて、実際聖書でもキリストを最後に弟子たちが目にするというのは昇天の場面なのですが、昇天のときに弟子たちが最後に目にするのは、キリストの身体部位のどこかというと足の裏なのですね。その足の裏をここでは台座の下に表象することによって、弟子と同じ立場に、その教会でその儀礼に立ち会った人たちを置くことができます。そういう着想だと思います。

これはとても有名な装飾写本、『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』からの一葉 [秋山図 6] なのですが、ここでもまた違う種類の演劇的役割を担う像が描かれているのだろうというふうにヨハンネス・トリップスという研究者が言っていて、僕もそうだろうと思いますが、ここに描き込まれた天使はミサの際に水差しとか聖体の為の容器とかを持って祭壇上に降りて来るように演出された天使像だと考えられます。聖霊としての鳩の像が中に聖体を入れた状態でやはり上から降ろされて来るというようなことも行われていたようでして、こうした天使像や聖霊としての鳩の像については、実際に資料上、教会の所蔵目録等からも存在は明らかになっています。

割とさまざまな形で像を使って、人と像が共演する形の儀礼が行われ始めたということは、間違いはないようです。他にも例えば、セビリア大聖堂の聖母子像も、仕掛けがあって首等が動きました。今ももちろん仕掛けは残っていると思いますが、今は動かしていません。「こんなことをしていて本当に大丈夫だったの？」と思われるかもしれませんが、ばれると大変でした。実際、ばれなければ「奇跡」として人々が集まったりすることもあったようですが、1399 年のイタリアで発覚した事例では「調査したところ、やはり内部に空洞があり疑似血液と水を入れた皮袋が内部に装着されていることが判明した」と先程ご紹介したドイツの作例とそっくりの記述が、ルカ・ドミニチの日記には出ております。それから、こちらはセビリア大聖堂の聖母子像に似たものだったかと思われますが、マルティン・ルターも『卓上語録』の中で、大変人気のある巡礼地の教会の聖母子像について「裕福な人がやってきて祈ると幼子イエスが母親の方を向いて、あたかもその男が重ねた罪から目を背けるかのように振る舞う」と述べています。それでその人が何とかしようと思って修道院に多額の寄付をすると、幼子イエスは再び彼の方を向くということで篤い崇敬を集めていたけれども、実は内部が空洞で蝶番と紐により操作されていたということが露見したとルター自身が語っています。また、ヘンリー 8 世治下のイギリスでも、ボックスレイの恩寵の磔刑像（Rood of Grace）という篤い崇敬を集めていた磔刑像の内部にからくりが発見されて、わざわざロンドンまで持ってこられて、民衆の前で破壊されています。

結局、仕掛けを施していることを隠しながら、あたかも本当の奇跡だというようにして見せると、これはだめだったようで破壊の対象になるのですが、そもそも仕掛けがあることが皆に知られていた像を使って儀礼をやるということは可能だったとしか考えようがないのですね。先程の腕を折り畳めるキリスト像というのは、1967 年のタウバート夫妻による論文

が最初の包括的な研究ですが、その段階で六十数点確認されていたのですが、もう今は百を優に超える、より広い地域で確認されております。どうやらみんなに「道具として使うのだ」ということが前提として共有されていれば、こういうことが中世の後半には可能になったようです。「エージェンシー」と言いながらちょっと特殊な例ばかりをご覧に入れているのですが、とにかく像に動きを与えるということは非常に効果的にエージェンシーを人々に伝え得たということは言えるのではないかと思います。

最後に、もう終わりにしますが、「比較」ということがこのシンポジウムのタイトルにあったものですから、何か「比較」を示さなければならないと勘違いして少し準備してきたものがあります。「像と人との共演」というのが、日本の仏教文化ではどうかというと、実は練供養が典型的な事例と言えます。ただし現在主要な練供養を行っているお寺では、像がほとんど用いられていないので、例えば当麻寺とか有名でも、なかなか認識しにくいのですが、当麻寺縁起絵巻には確かに阿弥陀如来の像が重要な役割を果たしているかのように描かれておりますし、当麻寺をはじめ幾つかの寺には実際にかつて使われていた像がいまなおあるようで、「被り（かぶり）仏」とも言うようですが、実際に人が入ってしまえる木造の仏像というのが現存しているようです。その像を今なお使っているのが、岡山県の弘法寺だということで６年ほど前に一回見に行ってまいりました。これも像として置かれているときと、人が入って動くときと、かなり大きな違いがあって、非常に面白く感じましたので、少しご覧いただこうと思います [秋山図 7]。阿弥陀如来像をかぶった人がお辞儀をするだけなのですが、像だけを見るのとはかなりインパクトは違うのですね。ですからどうしてもやはり美術史をやっていますと、物を静止状態で見ることに慣れているのですが、やはり動きを持ったときにどういうエージェンシーを発揮するかを考えるためには、こうした儀式を参観するというのは大事なことではないかと思った次第です。この後、像を脱ぐという場面があるのですが、時間の関係で端折った方がいいかと思います。像は脱がれた途端にやはりモノに戻るような印象を受けます。あとは年に一回あるいは数日間、ああいう儀式が行われるとなると、キリスト教でもそうなのですが、日頃は静止状態の画像であるとか彫像、これが年に一回動くというのは、やはりそれが仕掛けによるものだと分かっていても、奇跡に一歩近づく、あるいは奇跡の再現とか実演というふうに受け取られ得たのではないかと思います。これは、仏教でもキリスト教でも、割と似ているのかなという印象を持ちました。

最後に比較に関して、あと若干付言して終えたいと思いますが、そもそも僕自身がこういう比較宗教美術史的なものに興味を持った最初は、留学中に読んだハンス・ベルティンクの本のあるページ（※注：『イメージと儀礼：「芸術」の時代以前のイメージ』）でして、西洋中世についての分厚い研究書なのですが、聖遺物と聖遺物容器の「同盟関係」に関わる章の中に、突然地蔵菩薩像が出てきて「なんじゃこれは」というので鮮烈な記憶がありました。像の機能というような点に着目すると、意外に比較というのは容易に出来るのだというふう

に感じて、将来何かやれればなと思っていたのですが、その後、諸般の事情で死生学という新たな学問分野の枠組みの中で比較宗教美術史的なシンポジウムを企画しろと言われて、3つ4つ企画しなければいけなかったものですから比較の対象をいろいろ考えたり探したりしてみました。例えば禅林寺永観堂の見返り阿弥陀だって像が動いたというような観点から見たら面白いのではないかなと思いましたし、あとは植髪あるいは鬘の利用ですが、日本では鶴林寺の聖徳太子像が有名ですが、これも東西双方にあります。それから着装も、仏像については文化庁の奥健夫さんに包括的な研究がありますが、例えば広隆寺上宮王院の聖徳太子像は、天皇が即位する度に、新たな衣装が贈られ、着せ替えられるそうです。それから着装像でもある鎖大師と言われる弘法大師像（鎌倉、青蓮寺）は膝が加工されて曲げ伸ばしができるのだそうですが、これは浅井先生にむしろお伺いしたいところです。そうすると肘や膝を球体関節により可動化したキリスト像と同じような発想が、日本の仏像制作にもあったのかもしれません。特に着装像の場合は着替えさせるためには、像の四肢が曲げ伸ばしできた方がいいというのがあるので、面白いなと思いました。

像というものは本来、今日のように加工されたモノであると無前提に認識されてはおらず、むしろ動いて当然、あるいは動くことを期待されていたのではないかという気がいたします。国立民族学博物館の人類学者の人達の研究グループに入れてもらっていたときに、「西洋中世では像は動いていたのですよ」と言ったら、ほとんどの人に「当り前じゃないですか」というか「像は動くのではないですか。生きているのではないですか」と言われてびっくりしたことがあるのですが、西洋近代の「芸術」概念によって我々の像への感性というのは、大きな変容を遂げたのではないかというふうにも、思っております。ということで、ちょっと延長になってしまって申し訳ありませんが、終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

「聖徳太子に顕現される聖なるものと聖徳太子宗教テクスト文化遺産の探究」

阿部泰郎

龍谷大学の阿部です。イスラームにおけるムハンマド、そしてキリスト教におけるイエスを始めとした聖像という、二大宗教それぞれの聖なるものについてのご報告に大きな刺激を蒙りました。また秋山先生の「エージェンシー」という視点を、私も敢えて意識して、日本における聖なるものについて見てみたいと思いますが、それを端的に、日本においてまさに名前そのものが「聖なる」ということばを負っている聖徳太子について考察を試みましょう。聖徳太子は、日本における仏教の興隆のシンボル、仏教伝来と共に作り上げられた、あ

るいは自ら担った存在であるといえましょう。仏教の聖なるものは何より仏陀、釈迦というべきなのですが、日本にあっては釈迦だけに終わらず、むしろそれ以上の太子という存在が作り出され、それが仏法の世界だけではなく、王法と言われた、国家のシンボルともなった、ナショナルな聖なる存在として現れました。むしろ作り出されたといえましょう。今日の発表のコンセプトもしくは方向性とは、太子において体現される聖なるものとは一体何なのか、という問いです。それは国家の形成、古代日本国という世界の形成と不可分であると仮定して捉えられると思うのですが、それは何よりも端的に最初の正史としての『日本書紀』において示されます。『日本書紀』の推古紀を中心にしたテクストの中で、太子、まだ聖徳とは言われないで上宮太子と呼ばれるのですが、厩戸王であった皇子が、日本書紀の中では皇太子でありかつ摂政として、推古天皇と共に国家の中心となってまつりごとを司る。その上で十七条憲法という日本の古代国家のまさに根幹をなす、太子が自ら作ったテクストを通して日本国家を形成していきます。その役割は古代に限らず、むしろ古代以降に更に新しい伝記とイメージを与えられて、太子像というイコンが作り出されていくことになります。それだけでなく、その太子の生涯が絵伝となって説話イメージのうえに物語化されて流布します。それもまた歴史の一部になっていき、更には宗教的な世界、日本の仏国土を作っていくことにもなります。それは単に国家次元では終わらず、民衆の間にまで広がって、民俗世界の中でも太子という存在が非常に重要なアイドル（偶像）になっていきます。このような太子を巡る現象の全体を見渡した中で、今回お話できることは限られております。これまで私の勤めておりました名古屋大学では、テクスト学という人文学の一つの大きな方向性を作り上げていこうというプロジェクトを立ち上げ、取り組んでおりましたが、その中でも特に宗教は、一番突出してテクストを徹底して活用、あるいは展開させる、そういう領域であると思います。その中で常に普遍性を志向するのがテクストの側面であり、逆に普遍性がテクストという視座からはっきり見えてきます。今日も比較宗教学、あるいは比較美術史からテクスト学を意識して取り組んでみたいと思います。その入口として５つの視点から、太子という日本における聖なるもののアイドルの存在を普遍化してみたいと思います。

第一にまず古代において作られた宗教的空間＝場（トポス）、第二にそこにおいて太子がどのような行為、営みを行ったか、更に第三、その上で太子がどんな属性、アイデンティティと言ってよいですが、それを獲得したのか、与えられたのか。第四にはそれをどのような儀礼を伴って、あるいは儀礼によって遂行することでそれが為され、現れたのか。第五にそれを担ったメディア、媒体というのは一体どんなものであったかです。これは当然イメージの問題、あるいはモノ、物質性に関わってくることになります。その上で、太子の聖なる「イコン」―とキリスト教の言葉を借用させていただきましたが―イメージとしてあるいはモノとして現れる、その仕組みやはたらきが捉えられると思います。

古代日本の仏教国家を作り上げた、いわば cultural hero とでも言いましょうか。実際に

単なる culture（文）だけではなく、仏法を滅ぼそうとする守屋を討つ、武の上でも活躍した英雄（hero）、それが聖徳太子であります。そうした姿はたらきが単なる厩戸王からやがて上宮法王、まさに仏法の王となっていく過程であらわれます。単なる太子ではない、「王」なのです。「法王」という称号にこそ、古代王権を仏法から体現するような存在として、仏法と一体であるところの王権を象徴するようなオブジェとしての太子という存在が、歴史的に創出されてきたことを端的にあらわしております。そのように歴史の中で認識し、あるいは積極的に生み出していく、そういうはたらきを担う主体が一体誰であるのか、何者であるのかということを最後には問うてみたいと思います。こうした過程で太子特有のイコノロジー（iconology）というものが析出できればと思っている次第です。そこで、全体の見取り図のようなものを提示したいと思います。まず、その世界の最初期の空間である古代の太子の宗教空間を見てみましょう。法隆寺には、西院伽藍の法隆学問寺に加えて、その東にかつて太子の斑鳩の宮があったとされる故地の上に、東院伽藍とも呼ばれる、上宮王院が作られました。その正堂、夢殿という名前で知られる八角円堂が中心に位置し、その本尊として、太子の御姿でもある救世観音菩薩の像が安置され、これは帳（トバリ）で隠されており、厨子まで当時のものが残っておりました。[阿部図 1]。この観音像を巡っては、時の聖武天皇の皇室ファミリー、光明皇后やあるいはその母親の橘三千代、さらには皇太子でもあった阿倍内親王（孝謙・称徳天皇）も含めて、当時の宮廷の中心となった人々と、造営を実際に担った行信という僧侶、これらの人々から「太子御持物」という、かつて太子が所持されたとされるさまざまの遺物、経典から日常の道具その他に至るまでいろいろなレベルの宝物が施入されたということが分かっております。それらは当時の資材帳にリストアップされています。記録されているのはもちろん主なものにすぎませんが、そうやって上宮王院は太子の聖地、あるいは聖廟、霊廟と言ってもいい空間が創り出されました。ただ墓ではありません。太子の墓は別にあって、しかもその墓が崇拝されるようになったのは、11 世紀からのことであり、上宮王院はあくまで霊廟なのです。そこに聖なる太子像が安置され太子の聖遺物が集められて創建されました。これはあとでお話いただく浅井先生が論ぜられる、東大寺大仏、聖武天皇と光明皇后によって作られた国家的かつ世界的な大事業ですが、これとほぼ同時代に成立し、しかもその主体が同じなのです。もしかしたらセットという可能性さえ考えられるでしょう。こういう空間が、何度も改造・修理を経ながら今もそのまま残っております。フェノロサによって封印を解かれた、この秘仏の救世観音像は創建当時より遡る飛鳥時代の古像であって、しかも後世にはこの像は太子等身の姿として実際に拝することのできない霊像と化していきます。このような記念的な霊廟空間の宝物の中に、太子が自ら大乗仏教の経典を講説し、これは『日本書紀』にも書かれておりますが、さらにはその注釈書まで自ら筆をとって著した聖典を、太子自身が書きあらわしたとされるテクスト（法華義疏）を加えております。歴史の上に最初に登場するところから、そういう宗教テクストの制作主体としての

太子が立ちはたらくのです。そのイメージは、法隆寺では勝鬘経を講讃する時の太子の姿が勝鬘経講讃図として制作されます。［阿部図２］これは推古天皇の御前で行う姿とされ、図の一角には舎利がディスプレイされております。法隆寺ではこれが代表的な太子のイコンでありましたが、聖典テクストの方は法華経です。こちらはまさに法華経そのものであり、先世の（弟子の）御持経という一巻の細字法華経です。また、それを基に太子が自ら筆をとって注釈した、四巻にわたる『法華義疏』という注釈テクストが備わります。当時の最先端の仏教学の所産としての大乗仏典注釈が法隆寺では太子の名の元に作り出されているのですが、その初めのところにはわざわざその神聖性を示すように、「此れは是れ、大倭国の上宮王の私の集なり。海の彼方の本にあらず」という断り書きが明記されています。いかにも嘘くさい作為と思いますけれども、このようなテクストによって証明される太子の主体的な宗教テクストの創出、それは非常に国家的なアイデンティティ確立のために作り出されたものと考えられます。

一方、伝記のうえでも、独自な太子のアイデンティが創り出されました。これもやはり法華経絡みなのですが、最も初期の太子伝の一つとして、鑑真と共に来朝した唐の僧侶であった思託が太子の伝記を書いています。それは『上宮皇太子菩薩伝』と題されました。この皇太子菩薩というのが、伝記というテクストを通して与えられた太子のユニークな属性というわけですね。王としての菩薩、皇太子としての菩薩です。そしてその菩薩は、前世中国の僧侶であって六代中国で生まれ変わり、最後の七代目に日本の東海の王子となって生まれました。その前世、六代目の転生は中国の衡山という仏教聖地の南嶽恵思という法華持経者、かれは天台大師のお師匠さんにあたりますから中国仏教においても非常に重要なキーパーソンでありました。その人の生まれ変わりであるという神話が、実は鑑真の来朝に際しても、それが単なる伝承ではなくて事実として共有されていたからこそ、太子の故国にやってきたのだと鑑真の伝記（『唐大和上東征伝』）には書かれております。さらに面白いのは、この恵思のイメージと太子のイメージが、天台・真言の顕密仏教の高僧像として体系化された一連の祖師図像の中に、恵思と太子は位置付けられていることです。［阿部図３］

更に面白いのは、伝記の伝承が新たな宗教テクストを生むことです。その再誕転生伝承が中国の側でも受け止められて、先程の三経義疏の中の『勝鬘経義疏』が、中国に渡されまして、中国の坊さんがこれに注釈を施しました。その注釈の序文にはその再誕伝承が明らかに書かれていて、中国と日本で共有されていたことが分かります。その注釈がまた日本へ、慈覚大師円仁によって五台山からもたらされ、更にそれが円珍によって天王寺にわたり、天王寺からは今度は叡尊が法隆寺に写し伝えたという壮大な流れが知られます。このことは王勇教授の『聖徳太子時空超越』によって解明されました。その結果、天竺インドの仏在世のときのお妃である勝鬘夫人は太子の前世であったという伝承が生じ、これで三国の仏教伝来は勝鬘夫人の后妃身、そして恵思禅師の比丘身、そして太子が小王身という観音の変化身それ

ぞれの現れとして認識されるという体系もできあがるに至ります。

そうした太子像というのは常に法隆寺や、あるいはもう一つの重要な太子の聖地である四天王寺で祀られておりました。その四天王寺は、太子を聖霊として、つまり人を神としてお祀りする聖地となります。そこに、四番目の儀礼の視点が注がれます。四天王寺全体を挙げて行われるのが聖霊会、太子の御忌日における盛大なセレモニーとして、毎年4月22日に一日をかけて催される盛大な舞楽法会です。舞楽付の四箇法要という古代仏教の儀礼の一つの頂点を成す大法会が現在も繰り広げられています。天王寺舞楽という、この舞楽法会を担う芸能者達も、太子の時代以来ずっと連綿として受け継がれている、そういう儀礼芸能の職能者の世界が存続しているわけです。これは天王寺だけではなく、法隆寺の方でも上宮王院を中心として古代寺院の法要を、聖徳太子を本尊として営んでおりました。ただそれは天王寺に比べるとずっとコンパクトなものに過ぎず、古い段階のものはよく分かっておりません。ただ天王寺の場合は後世まで聖霊会と並んで舎利会も行なわれ、太子ゆかりの仏舎利も天王寺の金堂に納められて、常に奇跡を起こすことで有名でした。時々無くなって祈りによって出現するという奇跡を起こしていたのですが、その舎利を本尊とする舎利会も行われていました。舎利会とは、古代日本仏教において、唐の古代仏教儀礼を移入して、日本的に展開させたものです。これには舎利を担ぐ八部衆や、菩薩その他いろいろな仮面の行列が出ます。元は舞人楽人たち芸能者が担った行道する法会として今も盛大なセレモニーを展開します。さらに論義と舞楽の芸能を含めて総合的なページェントを繰りひろげるのです。法隆寺の場合は、西院伽藍の僧坊を改造して、院政期に聖霊院という新たな太子祭祀の場が作られ、こちらは屋内で行う講式という儀礼台本を用いた、よりコンパクトな仏教儀礼として営まれるものになっておりました、つまり、天王寺も法隆寺も両方ともに太子を賛嘆する法楽としての和歌、あるいは縁起を語る白拍子といったような中世文芸が展開するような場でありました。そういう宗教儀礼と芸能の母胎、マトリックスでもあった世界だったのです。法隆寺で行われる聖霊会は、室内に見事な飾り、これは大山立（おおやまだて）と言う荘厳が供えられます。四天王寺の聖霊会には曼珠沙華というコスミックな造り物が石舞台の四隅に立てられ、その先端には住吉の浜の海藻と、信貴山の砂を付けるのだそうです。法隆寺の方は全て菓子つまり食べ物で作るもので、太子への御神饌であると同時に須弥山を象って、やはりコスミックな造型になっており、この前で太子講の式が導師により読み上げられてその徳を賛え、更に管絃と和讃が奏し歌われて、太子を祀る供養が営まれるわけです。

次に取りあげるのが五番目のメディアとしての太子の世界です。太子の宗教テクストの大きな特質は、絵伝という太子の生涯をレジェンドとして視覚化する、仏伝と共通した方法によって、壮大な古代中世の日本の世界像そのものが象られることです。それが最初に作られたのは、四天王寺でした。伽藍の傍らに絵堂というギャラリーのような施設が作られて、その壁画として描かれ、そこに伝記となる銘文が一緒にあらわされて、それが「障子伝」と呼

ばれて古代太子伝の一つでした。この絵堂は平安末期まで存続し、絵解きがここで行われていたということは『台記』などの記録によっても知られておりますが、こうした絵伝という太子メディアは平安時代に法隆寺の方にも移されて、先程の上宮王院の夢殿の後ろ、もとは経蔵であった建物を改造して、東側が太子誕生のときの仏舎利を祀る舎利殿、もう一方の西側が絵殿としてその障壁に太子絵伝が描かれました。これは現存しており（東京国立博物館蔵）、延久元年（1069）の制作であって、歴史的にも成立年代が明らかで、絵を描いた画家の名前も秦致貞と知られております。そのテキストは天王寺のものとは違って、『聖徳太子伝暦』という平安前期に成立した聖徳太子伝のカノン（正典）のテキストのダイジェストによって作られたことが明らかにされました。また、この巨大な障子絵の大画面には、法隆寺と斑鳩宮を中心視点としたパースペクティブを作り出しているということが指摘されております。一方、より古い太子絵伝の本所というべき四天王寺の絵堂、それは中世の太子絵伝の中でも天王寺の伽藍全体が描かれるうちに重要な位置を占めており、極楽浄土の東門中心と信仰された西門があくまで中心ですが、その西門の一線上にこの絵堂が位置付けられております。絵伝のなかに絵伝の場（トポス）が表示されるという、メタテクストと言いうる現象は興味深いですが、ここに、そういう特別な位置を太子のメディアとしての絵堂が持っていたということが示されております。法隆寺の方は夢殿のうしろの長屋のような一角に位置付けられるわけですが、こちらでは太子の前世の中国衡山と難波の四天王寺と両方を跨ぐ壮大なパースペクティブが展開しております。

儀礼とメディアをつなぐのは太子のイコンです。絵殿の障子絵伝を描いた絵師が同時に太子像の彩色もしています。法隆寺の側で作られたあらたな聖徳太子の像、童形の太子像がここで初めて姿を現します。しかもこの像はただ祀られる像ではなく、移動する像、中国では行像と呼ばれるものです。その厨子はこのまま輿になって、舎利と並んで二つの輿が絵殿のところから夢殿まで渡御します。大法会では西院伽藍のところまでお渡りをする。今も四天王寺の聖霊会では聖霊院から六時堂、石舞台のところまで行道してお渡りをします。そういう行道用の像でありますから、像自体が見物人に観られるものとして、そして祀られるものとして、更にこのアイドルに一日費やしてお供えと芸能を奉るという臨時の崇拝対象になるわけです。院政期、平安後期になってからこのような太子の像とその空間は各地でそれこそ爆発的に作られますが、それは皆、この時期の国家的な意思、つまり王権と深くかかわった仏法と王法一体の関係のもとで作られたのです。広隆寺の上宮王院にも太子を祀る上宮王院があります。その本尊となっている童形の太子像は下着姿です。アンダーウエア姿という非常に稀な珍しい尊像です。当時の貴人のアンダーウエアは、やはりゴージャスでありますけれども、このままでお祀りして拝むわけではないですね。この上に黄櫨染御袍、令和の天皇が即位のときに高御座の上で着用なさった、その装束が仕立て直されて、このお像に着せられます。このように像自体が着せ替えで、まさに天皇の王権をまとう、生身（なまみ）の王の衣をまと

う生身（しょうじん）の太子として王権を体現する存在です。しかも胎内には、胸のところに蓮台に乗せられた月輪が収められております。この心月輪には太子の本地救世観音の像、そして勝鬘夫人、慧思禅師という三世にわたる本地と転生のイメージが金銅塗金の面の上に刻み込まれています。それに加えてボンボニエールのような黄金の箱が納まっていましたが、その中に詰まっていたのは、キャンディーではありません。包まれていたのは太子ゆかりの聖遺物、例えば法隆寺上宮王院の何かの切れ端だと思いますけれども、そういうみんな太子ゆかりの諸寺院の聖地の、太子にもっとも近い「物」が、土砂まで含めて集められて、その謂れ、来歴も全て記されて、この太子像の願主である定海という天台僧によって記録されていました。［阿部図 4］この定海は太子信仰に関わっていろいろな活動をしている人ですが、彼によってコレクションされた太子聖遺物が全て籠められている。これが太子の聖なるものをいわば内在する源泉として生成し、それは外部から王権を表象する衣服をまとうことによって、王法と仏法を共に体現する存在になったといえましょう。院政期には、同様な聖なる太子像が各地の太子遺蹟寺院で生み出されています。兵庫鶴林寺の法華堂は太子堂として壁画の太子像が厨子の中に秘されています。これは聖なる童子でもかなりこわい顔をしていますが、これは毘沙門天を拝んでいる姿です。その御前立の童形太子像も古いものが伝わります。同じ時代、法隆寺に新たに作られた聖霊院では、この内陣が一種の宮殿になり、その宮殿の中にまさに法皇、世俗の王として外から見える姿はまさに帝王としての、法皇としての太子であって、この像では口を開けてそれこそ政（マツリゴト）を述べるのですね。詔（ミコトノリ）を述べるはたらきを表現する姿でありますが、内部の空間には本地の救世観音像が補陀落山の上に立ち、そして法華・勝鬘・維摩の三経の経典が備わっておりまして、これも内と外の両方で仏法と王法がまさに体現されるような、聖俗一体の太子像となっているのです。

最後の大きな課題として、この聖なるものとしての太子のエージェンシーをどのような主体が生みだしたのか、それを私なりに考えてみたいと思います。これは、それを歴史的に作り出した太子信仰者の視点からとらえてみるのが一番の近道です。この点で、今私が最も関心を持っているのは慈円という天台高僧です。この人は同時に歌人でもあり、宗教のみならず文学、思想のうえでも注目される巨大な存在です。この慈円における太子信仰こそは彼の生涯にわたっての深い信仰の対象でありました。彼は九条摂関家の一員として、仏教界から国家にかかわる祈祷と修法をもって、常に世界の行方を思惟していたのですが、その仏道実践と、祈りの対象のイメージ化において聖徳太子は非常に大きな役割を果たしておりました。彼は顕密仏教の、特に天台密教の修学と修法、それを注釈や問答を繰り返して重ねることによってさまざまに記録し、著作し、そして祈るのですが、その中でことに重要であったのが夢想でした。その生涯を通してさまざまな夢を感得した慈円の『夢想記』が遺されておりますが、その中でも太子が非常に重要な存在として現れます。しかもそれはただ太子の姿が感得されたというだけではなくて、太子が歌を慈円に対して詠みかけたこともありまし

た。それは、いかにも歌人らしい慈円の感性のもとで受けとめられた奇瑞でした。その歌は彼自身の歌ではなくて、太子から与えられた聖なるテクストなのですが、しかも面白いのはそれが「物」に書き付けてあったというので、お札のようなものに歌が漢字で書いてあるという、マテリアルとしての歌がイメージされております。残念ながら歌そのものは分からないのですが、それが当時の国家王権の運命を告げる示しであり、慈円の果たす使命を決定するような重要なメッセージであったということが伝えられています。そういう神秘体験を通して、やがて『愚管抄』という歴史書も作り出されたのです。そうした役目を自ら負った慈円にとって、また、この報告においても大事なのは、例えばさきに述べました聖徳太子宗教テクストの拠点というべき四天王寺の絵堂を再興することでした。そしてそれを「本様」によって再現すると同時に、太子絵伝の裏側にあたる西の壁に、九品往生を遂げた日本と中国の往生人の姿を描かせ、それを詩と歌でもって荘厳するという新たな複合宗教テクストの創造を企てます。これは西門信仰と連動するものとして西の壁に位置付けたのでしょう。そのテクストは知恩院の四十八巻伝法然上人絵伝に収められて全体像が分かります。それ以外にも、天王寺聖霊院における太子礼拝の儀礼テクスト『皇太子五段歎徳』という講式も作っております。あるいは同じ聖霊院の聖徳太子に法楽の和歌、百首和歌という当時流行の形式で、この時期に慈円は盛んに諸社の神々に対してこの百首和歌を捧げておりますが、その集大成というべき作品を奉納してもおります。この『難波百首』は作者慈円自身によって非常に記念碑的な意義を与えられておりました。

その上で、慈円は、太子の画像を自らつくりだしました。恐らく慈円のイメージした太子像はこういうものであったろうと推定されるのが、いま藤井有鄰館に所蔵される太子画像、これも童子の像です。［阿部図５］これは儀礼テクスト『歎徳』の伽陀と同じ文章になっておりますので、私がそれで慈円創案の像だと判断するわけですが、童子の髪は角髪（みずら）ではなくて垂髪です。いわゆる稚児のイメージなのです。この垂髪の太子像は大変印象的な姿で、その手には香炉と笏を捧げて仏法と王法を一身に司る太子の役割を象っています。このような慈円による非常に主体的な関与によって創出された太子の像、太子イメージの形成がなされました。それは、慈円にとってはやはり国家、王権と深くかかわるビジョンのもとで、その理（コトワリ）を開悟へと導く存在としてイメージされ、創造されたものでした。しかし、最後には承久の乱によって、太子に導かれつつ彼の願っていたビジョンが全部一度に根本からひっくり返される、悲劇的な事態が起きます。ところが、その絶望的な状況のもとでも尚、祈りを再開し、その際にやはり太子に祈っております。しかも面白いのは、その慈円の自筆の告文（こうもん）という太子への祈りの言葉が青蓮院に残されているのですが、それは後に上書きされて、山王十禅師という、やはり稚児姿の、童子神であった日吉山王の若宮的御子神、慈円にとっての叡山の守護神であった、その神格に変換されています。太子と十禅師とが重ねられているということは、その自筆のテクストの上で如実に分かります。非常に生々しい

ドキュメントが慈円を巡って残されており、それらさまざまな位相を示す彼の宗教テクストを巡る営為（プラクティス）のもとで、太子がいかに重要な意義を持った〈聖なるもの〉であるかということが生まなましく知られるのです。

慈円という、太子を信仰し、その上で新しい太子のイコンと宗教テクストを作り出す主体の営みをお話しして参りました。そして、実はその主体とは太子こそが真の主体で、慈円はそれを受け取る客体に過ぎないというような、近代的認識からは主客転倒と見える関係が示されております。主役はあくまで太子なのですね。中世にあって、そのような事態は慈円一個人に止まりません。慈円の弟子だったとも伝えられる親鸞、浄土真宗の祖師となった親鸞が六角堂の夢告によって専修念仏の道を進み、法然の門下へ入るということは親鸞伝の中の非常に重要なエピソードですが、この六角堂の夢想は救世観音である太子が親鸞の前に現れて、俗聖（ヒジリ）としてのいわゆる女犯肉食の道を示すという神秘体験を蒙ります。これも慈円と同様に、あるいはそれ以上に端的に聖徳太子を信仰する主体としての親鸞が描かれているようですが、しかし、その決定的な瞬間において、太子という聖なるものから重大なメッセージを受け取って己れの信仰の核となるものを象る、あるいは自らが生きる、そういう主体として慈円や親鸞は中世に立ち現われるのです。そのような中世の仏教信仰の世界の運動の中で、童形の太子という聖なるもののイメージは重要です。これは津田徹英さんの研究（『中世の童子形』日本の美術 442、2003 年）が大変参考になります。その中世の童子形の代表である童形太子像の研究では、童子としてあらわされた太子は時空を超越した存在であるということを指摘されておられます。中世の膨大な童形太子像の圧倒的な流行は、特に浄土真宗、親鸞門下の初期真宗の人々が東国を中心に盛んに善光寺如来と共に信仰するアイドルとなって凛々しい童形のお像です。普通は香炉を両手で捧げるのが一般的でありますが、一方の手に笏を持っておられる。香炉と笏の二つはまさに王法と仏法、慈円においては真俗二諦と申しますけれども、真宗でもやはり真俗二諦像と呼ばれており、さきに取り上げた広隆寺の童形着衣像もこの形式であって、これが本来の太子像の一つの典型だったと思います。このあと、香炉のみを持ち、袈裟をまとった上に横披を懸けて威儀をただす、いわゆる孝養像と呼ばれる童形太子をさかんに作り出すのは、南都の律衆でした。特に西大寺叡尊の戒律復興運動に伴って、叡尊が、強い太子信仰を持っていたということも周知のことですが、そのもとで律衆の僧尼たちの集団がさかんに孝養太子像を作りました。

面白いのはただ少年の童形というだけにとどまりません。これが太子の場合の聖なるものの造形をつくりだす運動の大きな特徴です。つまり若返るのですね。どんどん太子が若くなって、ついには赤ん坊の太子になります。いわゆる南無仏太子です。これはもちろん伝暦など太子伝に早くから出てきている伝承ではあるのですが、二歳、今で言うと満一歳の二月十五日朝に乳母の懐から這い出て、縁側に出て、東に向かって手を合わせて「南無仏」と唱えたというのです。そのとき初めて手を開いて、そこからこぼれ落ちた舎利が日本最初の仏

舎利として法隆寺の舎利殿に祀られています。それゆえ、この赤ん坊の太子像はその太子拳内の舎利という聖遺物のアイドル化にもなるわけです。こうした太子伝に根拠づけられた縁起を伴った日本最初の仏法のシンボルが、南無仏太子像です。中世には、この「南無仏」は念仏の南無阿弥陀仏でもあるという解釈から、最初のお念仏の姿を象った像であるということが、ことに東国に広がった親鸞の初期の門徒たち、聖たちのアイドルともなった理由であります。これが 13 世紀末に生まれ、鎌倉末期から南北朝時代、14 世紀に全国で爆発的に造像されるのですが、その最も初期の南無仏太子像が、現在ハーバード美術館に所蔵されるセジュウイックコレクションの聖徳太子二歳像、これが 1292 年という制作年代が分かる最古のものです。この像内には、たくさんの納入品が収められていました。その全体をディスプレイしてみると、その中心に太子が握っていたであろう仏舎利があり、そして小仏像です。これも単なる寄せ集めではなく、愛染明王や薬師や地蔵、十一面というのは実は春日の本地でもあり、伊勢の天照でもあるのですね。神仏習合と本地垂迹の体系が太子の許に統合されているようです。それから巻物は天台本覚思想のテクスト、そして冊子の方は戒律の講義ノートというように、さまざまな位相の宗教テクストが、叡尊門下の僧尼たち戒律のサークルのもとで実践された、その信仰の記憶が全て籠められています。その中には一遍の「六十万人決定往生」の賦算の札まで入っているという、まさにハイブリッドな中世の宗教世界の縮図がこのお像の中に集約されているということです。［阿部図 6］

それをテクスト学的に分析してみるとどのように概念化できるか、これはアカデミックめかした一種の遊びのようなしわざですが、こういった分析さえもできるような非常に豊かな世界が太子像のミクロコスモスの中に込められております。この太子像は日本中に爆発的に広がり、中世の日本宗教の大きな流れをつくりだす、その担い手たちのアイドルになっていきました。以上、私からは、聖徳太子を対象として、聖なるものとしての現象と運動の特質を、いくつかの位相にわたって指摘させていただきました。しかし一方で、同時代に出現した古代仏教の大きなモニュメント、それが常にまたいろいろな形で絡んでくることが予想されるのですが、これは浅井先生のお話が伺えると思いますので、それを楽しみにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

「聖なるものとしての東大寺大仏―その美術史的、歴史的意味を考える―」

浅井和春

こんばんは。浅井でございます。お久しぶりと言った方がよいのでしょうか。前置きを言っているとまた時間が押しますので、早速本題に入っていきたいと思います。

私の担当は東大寺の大仏です。美術史的、歴史的意味とあえて書きましたのは、美術史は

歴史ではないかもしれないという、一般的に歴史の方から見た美術史観みたいなものがありますがそういう意味で、です。本来は歴史に皆包括されるものだろうとは、当たり前ですが…。

まず大仏殿の画像、つい3週間前ぐらい前にスマホで撮ったものです。最近私もスマホを使ってまして、ちょっと斜めなあたりがスマホ感を出していますね。

そして、大仏に関する基礎データです（資料1）。

資料1　東大寺大仏に関する基礎データ

像高	『大仏殿碑文』五丈三尺五寸　『延暦僧録』坐高五丈二尺四寸 → 約15.8m（現在高14.73m）
台座高	『碑文』銅座高一丈　石座高八尺　『僧録』座高一丈八尺 → 約5.4m 『七大寺巡礼私記』上階金銅座　高一丈　径六丈八尺 → 約20.4m

これは何を見ても出てくる値ですけれども、大切なのは資料で違っているところがあるのだということです。あとは台座のことを最後に触れますので、あえて台座の画像を出していますが、本来東大寺の大仏は石の台座の上に、今見られる銅の台座が載っておりました。それが高さの違いに反映しているのだというのです。ついでに広さや径も資料で出ています。画像はほとんどスマホの写真ですので、みなさんが大仏殿、大仏をお参りするとこんなふうに見えるのだと思っていただければ良いかと。残念なことは、ほとんど今現在、大仏の見学者は日本人よりは外国の方々が多く、80％以上ですね。押し合いへし合いしながら、外国の人たちが「うわぁ～」なんて言って見ています【浅井図1】。脇侍はあまりみなさん関心ないようですが、奈良時代には、この観音・虚空蔵と言いますか、如意輪観音と虚空蔵が両脇に鎮座していました。ただちょっと違うのは、これは江戸時代・元禄の再興像ですが、本来は半跏踏下という、片足を、下に踏み下げる形であったことが分かっております。それに四天王がいたわけですが、四天王は江戸時代はお金が足りなかったのか、前の方の二像は作られず頭だけ後ろに置いてあり、この後ろの方の広目天と多聞天が今でもあまり目立たない形で立ってます【浅井図2】。

こういう話をするときにどうしても大仏造立の経過が大学の授業では出てくるのですが、今回は省略します。気になったら配布資料をご覧いただければと思います。ただ大切なことだけ挙げておきますが、聖武天皇がこの盧舎那仏に思いを馳せるようになったのはいつ頃かというきっかけで、それは恐らくこの733年です。聖武天皇の年齢は分かり易くて、西暦の7を取る、33年＝33歳なのですね。701年に生まれていますので、満年齢でです。その

ときに『雑集』という、いろいろな気になった文章を集めて筆写しております。幸いなことに、ついこの秋、令和の新天皇ご即位記念の展覧会が東京国立博物館で催され、この『雑集』と、後に触れます『国家珍宝帳』という正倉院の財産目録が出ておりました。この『雑集』は聖武天皇のこの頃の、30代の聖武天皇の心境みたいなものを、今私たちが知る上でもっとも重要な資料ではないかと思っております。これは何と長さは21メートル超えで、縦27センチです。それが最初から最後まで字の乱れがないのです。この当時、写経所と言ってお経を書くプロが大勢いたのですが、みんな間違っています。間違うとどうするかというと、削って、白い顔料を塗って上に書いたりしていますが、聖武天皇は一字も間違っていません。疲れると思うのですが、ずっと最初から最後まで同じ呼吸で書いている。これがまずこの時代の天皇のことを考える最初の出発点になるかと思います。それで末尾にこの「思忍（おもいしのぶるを）」「諦」と。「諦（あきら）める」「諦念」と言いますが、諦めてはしょうがないので、これを「まことと し」と訓むのです。前に記された「諦像」というのも「まことの像」と言う意味なのですね。「慎口言（くちでいうをつつしみ）」、これは私たちへの諫言と言いますか。「止内悪（うちなるあくをとどめ）　息外縁（そとなるえにしにやすむ）」、「やすむ」は受け入れるということです。誰の文章かと言いますと、思大和上の座禅の文章で、「思大和上」は、先程阿部先生がおっしゃった南嶽慧思に違いありません。もうこの頃から天皇は聖徳太子のある意味生まれ代わり、再来としての自らを意識していたのでしょうか【浅井図3】。

ちょっと長くなりました。ここで重要なのは、「盧舎那仏」と見えることです。これは旧訳六十巻『華厳経』に依ることが明らかで、新訳八十巻経ですと「毘慮遮那」と記されています。それを四十のお祝いのときに『華厳経』を初めて講義してもらったというのです。レジュメには書いておりませんが、そのとき新羅の学匠審詳に講義してもらい、大仏の造立は菩薩の大願を発してのことだと言うのです。

この時代、秋山先生のように楽しいことがたくさんあったと思うのですが、真面目に『続日本紀』とかこういう史料を辿っていくと、だんだん顔がこわばってきます。これは聖武天皇が本当に真面目で、真面目過ぎるほど真面目で最終的にはほとんど神様に成り代わったような、そこを目指したのかなとも思うのです。それとこの時代、陰謀、策謀が溢れていて、乱世と申しますけれども、このときほど乱世の時代はなかったのではないか、と。天平時代、天平彫刻、天平文化などと言うとみんな広やかな心でいい時代だった、明るい時代だったと想像するかも知れませんが、そんなことは全然ないのでして、ないからこそあえて「天平」という年号を付けたのかなとも思われるほどです。大仏は749年に鋳造が完了して「三箇年八ヶ度」と。これが歴史的にも美術史的にも問題にもなっておりますが、足かけ2年1か月。これで完成するわけがないので、そのあと聖武天皇が亡くなるまで、補鋳と言って仕上げの作業をあれこれやっています。

美術史に入っていきましょう。美術史というと、絵空事をあつかうものだと。私もそう思ってこの専門に入ったのですが、秋山先生もどうもそうらしいですが、なかなかそうは簡単にいかない。何が簡単にいかないのかと申しますと、平面でも立体でもその形を言語化するというのが本当に難しい。みんな同じになってしまいます。皆さん興味があったら飛鳥時代から鎌倉時代までいいでしょうか、仏像の解説を読んでみてください。最後の決めの文句はほとんど一緒です。本当にボキャブラリーが不足している。自分もそうなのですが、その難しさに「なんとか！」と若い頃は思っていたのですが、もう今となっては手遅れです。ただ言えることは、この時代、この造形と技術が本当に幸運なことに調和した時代と言えるかもしれません。工房組織、工房のシステムが律令制のもとで完成していました。そのあとすぐに乱れてしまいます。乱れてしまうと個人プレイが多くなります。集団で大きなものを作るためには、きちんとしたシステムがないと無理だということを、大仏の造立は示しています。

大仏を見るとき、拝むときにどこを見たら良いのでしょうか。全体をまず見る。ほとんど今、皆さんが気になる部分はお腹から上ぐらいですね。お腹から上ぐらいは江戸時代・元禄の像です。室町時代に松永久秀の乱で大仏は燃えてしまい、鎌倉再興の像が無くなります。では鎌倉の像はどんなだったのでしょうか。今どこかに残っているのかというと、実はほとんど残っておりません。それほどに鎌倉の像というのはある意味で―いい加減な作り方をしていたと言うと怒られますが―今残っていない。というわけで残っている部分は、下の方に奈良時代の造形、上の方が元禄です。下の方は衣文など、こういうところに奈良の部分が残っています。この辺もきっと当初のものでしょう。ゆっくり鑑賞いただきたいのですが、それは美術全集にまかせて。と言っても全集はもう十数年前に完成したのを最後に、あとは出てませんが・・・。ともあれ上から見たこの両脚部の形、これが奈良時代の形なのですね【浅井図 4】。奈良時代の大仏がどんな像だったのかというと、恐らく（原型を）塑像で微妙に造形を表現する、それをブロンズに置き換えるということだったのでしょう。同じ頃の像でブロンズの像をあげますとこのようなちょっと寝ぼけた感じの像しかないので比較は難しいですが、これも実は東大寺の像です。戒壇院に祀られたと言われている像です。鑑真和上が日本に来たあと、急速にシステムが崩壊していきます。材料も乏しくなり、やがて奈良の王朝は崩壊していくわけですが、その前の緊張感漂う時代には塑像の名品が作られ、あるいは乾漆像の名品も作られたのです。

さて大仏のお顔です。昔どんなお顔だったのだろうかと想像するのはたやすいですが、それはちょっとおき、この宗教、仏教思想の面から仏像のことを考える―仏像だけではないのですけれど―というのが恐らく昔からやられていた方法ですが、学問的にそれが定着したのはおそらく 80 年代ぐらいからだろうと思います。史料の文言がどのように造形に反映しているかを、仏像を示して、史料と対応させて「どうだ！」みたいなのはなかなか結び付かな

いわけです。まず大仏本体については『華厳経』をもととするというのですが、では『華厳経』とは何なのでしょうか。無限の智恵の光とか、同経「十地品」では自利利他という。これも自分の利益だけでなくて人の、辺りの人たちの利益をも省みるという、その相互作用を目指した。あるいは悟りへの道を辿る、これが本当は仏像を拝む行為の中にも入っていると思うのですが、その中でどんな思いを各自が思い描くかによって、造形の見え方というのはずいぶん違ってくるのだろうと思います。『華厳経』というと「事事無礙法界」「重重無尽」なんて、これは無限です。無限の宇宙があり、あるいは胎内のずっとミクロの世界への無限、その統一というのを『華厳経』は目指したかもしれない。「三千大千世界」とかいろいろ言ってますが、この時期は乱れに乱れていて、それを救ってくれるのは天皇でも貴族でもなく、やはり仏の力に頼るしかないのだと人びとは思ったのかもしれません。私たちの周囲には百億の（私たちを救ってくれる）釈迦がいる、遍在しているという観念です。

ここで東大寺の「誕生釈迦仏」をあげましょう【浅井図５】。この像についてはいつ作られたのかという議論がかつてはありましたが、これは間違いなく―間違いなくと申しますのは私が勝手にそう思うのですが―天平勝宝４年４月８日、この日にこの像で仏生会をやった。灌仏会です。甘酒（ではなく）甘茶で今もやっています。だからこそ、大仏の開眼は翌日になったということなのですね。最初からきちんと計画ができていて、「前日嵐だったから」とか「聖武天皇は体が弱くて風邪をひいたのではないか」とか、そんなことは全然ない。その釈迦は先程来、幼児の太子の二歳像が出てきましたが、そういう釈迦であっても、既に仏としての属性と言いますか三十二相、八十種好というのですが、これを表しています。もう一つ、誕生釈迦仏を乗せた灌仏盤、これは神仙世界を表しているのだという意見も根強く、そうかもしれません。そういう中国的な観念、神仙の思想と仏教的な観念が融合した形で当時は受け入れられたということでしょう。

次に台座です。台座についてはいろいろな議論がありますが、ほぼ全体が『華厳経』でまとまっているのだという朴亨國さんの意見が正しいでしょう。それに『梵網経』というお経が―これは『華厳経』の簡略版ですが―鑑真和上が日本にやってきて、唐招提寺金堂の盧舎那仏は『梵網経』の盧舎那ですけれどもそういう考え方も入っている。こんなことも朴さんのものを読まれると書いてあります。

その誕生釈迦仏ではありますが、優しいお顔をしていますね。天平、「天王貴平」という文言にふさわしいお顔かなと思います。大仏もそんなにおっかない顔はしておらず、おっかない顔は三月堂の不空羂索などに任せて、大仏の方は優しかったのではないかと。これは勝手な想像です。神仙世界、灌仏盤のどこかに鶴に乗った仙人が出てきていますが、これですね。仙人がいると天上の神仙世界ですが、周囲には秋草が描かれ、蝶が飛んでいたり、トンボがいたりという神仙世界と自然景が一体化して捉えられています【浅井図６】。

今回のテーマの「聖なるもの」です。大仏造立の背景となった『華厳経』でも何でも、み

な仏教の世界観の中に聖的な観念というものを付与していることは事実ですが、実際に聖遺物と結び付いているとしたら、いっそう「聖なるものとしての大仏」観という受け止め方が強くなるのではないでしょうか。「舎利」とかですね。経典に代表される「法舎利」というのもあります。これは聖武天皇がおそらく意識したものです。国分寺、国分尼寺に『最勝王経』、『法華経』を本尊として納めたのです。その為に『最勝王経』十巻を書写したりしています。聖武天皇が自ら書写したかどうかは分かりませんが・・・。あるいは形見ですね。

ここから最終コーナーの『国家珍宝帳』に入ります。聖武天皇の為に光明皇后が遺愛の品々を大仏に献上したという宝物目録です。この『国家珍宝帳』にはなぜか後からの付箋が付いています【浅井図 7】。このことに注目したのは、東京国立博物館の奥村秀雄さんです。私も同館に 14 年おりましたが、その間ずっと上司でした。その奥村秀雄さんが若い頃に書いた論文で、なぜかあまり重要視されず無視されていたのですが、これが 2010 年に脚光をあびることになります。なぜかと申しますと、金銀装太刀というのが東大寺に伝わっており、それを X 線で撮影したら、「陰劔」「陽劔」という象嵌銘が明らかになったのです【浅井図 8】。これはなんと「除物」と書いてある付箋のところに出ている二振の剣の名称と同じです。これが『国家珍宝帳』に記され、そこに付箋が付いている。これについては明治の修理のときに、足場を組む柱を立てる為に、膝のところ、台座の蓮弁の膝の前の反花のところを掘ったのですね。正面が第一出土地点で、第二出土地点がその左側、第三が後ろになります【浅井図 9】【浅井図 10】。そこに細かく何が出てきたというのが書き込んでありまして、この資料を奥村さんが発見した。では誰が書いたのかというと、大村西崖という、私たち仏教美術をやってる人たちの中では有名人です。この東京美術学校教授、もっと言えば岡倉天心を美術学校から追い出した張本人の一人、その彼がこういうものをきちんと記録していた。岡倉天心はある意味アジテーターですから、そのいい加減さに「許せない！」と思った几帳面な大村西崖が、ちゃんとメモを取っていたのです。具体的にはこういう出土品がありまして、これが第一地点です。第二地点からは、レジュメに②と書いたところですね、こういうものが出ています。これは何かと言いますと、舎利の代替品です。真珠とかそういうものを舎利、遺骨の代替品としているわけですが、本当にきれいなものです【浅井図 11】。これを「今、鎮壇具と言っているのは間違いだ」というのが奥村さんの論文の骨子だったわけですが、それに対して当時の文化庁の方々が「なんだ！」と。ちょうど国宝に指定したばかりの時期でしたから、そういう反発があったのです。その後 5 年ほど経ったころ、歯も 2 番目のところから出てきたというのです。これは奥村先生からも聞いていて、歯の写真記録しかないので何でだろうと（これは近年、公開されました）。聖遺物としてこれほど正統な聖遺物はなく、あちこちに仏牙舎利のようなものを納めている仏教遺跡があります。日本では泉涌寺が有名です。ただ泉涌寺の仏牙舎利はどうも牛の骨で、「え～！」と驚くほど大きいのですけれど、興味があったら見に行ってみてください。中国でも歯ではないですが、毛

髪を入れた実例がありました。

このように、なぜ大仏の膝元に聖遺物となるもの、形見のものや歯、もしかしたら…と言っても髪の毛はどうか分かりませんが…、が入っていたのかを突き詰めると、最初の、聖武天皇がこの大仏に何をどういう想いを抱いていたのか、というところに戻ると思います。聖なるものとしての東大寺大仏は、乱世に生きた聖武天皇の『華厳経』信仰の証、象徴であり、やがて自ら「沙弥勝満」、さきほど『勝鬘経』や聖徳太子という名が出てきました。ちなみに光明皇后は女性ですから沙弥ではなく沙弥尼で、「満福」と名乗りましたが、きっとふくよかなお姿だったのだろうと思います。聖武天皇は沙弥勝満として聖徳太子への帰依を表明し、天平 15 年（743）、ちょうど大仏造立の詔を発する年の正月最勝会のときに自ら「像法中興」ということを表明しています。正法・像法・末法の「像法」ですね。まだ教えは残っているけれども伝える人たちがいなくなった、それを聖武は自ら再興するのだと思い、その決意を大仏に託したのだろうというのです。それで大仏はその後もずっと伝えられ、兵火や火災でぐちゃぐちゃになっても再興された。この再興というのが重要なのです。今「復興の・・・」とはよく言いますけれども、やはり寄附（布施）でおこなわれるというのが基本です。その基本を、聖武天皇は最初から大仏造立の詔の中で唱っているし、そのことが今にまで伝わり、今日では日本人よりも中国や東南アジアの方のお参りが多いですが、人々の心に根付いてきたのだと思います。大仏はバブルの頃にいっぱい作られています。100 くらいあるのですが、中身は全然ありません。仏作って魂入れずと言いますが、聖武天皇は仏を作って魂をそこに込めたということになるのでしょうか。

【参考文献】

上田三平「東大寺大仏殿須弥壇内に於て発見せる遺宝に就て」
『寧楽』第 8 号（1927 年 7 月）

奥村秀雄「国宝東大寺金堂鎮壇具について―出土地点と、それによる埋納時期の考察―」『MUSEUM』298 号（1976 年 1 月）

橋本英将「東大寺金堂鎮壇具を見直す（1）―陰劔・陽劔の発見とその考古学的意義―」

奥村秀雄「東大寺金堂鎮壇具を見直す（2）―出土地点と正倉院宝物「除物」をめぐって―」『考古学雑誌』第 96 巻第 2 号（2012 年 1 月）

朴亨國「東大寺大仏建立における華厳思想と造形理念」（浅井和春責任編集『日本美術全集　第 3 巻　奈良時代Ⅱ　東大寺・正倉院と興福寺』小学館、2013 年 9 月）

田中健一「東大寺誕生釈迦仏立像と奈良時代の仏誕観」（肥田路美編『古代寺院の芸術世界＜古代文学と隣接諸学 6 ＞』竹林舎、2019 年 5 月）

※図版 8・9・10 は上記の橋本・奥村両氏論文に掲載されたものを転載させていただきました。

質疑応答

（佐伯）ではそろそろ討論の部分を再開したいと思います。では、まずパネリストの方々から、他の先生方へのお話に対して一言ずついただいて、それから質問票への答えに入っていきたいと思います。では二宮先生からよろしくお願いします。

（二宮）はい、あまり準備をしていなかったので本当に感想のようなものなのですが、結局イスラームの方で人物像のようなものが少ないというふうに申し上げたところ、他の三つのご発表が、わりと 3D の像を中心にしたもので、「お、困ったな」と思っていたのですが、一つ疑問に思いましたのが、秋山先生のキリスト教の事例では聖像が帯びる聖なる力みたいなものの理論的な面が説明されていたと思うのですけれども、仏教の方で、私が紹介したイスラームのバラカのような「何らかの人間を超えたものに由来する聖なる力が像に宿る」というような考え方はあるのでしょうか。そしてそれはどういうものが運んだりするのでしょうかというのが気になりました、というのが質問です。以上です。

（秋山）いろいろさらに比較、宗教美術史的にいろいろな材料をいただいたなと思って、とても楽しく拝聴していたのですが、とても分かりやすい質問と言いますか、みなさん、壇上の先生方にお伺いしたいのは、今回結構幼児像が出ていたかと思います。僕自身が幼子イエスを出しましたが、聖徳太子像もお釈迦さんの誕生仏も出ていて、特に聖徳太子像で面白いのは、怖いですよね。子どもだと可愛いという前提が今の我々にはあるのですが、結構二歳でも怖いです。十何歳なんかはもうとても怖いです。優しいのはないのですか、というか、なぜ怖くなければいけないのですか、ということを一つお伺いしたいです。キリストに関しては一見可愛らしいのが多いのですが騙されてはいけなくて、説話のものを読んでいくとかなり怖いのですね。聖母子像のうち、聖母が汗をかきだしたというのです。ミサの間でみんなが「どうして聖母さまが汗をかいているのだ」と見たら、キリスト像が「人間どもが許せない」と言って拳を振り上げていたというのです。これは拳を振り下ろすと世界が滅んでしまうので、お母さんは一生懸命止めていたという、こうした聖母子像についてのエピソードがハイスターバッハのカエサリウスの書にあったりするので、神、あるいは聖なる人はどんなに幼くともやはり神であり、強い聖性を持った人であれば、やはり何かこう畏怖の念を引き起こすということもあるのかなとか思いながら、気になっていました。

例えばイスラーム教では像がそもそもないとしても、やはり幼児、幼児期の聖人とかに対する崇敬とかがあるのかということをあとでお伺いできればと思います。

（阿部）いきなりお二人からもう質問が来てしまったので、そこにもお答えしなければいけ

ないという感じであるのですが、聖性の核みたいな、あるいは理論的な宗教像的なそういうものは一体どこにあるのかということに関してみると、今日は大仏も多分つながってくると思いますが、やはり舎利信仰という問題ですが、これが単純に舎利に還元できるだけではなくて、むしろその仏舎利をコアとして日本では非常に多様な舎利信仰の展開が仏教史を形作ります。これが宗派を超えて、あるいはそれぞれの宗派にまたがって全てに存在するのですが、それは太子についても大仏についても共通してあらわれます。それは真言宗では弘法大師が請来した東寺の舎利の信仰の展開が特徴的で、密教が大きな役割を果たします。やがてそれは大仏にも及ぶのですが、単なる舎利だけではなくて、それを種としていわゆる宝珠という万能も神聖物、それは如意宝珠や能作性珠など、いろいろな呼び名がありますが、そういう人工物の聖遺物を中世密教は作り上げてしまうのです。その神聖化の根拠となったのは、弘法大師の「御遺告（ごゆいごう）」という、大師に仮託した真言宗の縁起ですが、その中に作り方が書いてあり、それを日本国土全体にまたがって功徳を及ぼす、その聖地、場所、として宀一山（べんいちさん）室生がその中心だと言います。室生は龍穴があるところですが、そういう古代の聖地信仰と結び付いて大師はこの室生の奥に舎利でもある宝珠を密かにおさめた、と告げます。それが実は大仏にも関わります。中世の再興のとき、重源が再興したときに大仏の胎内に大師の御遺告の作法通りに作られた如意宝珠を納めたということが記録の中に残っております。つまり、再興された大仏はもう既に単なる毘盧遮那大仏として仏教経典だけに還元できない存在となっていきます。中世のあらたな大仏は、伊勢の天照大神と本地垂迹説を通して一体であるというのです。大仏再建のその出来事の前の院政期の段階で既に聖武天皇自身が天照が玉女となって夢の中に現れて、自分の本地は盧舎那大仏であるということを告げて日輪の光とともに仏の姿として現れた。それがきっかけとなって、聖武が大仏を作ったという縁起説、中世神話までできているのです。重源の再建のときは、その神話に倣って天照の御神体でもある宝珠を納めて、日輪、大日、天照と同体の大仏というものを再創造するべく、再建、再興したということになったのですね。もちろんそれは遡っての聖武天皇自身のビジョンとは大きく隔たった、中世に発展した世界観ですけれども、それを促すような宗教的な熟成というか展開が、日本の仏教造形の歴史の中で確かに認められるということに注目したいと思います。それをだから今日お話いただいたいくつかのアクションも含めたいろいろな同体の面から、立体的にもう一度読み直してみたいというのが、今日の私の報告の最大の狙いなのです。

それにしても何よりも、やはり太子信仰と大仏とが実はいろいろな意味で絡んでつながってくることを提起したいと思うのです。浅井先生は最後に聖武天皇の祈りというか魂の問題を言及され、それが作られただけではなくて、作ること自体も仏法の再興とおっしゃいました。だからこそそれを受けて常に大仏は再興されていったということを、もう一度振り返ってみると、その過程で実は太子が果たした役割というのが実に大きかったと思います。出発

点でもそうですが、そのあと中世の再興でも大きかったということが分かっています。大仏勧進の聖重源は、太子の墓に、彼自身ではなくて重源の弟子が侵入いたしまして、太子の遺骨を盗掘するのです。つまりフルタ・サクラ (聖なる盗み) をやってしまうわけです。そのとき聖は、まだ生きているような太子がお墓の中におられて、その歯を引き抜いてまだ血が滴っている歯を持ってきたという話が伝わっています（中世聖太子伝『正法輪蔵』)。それで捕まってしまうのです。なぜ捕まったかというと、その血が衣から染みて露見したという、霊験譚になっています。そんなことまで太子の聖遺物を巡っての〈聖なるもの〉創造がくりひろげられていたということなのですね。ということでいろいろなものがつながってくるかなということでした。

（浅井）聖徳太子がキーワードになっていますけれども、今日のこの無理やりの発表では、最後の歯が誰の歯かというのはあまり言わなかったのですけれども、これは聖武天皇にほぼ間違いないと思うのですね。それでその聖武天皇の歯をお納めするには、ああいう除物というのが光明皇后が亡くなる 1 年前のことで、その 1 年前つまり 2 年前に聖武天皇に諡号という、もともと天皇には名前がないわけで、それを贈呈しているのですね。そのようなことがありまして、そういう時期とちょうど結びつくかなという 2 年から 3 年です。そうしますと大仏の台座というのは、最初から作られたという人もいるのですが、仏体を作ったあとに台座を作ったとしか考えられないわけですね。その前に入れてしまったら、まだ死んでいませんからね。

それはともかく秋山先生のおっかない像が多いというのですけれども、それはたまたま今回取り扱った対象がおっかないので、実は奈良時代の前に白鳳時代という時代がありまして、この天武・持統朝ですけれども、文武ぐらいまで、一時期ですけれども、これは本当にのどかな時代だったのだろうと思います。壬申の乱で散々な争いをやったあと、みんなが「もうやめようよ」という感じになったのでしょうか。そのときに作られた仏像というのは、みんな年寄りみたいな仏像でも童子形と言いまして、童顔に作られるのが常でした。それを中国の北斉とか北周の影響だなんて言うのですが、それ以上にその頃の作り手たちがやはり「可愛い仏像がいいよね」と思ったのだろうと思います。そういう時代と、そのあとの大真面目になってどんどん戒律だのなんだのと言い始めると、中世の仏教なんて本当にそれですからね。怖くならざるを得なかったという時代の背景を感じたりもしています。ちょっと感想だけですが。

（水野）それでは会場の方から、さまざま貴重な質問が寄せられましたので、そちらに入っていきたいと思います。まず二宮先生と秋山先生お二人にかかわるご質問になります。今回シンポジウムが「聖なるもの」ということですが、聖なるものを媒介するさまざまな装置と

いうか、そのような話が全体のテーマになったかと思うのですが、それともかかわる重要なご質問かと思います。
【バラカと力 virtus の共通点と相違点について、それぞれの立場からご説明いただければ幸いです。バラカが付与されたものに触れるとバラカに与ることができるという説明がありました。力 virtus の場合はどうでしょうか。また「触れる」ということは、イスラーム教、キリスト教ではどのように考えられているのでしょうか。】
という質問になります。お願いいたします。

（二宮）ありがとうございます。私が virtus をそれほど把握しているわけではないのですけれども、本などで読む限り非常に似ているということで、違う点を見つけるのがむしろ難しいようには感じています。実際、どう動くかはわからないのですけれども…。それでイスラームのバラカにおいて「触れる」ということですが、それは実際にペタッと触るというのもありますし、それは我々というか平信者というか、バラカを貰いたい側が触りに行くということもありますし、バラカを帯びていると見做される聖者から触ってくれるということもあるのです。その触り方ということですけれども、私がよく見ている聖者の墓では、聖者の墓にじかに触るということが多いのですけれども、じかに触れない場合もありまして、そういうときは墓にお仕えしているハーディムという従者の人たちが、鳥の羽とかが多いのですけれども、さっさっとお墓をはらって、その鳥の羽でぱっぱっと信者様を触ってという、それでバラカを移したりということもあります。あるいは墓にお供えするものとしてインドでは花と砂糖菓子とあと布というのがあるのですね。布をお墓にかけるのですけれども、そういうかけた布であるとか、砂糖菓子の一部というのをバラカを帯びたものとして、お供え返しと言いますか、そういうものとしてもらって、そういうものをさらにうちまで持ち帰って「バラカがあるよ」と言ってみんなで分けるというようなことも行われています。大体お答えになるでしょう。とりあえずこんな感じです。

（秋山）やはりキリスト教の virtus というのは伝播力が強いので、やはり接触＝タッチというのがとても望まれたかと思います。すぐに思い浮かべるのは、紀元 155 年か 6 年に書かれた『ポリュカルポスの殉教録』という本の中には、ポリュカルポスというのは火あぶりになるのですが、火あぶりになる直前に自ら進んで火あぶりになるということで服を脱いだと書いてあるのです。そこに「もし生前彼がこういうことをしていたら、信徒たちが触りたがって大変だっただろう」という文章が書いてあって、「悲劇の中にこれは何を書いてあるのだろう」と、初めて読んだときには一瞬分からなかったのですけれども、要するに聖人に触りたがるという信徒の傾向というのがそういう殉教録の中にも差し込まれているのだと思います。また今お話を伺っていて思い浮かべたのはサン・ピエトロ大聖堂の聖ペテロの柩と

いうのはかなり下の方にあって、サン・パウロもそうですが、直接触りには行けません。そうすると聖職者が巡礼から布を預かって、その布を紐に繋がった小箱の中に入れて、その小箱をエレベーターよろしく真下の柩の上蓋まで降ろして行って、接地させて引き上げるのです。心がけがいい信徒の場合はその布が若干重くなっているとかということを、トゥールのグレゴリウスという人がちゃんと書いて、これはブランデアーというラテン語もあるようですが、それが典型的なローマ巡礼で持ち帰れる聖遺物です。巡礼記念品なのだけれど、同時に接触聖遺物＝ Contact Relics だという事例があります。

（水野）ありがとうございます。続きましてもう一つ秋山先生にご質問がございます。たくさんのご質問をいただいていまして全部は紹介できないのですけども、一つ伺いたいのが、たくさん書いてあるのでかいつまみますと、

【ヨーロッパの聖母の奇跡像など、奇跡を起こす像というものと、それから今回、寺院によってですけれども動く像というものとの、ある種の共通点と差異と言いますか、そういったものをどういうふうに考える得るか。】

ということですね。特にご質問の中では、

【中世末期において数多く存在した可動式のキリスト磔刑像と、奇跡を起こす聖母像の関係性というものが、観者による受容においてどのように違いや類似性があるのかということ。】

それからもう一つ、

【奇跡像の場合は像それ自体が奇跡を起こして崇敬対象となったのではなくて、例えば聖母像の場合は天上の聖母が選び取って、像を介して力を作動させたと、そう解釈されるべきだと思われるのですけれども、その場合の力はvirtusとの関係ではどういうふうになるのか】

という、なかなか難しいご質問なのですが、お願いいたします。

（秋山）半ば水野先生がお答えになる方がいいような気がするのですけれども、今日ご紹介した、要するに可動式のキリスト像というのは基本的には道具と考えていいのではないかと思いまして、道具であることを認識した上で使われるので、あれが奇跡を起こすということは期待されていないのではないかと思います。むしろ信仰心を昂らせるための手段という方が強いかなと思います。それに対して奇跡を起こす像というのは、そこに必ずしも迫真性とか芸術性というのは必要とされないかと思いますし、むしろ制作者が分からない方がいいということです。これは伝統的に見ると、初期のイコンについてはアケイロポイエートス、非人造物であった方がいい。あれは要するに空から降ってきたとか海から見つかったとか、とにかく人為を介していない可能性が多少ともあった方が、奇跡像としては望まれるのではないかというふうに考えてはいますが、詳しくは水野先生にお譲りします。

（水野）可動性の問題で頭に浮かびましたのが、例えば「インプルネータの聖母」というイタリアの古い聖像です。その聖母の場合は四肢が動くわけではないのですが、天変地異のときや戦争のときに、インプルネータという田舎からフィレンツェに儀礼的にわざわざ動かされて、さまざまな奇跡を起こしましたが、一方で都市の中で壁に描かれている別の聖母の奇跡像というのは複製をたくさん作ることで、その奇跡力を複製にもあずからせるという現象を生み出しました。聖性の発現の仕方というか、それはかなり多様なもので、奇跡像においてもある種「可動性」、動いてやってくるという要素というのは、考えていけるテーマとして面白いなと思いました。それからもう一つの質問ですけれども、
【聖史劇などでは、人間が演じる方がリアリティがあるはずなのに、なぜ像を用い続けるのか】
という、そのあたりはいかがでしょうか。たぶん、キリスト教、仏教どちらでも言えると思うのですが。

（秋山）聖史劇もこれは水野先生の領域で、僕はあくまでも教会の中での典礼からは少し外れる、パラリトゥルジカルなものしか扱っていないのですけれども、ですから全く素人考えですが、要するにあまりにも聖なる存在を人が演じるということの善し悪しというのはあったのかなと思います。生々しくなり過ぎるかもしれません。実はさっき、最後のスライドでご覧に入れた、ウフィツィ美術館の前のダンテ像があるのですが、そのダンテ像の真似をして Moving Statue という全く動かないという大道芸人の方がおられたのです。ウフィツィで調査をしたあとその最寄りのバールにコーヒーを飲もうとして行ったら、この人がコーヒーを飲んでいたときの衝撃というのはものすごいものがありまして、やはりそれは中世でもあり得たと思うのですね。「あ、あのキリストだ」というよりは、キリストは少し硬直していて人間らしくない方が聖性を保てるのかな、というあくまでも素人考えですが……。

（阿部）秋山先生から最後に日本の練供養、つまり迎講のことを紹介していただいたので、そこのところがちょうど今の質問に繋がるような問題も検討できるかと思うのですが、あそこでも最後に非常に珍しい例ですが、いわゆる被り仏、その中心の本尊である阿弥陀如来そのものが動く形で、人が中に入って出てくるというものです。それは中世では必ずしも珍しいものではなくて、今も練供養で有名な当麻寺にも残るように結構実はあったわけですけれども、ただそれが、本当に全て人が演じるということになると、これは他の二十五菩薩がたくさん出てきて、いろいろなパフォーマンスをする、あるいは実際に楽人が扮して音楽も演奏してしまうという驚くほどにぎやかなページェントになります。これは『今昔物語集』などの説話にも出てきますし、実際、平野の大念佛寺の万部おねりなどは今もものすごいド派手な演出です。そこでも実は阿弥陀仏が出てくるということがあったようですが、古く尋ね

ると、ちょうど重源の大仏再興の時代が、迎講の一番賑やかな時代で、重源のもとで快慶というのがやはり立派な仏像と仮面を作ってやるのですが、ここでも大きな意味での使い分けがあって、もっとも有名なのが快慶の浄土寺の阿弥陀如来像ですね、これは着衣ですけれども、かなり大きなお像でやはりあれは動かないというか動かして出す、山車のように引きずって出すという形で、最後のクライマックスの聖性を演出するという形です。それを本当に全て人が演じる、阿弥陀如来そのものも人が演ずるということになると、やはり最後本当にそういう意味での聖性の発動が、下手をすると大失敗に終わる、そういう非常にきわどいところを常に意識しながらやっていたように思います。

ただ残っている仮面の事例では、畿内の各地に伝わる仏（ほとけ）の舞のように、阿弥陀の仮面、これはヘルメットみたいなものですが、如来の面も残っていますので、そのお面をすっぽりかぶって仏が出てくる例もあったようですから、この辺り何とも言えない部分はあるのですが、一番実は日本の来迎の儀礼の造形の中でも、大きな問題になるところだと思います。このあたりは關信子さんという方がずいぶん長く研究をなさっておられて、その著書が出るのが楽しみなのですけれど、そういう課題はやはり同じようにあるなということで、やがてそれが日本のそのあとのいわゆる猿楽を含んだいろいろな芸能に連なっていくところも注目しておきたいと思います。たとえば京都の壬生寺や清涼寺に伝わる大念仏狂言という、パントマイムの劇でも仏が出てきますし、それらはいわゆる狂言的なものとして各地に幾つか残っておりますが、そこでは、いわば民衆の楽しみとして登場する仏を笑いものにするような世界のものになってしまうわけですね。

（水野）さまざまな宗教の儀礼における仮面は、ある種、存在の次元を変容させる要素を備えているのかなと思いながら伺いました。

すみません、もう一点ですが、秋山先生、

【聖体拝領が神との合一とされ、接触型聖遺物の文脈で信仰を生み出さなかったのはなぜだと思われますか。拝領する人間はともかく、聖体が接触したトレイや聖血に対する信仰が生じてもいいような気がしますが。】

ということです。

（秋山）はい、中近世、少なくとも中世では生じていたと思います。聖体は先程人工的な聖遺物ということを阿部先生がおっしゃいましたが、聖体はまさに人工的な聖遺物で、聖体で聖体奉挙（エレヴァティオ）というのが為される前は、あれは単なるパンというか煎餅であって別に――踏みつけたら怒られるかもしれませんが――理論上は良かったはずで、一旦奉挙されてあれが聖体に変化すると、これはもう落としたら血が流れたりという伝説がいっぱいあるので、聖遺物化するのですね。聖血もそうで、ワインも一旦キリストの血になった

ものはキリストの血そのものですので、こぼすといけない。確か司祭はワインが残ってはいけないので、余ったものは飲まなければいけなかったのです。それでかなり精度の悪いワインが多かったので、かつて司祭は結構肝臓を病む人が多かったというのをものの本で読んだことがあります。ですので、聖体自体は実は非常に面白いテーマでして、人工的な聖遺物がなぜ導入されたのかというのは、僕は一度書いたことがあるのですが、特段の反応は何もないというか、読まれないところに書いたのであれなのですけれども、明らかに聖遺物崇敬の行き過ぎを教会が規制しようという意図があったように思われます。ところが聖体自体が聖遺物のヒエラルキーの中に組み込まれてしまって、少なくとも宗教改革までは、聖体が聖遺物化しただけという結果に終わったのではないか、というふうに考えております。

（水野）ありがとうございます。それでは最後もう一点だけ、阿部先生にお聞きします。
【信仰の一貫として聖徳太子や空海などの書、筆跡が拝まれるという例はありますでしょうか。書も秋山先生のおっしゃる接触型聖遺物になるのでしょうか。】
ということです。

（阿部）空海と聖徳太子、空海は太子の生まれ変わりだという信仰も一方でできて、繋がれてくるのですが、その中でもちろん自筆で書いたもの、先程の法隆寺の太子の義疏のように、いわゆる御自筆と信じられているものが空海の場合も高野山に、高野山自身の縁起であり、あるいは大師の遺告として記されるものが自筆として伝えられるのですが、これはどう見ても人工的に人為的に作られた、いわゆる大師様の筆躰でもって書かれたものですね。だからこれは今の我々が見ると明らかに偽物だとしか見えないのですが、かつてはもちろんそういう様式で書かれたものこそ本物と信じられたのです。だけれども問題は実は筆跡だけではありませんで、むしろ平安、中世に入ってくる頃の大きな両者の共通するメルクマールは、自筆で書いたという以上に御手印といって手の印を押すのですね。しかもこれは朱で押しますから、言ってみれば血で押すのです。実際にそういった御手印というのは、古代以来、もともと血を象ったものだというふうに古文書学の荻野三七彦先生が指摘されておられますが、聖徳太子の場合は四天王寺の御手印縁起がその典型であって、その太子御自筆かつ自分の手印を全面に押した原本が宝物として伝わり、それを元に後醍醐天皇が写したものも伝わっており、それも天皇が自ら両手で手形をおしてしるしづけており、その方が鮮やかで強烈なものです。それから弘法大師の場合も、高野山の御手印縁起が、さきの御遺告とセットとなって宝物として伝わり、これにも後醍醐天皇の写しがその御手印と共に伝わっています。つまり、大子と大師についての接触形聖遺物が天王寺と高野山に両方あって、その筆跡はもちろんですが、むしろそこの御手印（てじるし）の部分に非常に強烈な聖性がまさに印づけられているということです。それが歴史的にどんな大きな influence を呼んだかという

ことも、同時に検討の対象になると思います。

（水野）ありがとうございます。今回「比較文化論を拓く」ということで、聖なるモノという一つの軸を立てて、複数の宗教の中での議論がいかに可能かということの、本当に一つの試みだったと思うのですけれども、阿部先生が示してくださった空間・行為・属性・儀礼・媒体など、今後、より深く考えていく理論的な視点をいただくことができたのではないかと思います。ロシアの美術史家でアレクセイ・リドフという方がいらっしゃるのですが、彼もやはり聖なるものがどういうふうに現出するかといったときに、「ヒエロトピー（Hierotopy）」という概念を出していまして、モノはそれ単体で聖性を生み出すのではなくて、聖遺物や聖像であったり、展示装置や儀礼であったり、それを作用させたり受け取る人間のさまざまな身振り・行為、あるいは感性、いろいろな媒体を複合して聖なる空間、ヒエロトピーが形成されると論じています。今回、先生方のお話を伺いまして、一般化は避けたいとは思うのですが、異なる宗教文化を比較しながら普遍的なテーマを考えていく、その手がかりをいただけた場になったのではないかと思います。

（佐伯）まだ質問票にも実は全てお答えしているわけでもなく、大変残念なのですけれども、時間をだいぶ超過してしまいました。この辺でパネル・ディスカッションを終了したいと思います。パネリストの先生方、本当に今日は興味深い議論をありがとうございました。

では最後になりますが菊池努総合研究所所長より閉会の御挨拶を申し上げます。

閉会の辞

総合研究所所長　菊池努

どうもありがとうございました。私、今日一聴衆として参加して本当に良かったと心から思っております。これだけご専門の先生方が、それぞれの深い学識に基づいて非常にお互いの議論が共鳴し合って、私もシンポジウムやらセミナー、日本国内でも海外でもたくさん出ていますけれども、その中でも非常に呼吸の合った共鳴し合う、非常にいいシンポジウムだったのではないかと思っております。もちろん私は門外漢ですから中身については全く分かりませんけれども、ただこれから東大寺に行ったり法隆寺に行ったりしたときに少し見る目が変わってくるのではないかと、こんなふうには思っております。

今回は総合研究所が、文学部の人文科学研究所創設記念の第一回シンポジウムということで共催するということになりました。青山学院は今もう 11 学部を擁する総合大学で、実は私も全部の学部の正式な名前がよく言えないような状況であります。ただそういう中でも文

学部はその屋台骨であります。特に最近は、日本も世界もあるいは大学も非常に功利主義的な考え方が力を増してきて、それはもちろん大事なところもあるのですけれども、全てがそれでは困るわけで、やはり人間を深く学ぶ、そのための文学であるとか歴史であるとか、あるいは哲学やらあるいは美術等を深く学び、その成果というのはやはり社会に還元していくということが青山学院にとってこれからますます重要になってくるというふうに思っております。そういう意味で、この人文科学研究所が文学部の屋台骨を支える、更なる研究発展の起爆剤になることを、心から期待をしているというところでございます。

今日はたくさんの方においでいただきまして、実は私これほどたくさんの方がおいでになるとは予想だにしなかったわけです。私はこの大きな会議室でやるというときに、「え、佐伯先生、それから水野先生、大丈夫ですか？」というふうに申し上げようかと実は思っていたのですけれども、でもこれだけたくさんの方がおいでいただき、大変ありがとうございました。これからも引き続き青山学院でこの種のことを開催したいと思いますので、どうぞ引き続きよろしくお願いいたします。今日は大変ありがとうございました。

二宮図１　預言者生誕祭（インド共和国、アジメール、2008 年撮影）

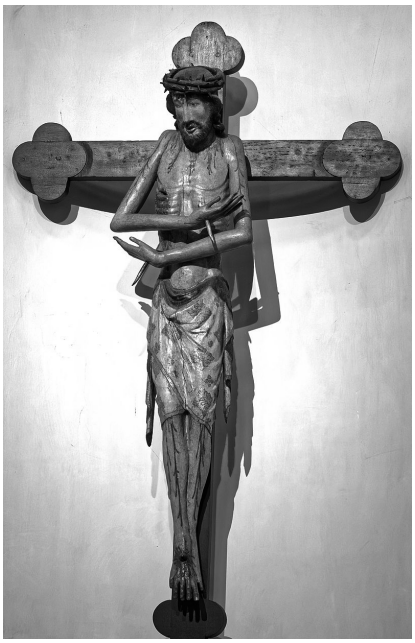
二宮図２　預言者生誕祭、メッカの黒石のレプリカ（インド共和国、アジメール、2008 年撮影）

二宮図 3　ブーラークのポスター（インド共和国、ムンバイ、2008 年撮影）

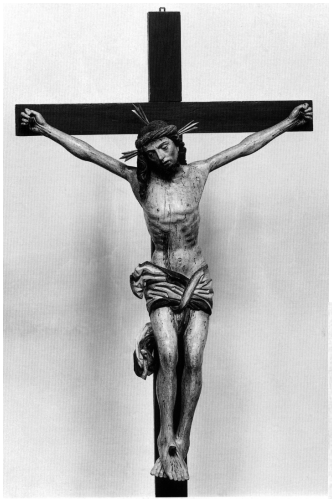
二宮図 4　預言者ムハンマドの足跡（インド共和国、アフマダーバード、シャー・アーラム廟、2008 年撮影）

二宮図５　預言者ムハンマドの足跡（インド共和国、デリー、Qadami Sharif、2019 年撮影）

秋山図1：ヴュルツブルク
ノイミュンスター聖堂の磔刑像



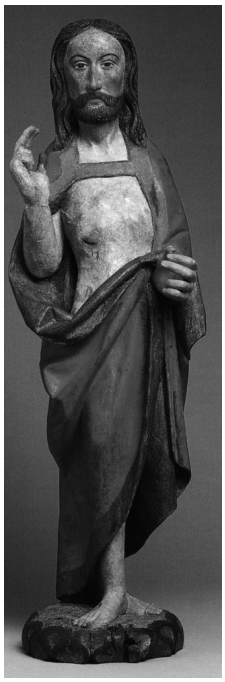
秋山図2：可動腕付きキリスト磔刑像（a.磔刑時とb.埋葬時）メンミンゲン（シュバーベン）、聖ヨハネ教会
1510年頃



秋山図3：可動腕付きキリスト磔刑像
デーベルン、聖ニコライ教会所蔵磔刑像、1520頃？

秋山図4：昇天儀礼用キリスト像フリブール美術歴史博物館

秋山図5：昇天儀礼用キリスト像（a.全身像とb.台座裏面）
ダルムシュタット、ヘッセン州立博物館蔵（1480頃）



秋山図6：
《サント・シャペル聖堂におけるミサ》
『ベリー公のいとも豪華な時禱書』より
シャンティイ　コンデ美術館
（Ms65/1284, fol.158r.）

秋山図7：
岡山県弘法寺
練供養
（a.儀式時とb.儀式後）

阿部図1

夢殿
（上宮王院正堂）

本尊救世観音像

阿部図2

斑鳩寺蔵
聖徳太子勝鬘経講賛図

阿部図3

「高僧図像」―乗寺蔵天台高僧図・南岳慧思と聖徳太子

阿部図4
広隆寺上宮王院　太子童形着衣像
（元永３年〔１１２０〕頼範作）

広隆寺上宮王院　太子童形着衣像　胎内納入品

阿部図5

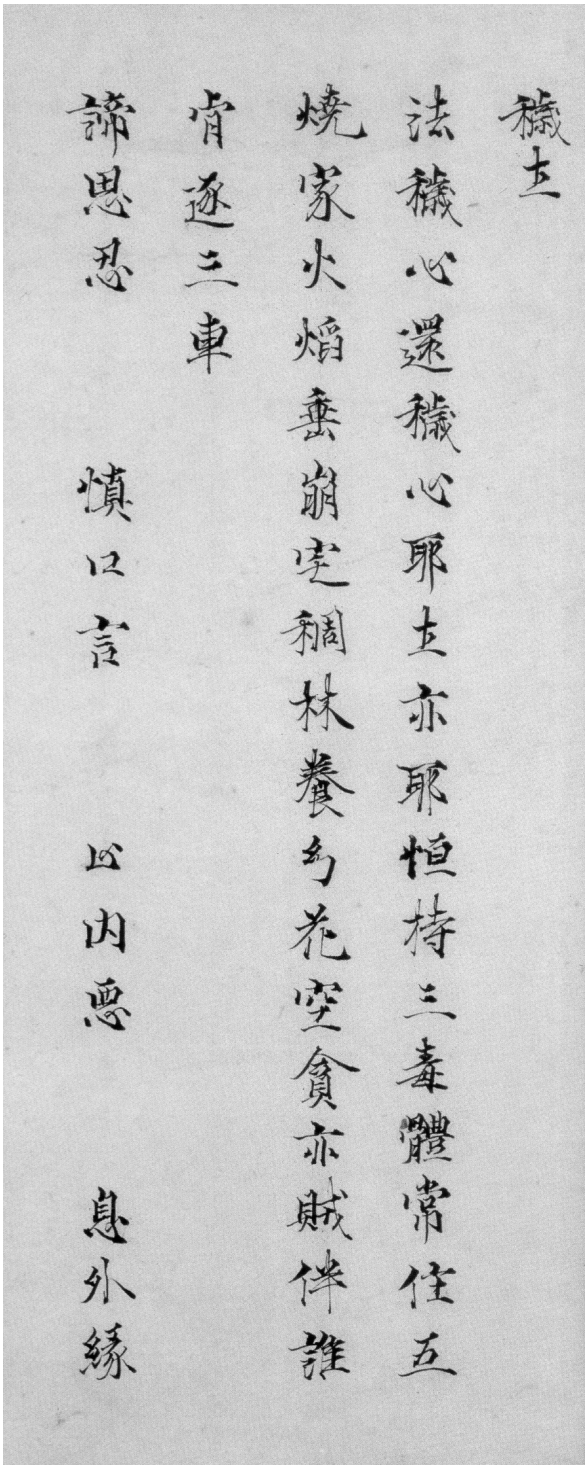
藤井有鄰館所蔵
聖徳太子孝養像(鎌倉時代)

阿部図6

ハーバード美術館蔵
セジウイック・コレクション
聖徳太子二歳像（南無仏太子）
（正応五年、1292年造立）

浅井図１　東大寺盧舎那大仏

浅井図２　東大寺大仏殿四天王（多聞天）

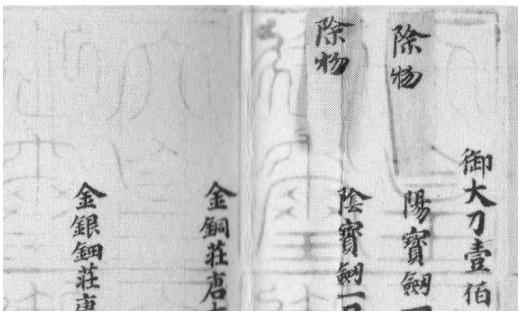

穢土
法穢心還穢心耶土亦耶恒持三毒體常住五
燒家火焰棄崩突稠林養勾花突貪亦賊伴誰
肯逐三車
諦思忍　慎口言　心内惡　息外緣

浅井図３『雑集』末尾

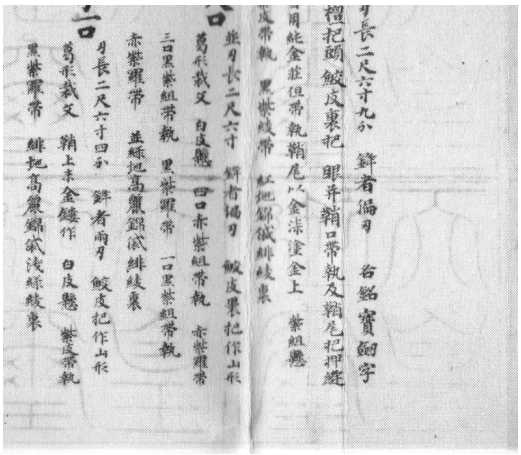
浅井図４　東大寺大仏両脚部

浅井図５　東大寺誕生釈迦仏及び灌仏盤

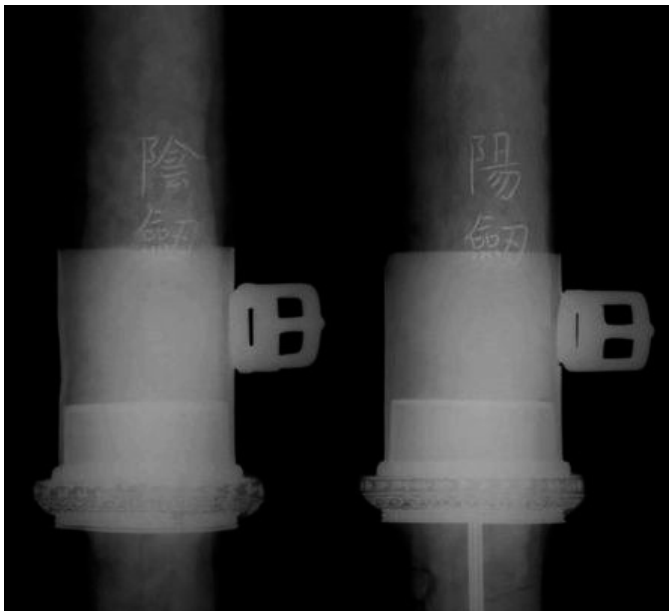
浅井図６　潅仏盤部分



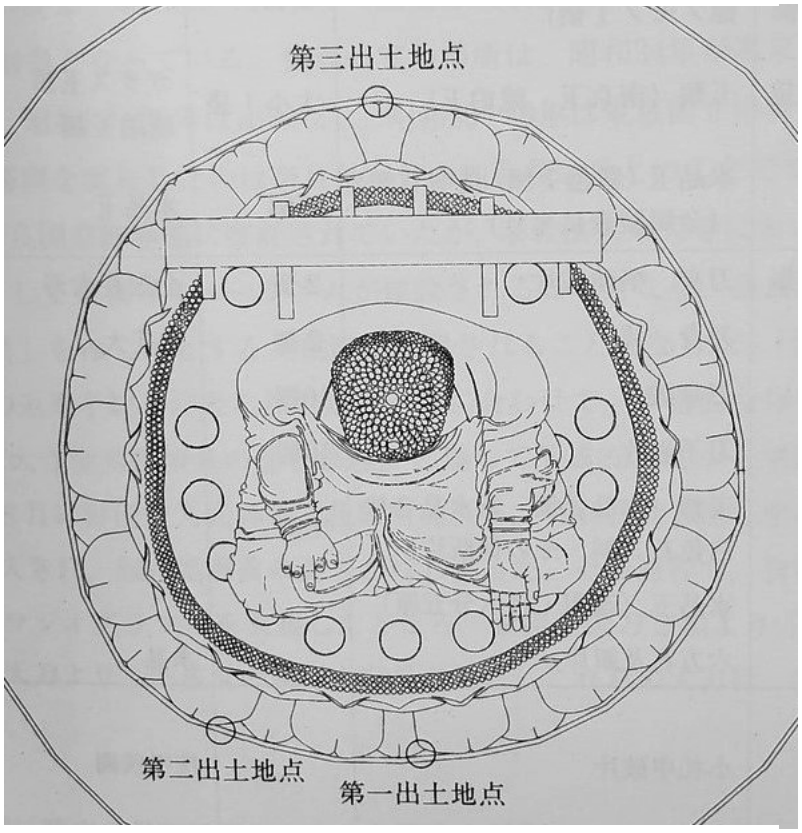
浅井図６　潅仏盤部分



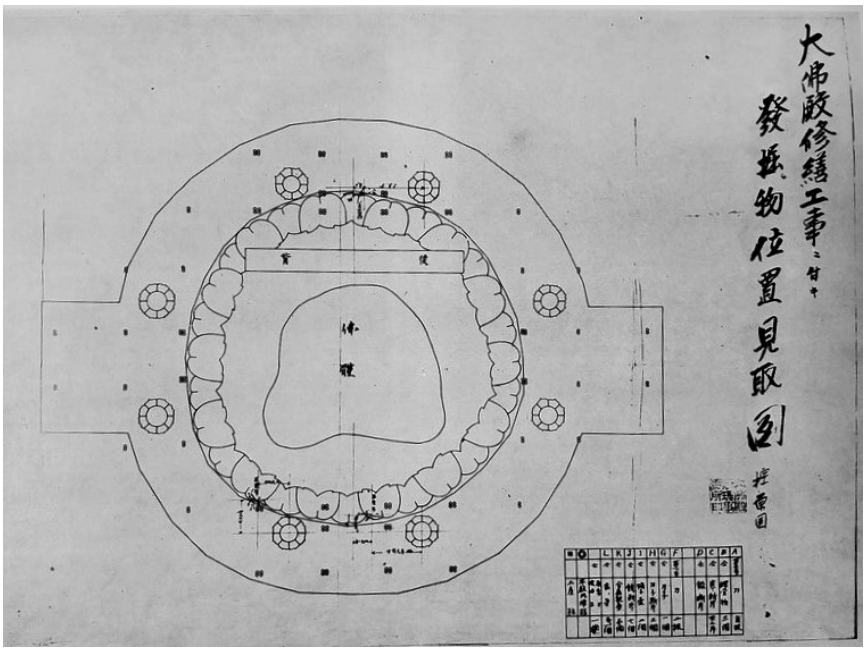
浅井図７　『国家珍宝帳』部分



浅井図８ 「陰劔」「陽劔」X 線写真



浅井図９ 東大寺大仏修繕工事発掘物位置見取図（部分）



浅井図 10　東大寺大仏修繕工事発掘物位置見取図

浅井図 11　東大寺鎮檀具（聖武天皇「聖遺物」）

The Modernist Studies in Asia Network（MSIA）第二回国際学会 Modernism and Multiple Temporalities の企画・開催・運営に関する研究プロジェクト報告書

Final Report of the Research Project: Planning, Organizing and Managing of the Second International Conference of the Modernist Studies in Asia Network（MIA）, “Modernism and Multiple Temporalities”

東京大学総合文化研究科准教授　秦　邦生
Kunio Shin

1. 本研究プロジェクトの概要

本研究プロジェクトは、2019 年 9 月 12 日～ 14 日に青山学院大学 17 号館を会場として開催予定の国際学会“Modernism and Multiple Temporalities”の企画・開催・運営を行うものだった。研究代表者は、2019 年度まで青山学院大学文学部英米文学科准教授だった秦邦生（2020 年度から東京大学総合文化研究科に異動のため、2020 年 3 月末で退職）が務め、チーム構成員としては、麻生えりか先生（英米文学科教授）、Mary Knighton 先生（同）、齊藤公平先生（英米文学科准教授）、来馬哲平先生（同）の全 5 名が参加した。

申請の結果、プロジェクトには文学部附置人文研究所から約二十五万円の予算が付与され、その予算を主に①広報・宣伝活動の強化、②特に海外在住の大学院生を対象とした旅費補助の支給、③参加料減額による一般参加者（とりわけ学生）の増加を目的として使用した。これらの活動がこの国際学会の成功に大いに寄与したことをまず明記し、プロジェクトにご採択いただいた諸先生方に深く感謝したい。

本報告書ではまず、この国際学会の企画・準備・実施について概略を述べ、その後、本研究プロジェクトの三つの目的が果たした役割を説明する。

2. 国際学会“Modernism and Multiple Temporalities”の企画とその背景

本国際学会は、2017 年秋に創設された the Modernist Studies in Asia Network（アジア・モダニズム研究ネットワーク、以下 MSIA と略記）の第二回国際学会として 2018 年 5 月に企画された。そもそも MSIA は 2017 年秋に本研究代表者の秦邦生が、香港教育大学の Emily Ridge、復旦大学（上海）の Nan Zhang、国立政治大学（台湾）の Shun-liang Chao、南洋理工大学（シンガポール）の Kevin Riordan とともに創設した研究ネットワークである。その創設の目的は、アジアの諸国・地域在住のモダニズム研究者間の研究交流を図ると同時に、英語圏をはじめとした他地域のモダニズム研究学術団体とのネットワークを確保することだった。

この背景には、近年のモダニズム研究の急速な国際化と多様化があった。従来「モダニズム」とは、英米やヨーロッパにおける一握りの文学者・芸術家などの作品や文学・芸術運動などを指すことが一般的だった。だが二〇世紀末以降、それを時間的にも空間的にも拡張した概念として捉え返す動向が続いている。それにともない、アメリカを中心とした Modernist Studies Association（1998 年創設）、イギリスの The British Association for Modernist Studies（2010 年創設）、オーストラリアの The Australasian Modernist Studies Network（2011 年創設）など、英語圏ではモダニズム関係の研究団体の新設が相次いでいたが、アジア地域においては多言語の障壁もあり、そうした団体がまだ創設されていない状態だった。

これに対して、2017 年秋に秦が創設に参加した The Modernist Studies in Asia Network（MSIA）はこうした空白を埋める試みである。その創設大会は 2018 年 6 月に Emily Ridge が当時在職した香港教育大学で開催され、アジア各地のほか、アメリカ、イギリスなどの英語圏からも参加者があり、総計で 50 名ほどの発表がなされた。その成功を次につなげるために、二回目の年次大会として秦が青山学院大学での開催を MSIA の運営委員会で提案し、了承された。

2018 年時点で秦は二つの科学研究費補助金の研究計画に分担者として参加していた。東京大学の田尻芳樹教授が代表をつとめる基盤研究 B「現代英語圏文学におけるモダニズムの遺産継承に関する包括的研究」（課題番号 16H03393）ならびに、成蹊大学の遠藤不比人教授が代表をつとめる基盤研究 B「英国モダニズムにおける反心理学の系譜に関する学際的かつ国際的研究」（研究代表者・課題番号 18H00653）である。この研究計画のメンバーとの教義の結果、全員が参加のうえで「国際学会 Modernism and Multiple Temporalities 運営委員会」を組織することになり、おもに海外からの基調講演者 3 名の招聘資金をまかなうことになった。

また開催地となる青山学院大学からは文学部英米文学科准教授の齊藤公平氏が運営委員会

に参加し、国際学会ウェブサイトならびにオンラインでの参加登録料システムの構築と運営に多大な貢献をおこなった。

国際学会のテーマとしたのは、「モダニズムと複数形の時間性」だった。モダニズムにおける「時間性（temporality）」の問題は、伝統的には心理学的時間の観点から「意識の流れ」やテクストの断片性など形式的特徴に注目するアプローチから研究されてきたが、近年では広義のモダニティの経験自体が「時間性の政治学」（Peter Osborne）に規定されてきた経緯に注目が集まっている。「時間による空間の抹消」に関する Karl Marx の観察以来、支配的な時間性（例えば Walter Benjamin のいう「均一で空虚な時間」や E. P. Thompson のいう「時間規律」など）が、資本主義、植民地主義、帝国主義などと共謀してきた様について、多くの批評家たちが研究を重ねてきた。そのような研究はまた、世界各地におけるモダニズムの内包する複数の時間性がそういった支配的イデオロギーに対抗してきた複雑な経緯にも注目している。

今回の国際学会はこのような動向を受けて、モダニズム研究の一層の拡張と刷新を試みるものだった。2008 年の著名な論考“New Modernist Studies”において Douglas Mao と Rebecca Walkowitz は時間軸、空間軸、垂直軸（文化の高低に関する階層秩序）の観点から従来のモダニズム研究を拡張・刷新する洞察を示した。この国際学会は特にこの「時間軸」と「空間軸」との交錯に注目し、モダニズム概念自体の近年の急速な拡大が、世界各地での経験的時間の複数性に関する研究を要請していることを強調した。昨今浮上している「グローバル・モダニズム」という問題領域自体が、個別具体的なモダニティの「場」で生み出された複数の時間性同士の競合や葛藤によっていかに規定されていたのかが、この国際学会の中心的な問題提起となった。

以上の趣旨を記載した英文の発表公募（CFP: Call for Papers）は 2018 年夏にインターネットで公開され、2018 年末までに世界各地から約 120 件の応募があった。発表応募者の在住地別内訳は、日本 31 名、アメリカ合衆国 12 名、イギリス・シンガポール各 10 名、香港・中国・オーストラリア各 9 名、台湾 6 名、インド 4 名、イスラエル 3 名、フランス・ドイツ・トルコ・ベルギー・カナダ各 2 名、韓国・ギリシア・スウェーデン・ウガンダ・ポルトガル・ハンガリー各 1 名であった。またその内容も、英米文学・文化研究を中心としつつ、（特に東西文化交流の見地からの）比較文学研究、映画史、美術・デザイン史など多岐にわたっており、この時点ですでにかなり国際色豊かな大会となることが予想された。

3. 国際学会“Modernism and Multiple Temporalities”の準備と実施

この国際学会では個別の研究発表のほかにも、他の国際学会との連携も重視し、プログラムには北米を中心としたThe Modernist Studies Association（MSA）のスポンサー・パネルが１つ、国際Ezra Pound協会のスポンサー・パネルが２つ、日本ヴァージニア・ウルフ協会と韓国ヴァージニア・ウルフ協会のジョイント・パネル１つが含まれることになった。また初日には院生ラウンドテーブルも開催し、次世代を担う研究者の育成にも貢献を試みた。

このほかに重要なのが、モダニズム研究をリードする研究者たちによる基調講演（keynote lectures）だった。運営委員会での教義の結果、基調講演者は英米文学研究の分野からDouglas Mao氏とLaura Marcus氏の２名、アジア映画史研究の分野からAaron Gerow氏、計３名の基調講演者を依頼することになった。参考までに、この３名の所属大学ならびに主要業歴を次に列挙しておく。

＊参考：基調講演者３名の所属大学、講演タイトルならびに主要業績

（1）　Douglas Mao（Johns Hopkins University）“Time's Mystique”

Solid Objects: Modernism and the Test of Production（Princeton University Press, 1998）

（Ed.）*Bad Modernisms*. Co-edited with Rebecca Walkowitz（Duke University Press, 2006）

Fateful Beauty: Aesthetic Environments, Juvenile Development, and Literature, 1860-1960（Princeton University Press, 2008）

（2）　Aaron Gerow（Yale University）“Explorations of Modernity in Japanese Film Theory”

A Page of Madness（BFI, 2007）

Visions of Japanese Modernity: Articulations of Cinema, Nation, and Spectatorship, 1895-1925（the University of California Press, 2010）

The Research Guide to Japanese Film Studies. Co-authored with Mark Nornes（Center for Japanese Studies, 2009）

（3）　Laura Marcus（University of Oxford）“Modernism's Rhythmical Subjects”

Auto/biographical Discourses: Theory, Criticism, Practice（Routledge, 1994）

Virginia Woolf: Writers and their Work（Northcote House, 1997/2004）

The Tenth Muse: Writing about Cinema in the Modernist Period（Oxford University Press, 2007）

（Ed.）*The Cambridge History of Twentieth-Century English Literature*. Co-edited with Peter Nicholls（Cambridge University Press, 2004）

その後、準備期間を経て、2019 年 9 月 12 日（木）から 14 日（土）の 3 日間にかけて、青山学院大学青山キャンパス 17 号館 5 階教室を会場として開催された。2019 年 8 月 31 日付けで作成・印刷されたプログラム以降、数名の発表辞退者があり、また開催数日前には関東地方を大きな台風が襲い、予定より早く到着していた海外からの参加者のなかには、成田空港で不安な一夜を過ごした者も数名いたらしい。こうした事前のトラブルはあったものの、天候にも恵まれた本国際会議は順調にプログラムをこなし、3 日間に渡る学術交流は奇跡的に大きなトラブルに見舞われることもなく、無事に終了した。

プログラム全体では基調講演 3 件、個別の発表 83 件（全 28 のパネル）、院生ラウンドテーブル発表 10 件（2 つのラウンドテーブル）、計 96 名による講演または研究発表がおこなわれた。この内容については、本報告書に当日に実際に行われた通りのプログラムを参考資料として添付する（本報告書の末尾を参照）。

最終的に参加した講演者・発表者たちの所属大学所在地を具体的に挙げると、日本、香港、中国、台湾、韓国、シンガポール、インドなど東アジア各地のほかに、アメリカ合衆国、イギリス、オーストラリアなどの英語圏各国、フランス、ドイツ、ベルギー、スウェーデン、ギリシアなどヨーロッパ諸国、さらにトルコやイスラエルなど中東地域からも発表者が来日・参加し、総計で 17 の国・地域からの研究者が一同に会するきわめて国際色豊かな学会となった。

このほかに、パネル司会（非発表者）としての参加者 8 名、来聴事前登録者約 30 名、さらに当日来聴者約 30 名を加えると、総計 160 名以上の学会関係者の参加があり、連日どのパネルでも活発な議論が交わされていた。

この国際学会の中核となったのは前述の通り、三名の著名研究者による基調講演である。まず初日 9 月 12 日には Johns Hopkins University 教授 Douglas Mao による“Time's Mystique”と題する講演が行われ、特に Wallace Stevens と Virginia Woolf における世俗的時間経験と死や宗教性との葛藤に関して濃密な議論が展開された。

次に 2 日目には Yale University 教授 Aaron Gerow が“Explorations of Modernity in Japanese Film Theory”と題する講演を行い、西欧と非西欧との文化的非対称関係を反映した「理論コンプレックス」について刺激的かつ挑発的な問題提起がなされた。

さらに最終 3 日目には、University of Oxford 教授 Laura Marcus が“Modernism's Rhythmical Subjects”と題する講演を行い、20 世紀初頭における詩の理論や文化人類学、D. H. Lawrence の旅行記に至る多種多様な文献における「リズム」の両義的可能性に関して魅力的な思索が披瀝された。

これらの講演はいずれも、今回のメイン・テーマである「モダニズムと複数の時間性」という問題をイギリス・アメリカのモダニズム文学から日本の映画理論、さらに現代におけるモダニズム文学の継承に至るまで敷衍して考察するものであり、この国際会議における議論のさらなる活性化と深化に大きく寄与するものだった。

4. 本研究プロジェクトの貢献

2019 年度に新設された青山学院大学文学部附置人文研究所の研究計画として採択された本研究プロジェクトでは、この国際学会の成功を期するために、特に以下の三つの活動によってこの国際学会の認知度を高め、多数の参加者に向かって開かれたイベントとすることをねらいとしていた。

第一の活動としては、2019 年 9 月 12 日～ 14 日の開催当日に向けた広報・宣伝活動の強化があった。そもそもこの国際学会には、秦が 2018 年度の研究費を活用して作成したポスターのイメージならびにそれを活用したオンライン参加登録用のウェブサイトがあった。このデザインは大正時代の日本で製作された『商店図案撰集』という書籍に掲載の図案を、株式会社キュレイターズ代表の水野昌美氏にご紹介いただき、SOY DESIGN のデザイナーである宇澤佑佳氏にご作成いただいたものであり、大正時代の日本モダニズムのデザインを意識したものだった。

これをもとに、本研究プロジェクトでは、とりわけ日本国内を拠点とする関連分野の研究者・教育者・学生などの大学関係者や文学・文化への関心を持った人びとをターゲットとして、ポスターならびにチラシを大部数印刷し、各研究機関や関連学会をつうじた配布をおこなった。発表予定者以外にも参加を促すことは、イベント認知度向上のみならず、発表者たちと一般聴衆との積極的な意見交換を促すことで、より刺激的な議論の展開を促進する効果があった。

なお、このチラシとポスターは国際学会当日も大いに活用された。大会終了時に余った残部についてイギリスとドイツから参加した若手研究者がそれぞれ記念品として持ち帰りたいという希望が出た。このことからもかなりの好評を博したことが分かるだろう。

第二の活動は、特に海外在住の大学院生を対象とした旅費補助（travel bursaries）の支給による参加奨励だった。今回の応募者・発表予定者のなかには、アジア圏のみならず、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカなどから参加予定の大学院生が複数含まれており、旅費の工面に困難を覚えている者が少なくなかった。それらの学生の一部を対象に募集と選考を経て、一人最大 1 万円程度の travel bursaries を支給することで、将来の国際的モダニズム研究を担う各国の若手研究者のネットワークへの積極的な参加を促すことができた。

2019 年 7 月末を期限として公募した旅費補助には、参加予定の大学院生ならびに若手研究者のうち 10 名から応募があり、全員を採択して各 1 万円の旅費補助金を当日支給した。その内訳はシンガポール、台湾、アメリカから各 2 名、インド、トルコ、フランス、オーストラリアから各 1 名であり、若手研究者たちの国際学会での発表奨励のみならず、学会全体の国際化に大きく貢献したことが分かる。

第三の活動は、参加料減額による一般参加者（とりわけ学生）の増加だった。この国際学会は、部分的に科学研究費補助金や青山学院大学英文学会、日本英文学会などからの金銭的支援を受けているが、おもに青山学院大学における約 85 万円の施設使用料をまかなうために、発表者ならびに一般参加者からの参加登録料の徴収をおこなった（事前登録の場合、一般発表者 16,000 円／院生 8,000 円、非発表者 8,000 円）。

しかしながら、非発表者 8,000 円は 3 日間の国際学会とはいえやや高く、学生などの参加には大きなハードルとなってしまった。本研究プロジェクトでは、文学部附置人文科学研究所からいただいた研究活動資金の一部を施設使用料の支払いに充当することで、その分を、一般聴衆の参加料減額にまわすことに決定した。結果として学生の来聴希望者の参加費は 3 日で 5,000 円、1 日で 2,000 円に減額し、学生向けの参加奨励に寄与することになった。

以上三つの活動は、この国際学会を成功裏に終わらせるために不可欠なものであった。ここであらためて、プロジェクトにご採択いただいた青山学院大学文学部附置人文研究所の諸先生方への深い感謝の念を書き記すとともに、プロジェクトに多大な貢献を行ってくれた本課題の秦以外のメンバーである、麻生えりか先生、Mary Knighton 先生、齊藤公平先生、来馬哲平先生の多大なる貢献についても明記しておきたい。

5. 最後に

国際学会“Modernism and Multiple Temporalities”の企画と開催にあたっては、この報告書ですでに記した 2 つの科研費研究プロジェクト、ならびに青山学院大学文学部附置人文研究所からの資金のほかにも、多数の資金援助を受けた。それらは、日本英文学会からの支援金（海外研究者招聘後援事業）、青山学院大学英文学会からの後援金、英米文学科研究活動費による学生登録料援助金などのかたちで、文学部・英米文学科からの後援を受けた。記して感謝したい。

また、2019 年度まで秦が所属した英米文学科の構成員からは、麻生先生、齊藤先生、来馬先生、秦の 4 名が他大学教員と共同で国際学運営委員会メンバーとして開催準備ならびに当日の運営にあたったほか、松井優子先生、Knighton 先生にも発表者としてご参加をいただいた。初日には伊達直之文学部長による開会の辞が読まれ、また 2 日目夜のレセプショ

ンでは学科を代表してアレン玉井光江先生（2019 年度の英米文学科主任）にもご挨拶を頂いた。複数の学科教員によるコラボレーションがあってはじめて可能になったイベントであったことは強調したい。

なお、国際会議終了以降おもに海外からの参加者から数多くの好意的なフィードバックが寄せられた。内容的には基調講演をはじめとするプログラム自体の知的水準への評価のほかに、青山学院大学の好立地や施設の快適性、（アイビーシーエスに発注した）お弁当など飲食類への評価も高かった。このように総合的に考えると、海外の大学関係者に対する青山学院大学の知名度の向上にも一定以上の貢献をすることができたのではないかと考えられる。

客観的に見ると、このように国際学会というイベントの開催に特化したかたちでの研究プロジェクトはやや異例のもののように思われるかもしれない。だが以上で説明してきたように、青山学院大学の知的水準や好立地・快適性などを海外の一線級の研究者たちにアピールしつつ、モダニズムという当該分野でのアジアを一つの起点とした国際ネットワークの構築に資するという点で、本イベントは一定以上のインパクトを持った。日本在住の研究者が海外の国際学会に参加するのみならず、日本を舞台とした国際学会を積極的に仕掛け、ホスト役を務めることで、国際的な研究コミュニティの中でのそのプレゼンスをアピールすることの重要性は、大きく強調できると思う。

残念ながら 2020 年 9 月現在、コロナウイルスの蔓延によって研究にとどまらない全分野での国際交流が停止状態にある。将来的にこのような国際学会を開催しうる機会がいつふたたび訪れるかも分からない状態にあるが、2019 年秋のこの経験をひとつのステップとして、青山学院大学を会場とする活発な国際研究交流が組織・発展されることを願ってやまない。

最後に私事となるが、この国際学会を企画した段階では予想できなかった成り行きで、2019 年度を最後に筆者は青山学院大学文学部を退職することになった。このような大きな国際学会の開催のためにさまざまなご支援を頂いた文学部の先生方にあらためてお礼を申し上げたい。ありがとうございました。

1

The Modernist Studies in Asia Network (MSIA) Second International Conference
'Modernism and Multiple Temporalities' Programme (Revised 2019/09/14)
12-14 September 2019
Aoyama Gakuin University, building 17

◎2019 September 12 (Thursday)

(a) Arrival & Registration **10:00～**

(b) Postgraduate Roundtables **10:30～12:00**

17503 Postgraduate Roundtable A + B	17506 Postgraduate Roundtable C
Moderator: Grace Lim (National University of Singapore)	Moderator: Wanyu Lin (National Chengchi University/National Taiwan University)
Matilda Blackwell (University of Birmingham), "Fluid Temporalities, Subversive Spaces and Queer Female Community in the Asylum Bathroom"	Zoea Tania Chen (Nanyang Technological University), "Real and Imaginary Time in surrealist Andre Breton's *Nadja*"
Cansu Kutlualp (Sabanci University), "The Art of Hunger: A Comparative Analysis of Bartleby the Scrivener and The Vegetarian"	Pang Ru Yan Jeanette (Nanyang Technological University), ""Parturition": Dimensionality of Pain in Mina Loy"
Misako Yora (University of Tokyo), "Creating Utopia: Play in Virginia Woolf's *The Voyage Out*"	Imogen Durant (University of Manchester), "Projecting the Past: Cinematic Influences in Lynette Roberts' Poetry"
Yusuke Sakai (Tohoku University), "An Unacted Part of Community: *Between the Acts* (1941)"	Sarah Fantini (University of Melbourne), "Place and the Present Tense in Mina Loy's Early Poetry"
Tan Teck Heng (National University of Singapore/Kings College London), "Beside/s the Modernist "New": Renovation as Innovation in Ling Shuhua's *Ancient Melodies*"	Akiko Ichikawa (Hitotsubashi University), "Temporality of "England""

(c) Opening Remarks (17512) **12:50～13:00**
Naoyuki Date (Dean of the College of Letters, Aoyama Gakuin University)

(d) Keynote Lecture: Professor Douglas Mao (17512) **13:00～14:30**
“Time’s Mystique” (Chair: Nan Zhang)

(e) Coffee Break **14:30～14:50**

(f) Parallel Panels 1 **14:50～16:10**

17501 1-a	17503 1-b	17506 1-c
Imagism, Futurism, and Mina Loy Chair: Asako Nakai (Hitotsubashi University) Diane Drouin (Sorbonne Université), “‘Like a Live Wire From 1938’: Distorted Temporalities in Mina Loy’s *Insel*” Sarah Lee (Hong Kong Baptist University), “Imagist Simultaneity: Intersections with Futurism and Contemporary French Poetry” Sarah Fantini (University of Melbourne), “Mina Loy’s “Italian Pictures” and the Expansive Temporality of Futurist Objects”	**Modernism and Alternative Temporalities** Chair: Hiromi Ochi (Hitotsubashi University) Yukari Kato (Keio University), “Collecting the Unwanted: Carlisle Indian Industrial School and Sylvester Long’s Red-Facing” Tomohiro Hashimoto (Hitotsubashi University), “Ecological Time in Michelle Cliff’s *Abeng* and *No Telephone to Heaven*” Paul Giles (University of Sydney), “Reverse Time and the Antipodean Imaginary”	**Modernist Aesthetics and the Orient** Chair: Michio Arimitsu (Keio University) Nozomi Naoi (Yale-NUS College), “Creating Japanese Design: Department stores, Designers, and Global Modernism in early 20th century Japan” Karolina Pawlik (SJTU-USC ICCI, Shanghai), “Belated, Reciprocated or Out of Time? Relocating Shanghai’s Visual Modernists in Time” So Young Park (Gustavus Adolphus College), “Aesthetic Time, Global Modernism: Laurence Binyon and Asian Art”

(g) Coffee Break **16:10～16:40**

(h) Parallel Panels 2 **16:40〜18:00**

17501: 2-a	17503: 2-b	17506: 2-c	17508: 2-d
Psychological Temporalities Chair: Marie Geraldine Rademacher (University of Tokyo) Wanyu Lin (National Chengchi University/National Taiwan University), “Sentimental Time in Wallace Stevens” Leslie de Bont (University of Nantes), “‘Pure Time’ and the Female Psyche: Idealism, psychoanalysis and feminine temporalities in May Sinclair’s Fiction” Kohei Saito (Aoyama Gakuin University), “Succession, Anticipation, Renunciation: Temporalized Consciousnesses in William James and Henry James”	**Colonial and Postcolonial Temporalities** Chair: Avishek Parui (Indian Institute of Technology Madras) Nan Zhang (Fudan University), ““Medicine for Fate?”: Colonialism, Timelessness, and Cosmopolitanism in Leonard Woolf’s *The Village in the Jungle*” Akiko Mizoguchi (Tokyo Woman’s Christian University), “Reimagining Modernity in the Battlefield: Multiple Temporalities in Sol Plaatje's *Mhudi*”	**Ezra Pound Society Panel 2: Time and Translation in East-West Modernism** Chair: Youngmin Kim (Dongguk University) Andy Houwen (Tokyo Woman’s Christian University), “Ezra Pound’s Vorticist Time and His Translation of the Noh Play *Nishikigi*” Ryan Johnson (University of Sydney), “Paul Claudel and Ezra Pound before Chinese Ethics and Religion” Yoshiko Kita (Chuo University), “Basil Bunting's Chomei at Toyama”	**Modernism and the Classical** Chair: Kevin Riordan (Nanyang Technological University) Angeliki Spiropoulou (University of the Peloponnese), “Classical Modernism: Antiquity and the Classic in Modernist Writing” Sara Ceroni (University of Massachusetts Amherst), “The Reconstitution of the Translatio Imperii in Alejo Carpentier’s *El reino de este mundo*”

◎2019 September 13 (Friday)

(a) Parallel Panels 3　　**9:00～10:20**

17501: 3-a	17503: 3-b	17506: 3-c	17508: 3-d
Anarchist Temporalities Chair: Kohei Saito (Aoyama Gakuin University) Toru Oda (University of Shizuoka), “Complicating Temporal Scales: Narrative Inventions of Better Humanity in Émile Zola’s Les Rougon-Macquart” James Dutton (University of New South Wales), “Writing Time (Properly): Proust, Proudhon, and the Subject of Inscription” Samuel Rogers (University of the West of England), “Milton and the Modernist Epic: A Cross-Temporal Anarchist Approach”	**Modernism and the Contemporary** Chair: Wanyu Lin (National Chengchi University/National Taiwan University) Sonoko Matsumiya (Kyoto Women’s University), “Stevens’ Internal Time in *The Remains of the Day*” Thomas Gurke (University of Koblenz-Landau), ““that rarefied amalgam of time” – Three Discourses on Time in Mike McCormack’s *Solar Bones* (2016)”	**Time-travelling Imaginations** Chair: Kunio Shin (Aoyama Gakuin University) Cedric Van Dijck (Ghent University/ Netherlands-Flemish Institute in Cairo), “E.M. Forster’s Time-Travels” Anne Witchard (University of Westminster), ““The Ancient East in the West End”: Margaret Morris and *Angkorr* (1917) at the London Coliseum” Kevin Riordan (Nanyang Technological University), “On the Matter of the Time Machine”	**Poetic Temporalities** Chair: Teppei Kuruma (Aoyama Gakuin University) Grace Lim (National University of Singapore), “Desperate Conversation: Transmitting the Untranslatable Elizabeth Bishop and Paul Celan” Paul Bradley Bellew (Fu Jen Catholic University), ““Hours Built Like Cities”: Space, Time, and Disability in the Poetry of Hazel Hall” Avishek Parui (Indian Institute of Technology Madras), “‘There will be time, there will be time’: Multiple Temporalities and Masculine Embodiments in T. S. Eliot’s *Prufrock and Other Observations*”

(b) Coffee Break　　**10:20～10:40**

5

(c) Parallel Panels 4 **10:40〜12:00/12:20**

17501: 4-a (10:40〜12:20)	17503: 4-b (10:40〜12:20)	17506: 4-c (10:40〜12:20)	17508: 4-d (10:40〜12:00)
Japan-Korea Virginia Woolf Societies Joint Panel: How have we read Woolf in Japan and Korea? ——History, Gender, and Politics Chair: Laura Marcus (University of Oxford) Megumi Kato (Tsuru University), "Looking Back and Forward: Woolf Studies in Japan" Youngjoo Kim (Sogang University), "Woolf, Translation, and the Common Reader" Erica Aso (Aoyama Gakuin University), "Cosmopolitanism of Virginia Woolf and Kazuo Ishiguro: *Mrs Dalloway* and *When We Were Orphans*" Janet Cho (Texas A&M University), "Collective Visual Experiences and the Possibility of Human Solidarity in *Mrs. Dalloway*	**Human/non-human Temporalities** Chair: Douglas Mao (Johns Hopkins University) Ruben Borg (Hebrew University of Jerusalem), "Prehuman Time: Joyce and the Curve of an Emotion" Mary A. Knighton (Aoyama Gakuin University), "In the Heart of the Heart of Alterity" Yoshiki Tajiri (University of Tokyo), "Virginia Woolf's Existential Concern with Non-Human Space" Joff P.N. Bradley (Teikyo University), "On the nonhuman kairotic time of extinction"	**Music and Time** Chair: Gen'Ichiro Itakura (Kansai University) Angela Frattarola (Nanyang Technological University), "Temporal Sounds in Virginia Woolf's *Mrs. Dalloway* and Millen Brand's *The Outward Room*" Cheng Huijuan (Shanghai International Studies University), ""Minuet de la cour" in *The Good Soldier*: Finding A Way to Imagine the Ruptured Time" Sue Thomas (La Trobe University), "Jazz modernism and subjective time in Jean Rhys's *Good Morning, Midnight*" Tsung-Han Tsai (independent scholar), "'A movement of return': Music and the Art of Retrospection in Dorothy Richardson's *Pilgrimage*"	**Media, Art and Literature** Chair: Mineo Takamura (Kwansei Gakuin University) Ye Rulan (Fudan University), "Intertextual Cohesion: Modern Art and Literature in Dialogue" Heidi Stalla (Yale-NUS College) & Diana Chester (University of Sydney), "Sound Puppet: A Pen Friendship between Virginia Woolf and Ling Shu Hua"

(d) Lunch **12:20〜13:20**

(e) Keynote Lecture: Professor Aaron Gerow (17512) **13:20〜14:50**
"Explorations of Modernity in Japanese Film Theory" (Chair: Motonori Sato)

(f) Coffee Break **14:50〜15:10**

(g) Parallel Panels 5 **15:10〜16:30**

17501: 5-a	17503: 5-b	17506: 5-c	17508: 5-d
Ezra Pound Society Panel 1: East-West Chronotopes in Modernism Chair: Yoshiki Tajiri (University of Tokyo) Mark Byron (University of Sydney), "The Admonitions Scroll at the Advent of Modernism" Tsuyoshi Hasebe (Kansai University), "On the Theory and Practice of Mori Kainan's *Gushi Pingze Lun* and His Influence on Ezra Pound's Cathay" Miho Takahashi (Kansai University), "Ezra Pound and Noh from a Japanese Perspective"	**Temporalities of Surrealism** Chair: Marius Hentea (University of Gothenburg) Scott Herring (Indiana University), "Outliving Surrealism: The Contemporary Collages of Indra Tamang" Natalya Lusty (University of Melbourne), "Dream Time and Surrealism's Urban Ecologies" Helen Huang (University of Oregon), "A "Demi Rêver" with a "Burning Face": Synchronous Affect in Le Moulin Poetry Society"	**Work, Leisure and Everyday Life** Chair: Nan Zhang (Fudan University) Sudipta Chakraborty (Kalyani University), "Traumatic Banality: An Analysis of Trauma and Banality in R.N. Tagore's "The Broken Nest"" Masashi Hoshino (Toyo University), "Modernism and Spare Time: Storm Jameson's *A Day Off* (1933) and the Problem of Leisure in 1930s Britain" Au Chung To (Education University of Hong Kong), "Inventing Everyday Life: A Study of Leung Ping-kwan's Clothes Poems"	**Present Tense: Cinematic and Performative** Chair: Earl Jackson (Asia University/ University of California, Santa Cruz) Imogen Durant (University of Manchester), "Stepping Out of the Frame: Cinematic Time and Temporal Disruption in Dawson Jackson's Modernist Poetry" Motonori Sato (Keio University), "Virginia Woolf and the Cinematic Present"

(h) Coffee Break **16:30〜17:00**

(i) MSIA General Meeting (17512) **17:00〜18:00**

(j) Reception **18:30**

7

◎2019 September 14 (Saturday)

(a) Parallel Panels 6 **9:00～10:20**

17501: 6-a	17506: 6-c
Progress and Anti-Progress Chair: Noriko Matsunaga (Waseda University) Elif Su Isik (Goldsmiths College University of London), ""However Will We Integrate a Clock into The Body": an Examination of Temporal Culture in *The Time Regulation Institute*" Noriko Nishino (University of Tokyo), "Voices That Float, Gather and Disappear: Ann Quin's *Tripticks* and New Age Spiritualism" Meghan Kuckelman Beverage (Meio University), "Modern Poetry and the Convivial Imagination"	**Genre and Periodization** Chair: Fuhito Endo (Seikei University) Yu Nagashima (King's College London), "Time- and Space-Travelling Imagination in James Hanley's Works during the Second World War and the Aftermath" Eric Sandberg (City University of Hong Kong), "Yesterday, Today, Tomorrow: The Temporalities of 'Golden Age' Detective Fiction" Yuexi Liu (Xi'an Jiaotong-Liverpool University), "Drowning in memory': Mid-century Modernism in Christopher Isherwood's *The World in the Evening*"

(b) Coffee Break **10:20～10:40**

8

(c) Parallel Panels 7　　**10:40～12:00/12:20**

17501: 7-a	17503: 7-b	17506: 7-c	17508: 7-d
Japanese Modernisms Chair: Andy Houwen (Tokyo Woman's Christian University) Masako Hashimoto (Ritsumeikan University), "Resonance between Poems and Illustrations in Earliest Modernism of Japan in the 1910s: Sakutaro HAGIWARA and Kyokichi TANAKA in "Howling at the Moon"(1917)" Douglas Atkinson (Vrije Universiteit Brussel), "Inversion as the Modality of Sustained Flight: Karatani, Abe, and the Remains of Japanese Modernism" Fuhito Endo (Seikei University), "A Modernist Critique of Modernity: Materiality of the Invisible in British and Japanese Modern Art"	**Life, Politics and Empathy** Chair: Mark Byron (University of Sydney) Emily Ridge (City University of Hong Kong), "Revisiting Virginia Woolf's Late Style: Time, Empathy and *The Years*." Kentaro Tabata (Mie University), "Temporalities of Modernist Empathy" Ira Nadel (University of British Columbia), "Modernism, Aging and the Late Style"	**Women's Time Reconsidered** Chair: Kaitlin Staudt (Education University of Hong Kong) Noriko Matsunaga (Waseda University), "Feminist Temporalities and Modernism: Remapping Virginia Woolf's 'Works'" Aiping Wang (Fudan University), "Once Upon a Feminist Time--The Diegetic Time in Women's Writing" Asako Nakai (Hitotsubashi University), "Timeless Workers of the World: Modernist Temporal Imagination and the Wages for Housework Campaign"	**MSA sponsored panel: Archaeologies of Avant-Garde Time** Chair: Grace Lim (National University of Singapore) Lilly Markaki (Royal Holloway, University of London), "Folding Time with Duchamp and Deleuze" Marius Hentea (University of Gothenburg), "Defining the Modern: The 1922 Congress of Paris" Yuki Tanaka (Hosei University), "Against Progress: Time and Style in Djuna Barnes's *Nightwood*"

(d) Lunch　　**12:00～13:20**

(e) Parallel Panels 8 **13:20～14:40**

17501: 8-a	17503: 8-b	17506: 8-c
Victorian and Modern Chair: Anne Witchard (University of Westminster) Yael Levin (Hebrew University of Jerusalem), "Joseph Conrad's *Chance*: Determinism, Contingency and the Dictates of Narrative Form" Yuko Matsui (Aoyama Gakuin University), "Clearing "the Spot an Angel Deigned to Grace"?: Scott as Victorian Canon and Multiple Modern(ist) Narratives" Jessica R. Valdez (University of Hong Kong), ""Our Impending Doom": Death, Seriality, and the Proto-Dystopian Novel"	**Filmic Time** Chair: Aaron Gerow (Yale University) Kosuke Fujiki (Okayama University of Science), "Between Abjection and Nostalgia: *The Vindictive Snake* and the 1930s Okinawan Diaspora in Hawaii" Chak-kwan Ng (Open University of Hong Kong), ""Some Things Last": Transience and Experiential Temporality in Fitzgerald's "The Curious Case of Benjamin Button" and Its Film Adaptation" Earl Jackson (Asia University/University of California, Santa Cruz), "Aftermath and Interval: Hermeneutic Temporalities at the Margins of Action in *Ashes of Time* and *The Assassin*"	**Intersections of Time and Space** Chair: Akiko Mizoguchi (Tokyo Woman's Christian University) LI Shuangzhi (Fudan University), "Heterotopias of Time in Thomas Mann's *The Magic Mountain* and Hermann Hesse's *Steppenwolf*" Kunio Shin (Aoyama Gakuin University), "Utopia's Inhuman Temporality: H. G. Wells' *The Shape of Things to Come* and Its Film Adaptation" Abbie Garrington (Durham University), "Clock Time, Clerk Time, Mountain Time: Modernist Workers Access the Alps"

(f) Coffee Break **14:40～15:00**

(g) Keynote Lecture: Professor Laura Marcus (17512) **15:00～16:30**
"Modernism's Rhythmical Subjects" (Chair: Fuhito Endo)

10

(h) Final Roundtable (17512) **16:40～18:00**

"Reconsidering Modernism and Multiple Temporalities"
Chair: Kevin Riordan (Nanyang Technological University)
Panelists: Douglas Mao (Johns Hopkins University)
Yoshiki Tajiri (University of Tokyo)
Mark Byron (University of Sydney)
Anne Witchard (University of Westminster)
Youngmin Kim (Dongguk University)
Emily Ridge (City University of Hong Kong)

In this closing roundtable six distinguished modernist scholars, working at universities around the world, will reflect on the conference's proceedings and its central theme. When are modernism's multiple temporalities? How do we engage with modernism's pasts, confront it in the present, and dream its futures? How do modernisms here, converging in and arising from Asian contexts, inform the field's current challenges and opportunities? Each of the panelists will share what they believe to be the most salient themes of the conference before we open to a broader conclusive conversation with all conference participants.

文学部附置研究
「公共空間における〈短文のジャンル〉」の活動報告

Le genre bref dans l'espace public

文学部フランス文学科・教授　France Dhorne

昨年度より文学部附置人文科学研究所として発足したわれわれの研究グループは、すでにその3年前より本学の協定校であるフランスのパリ第3大学・ポー大学とのあいだで国際研究を続けてきており、2017年3月には本学においてフランスの研究者を招いて2日間にわたる国際シンポジウムを開催している。それゆえ本学附置研究所として再スタートしたわれわれの研究活動の目標のひとつは、これまでの研究を総括しつつ、「短文のジャンル」（簡潔ジャンル）というこれまであまり注目されてこなかったが、しかしわれわれの社会の「公共空間」に頻出し、それを形成しているとも言えるこの言語活動にどのように理論的にアプローチできるかを総括することであった。

それぞれの研究メンバーはそれぞれ異なった具体的な事例を取り扱いながら研究考察をすすめてきたが、そこで浮かびあがってきたプラットフォームとも言うべき問題は「制約」contrainte であった。すなわち〈短文のジャンル〉の言説は、時間的あるいは空間的な「制約」のもとで異なったパラメーターを編成することによって成立するということである。たとえば街頭に提示される「看板」や「標識」、通信機器等における音声メッセージなど、さまざまな時間空間的、あるいはマテリアルなフレームという「制約」がある。そしてその「制約」をむしろ活用し協働するために〈短文のジャンル〉においては、「イコン性」を導入するなどの戦略に訴えることが多い。ここにはきわめて複雑な記号論的なオペレーションがある。あるいは、われわれが扱う「公共空間」の〈短文のジャンル〉において、多くの場合、その言説の受信者は、「公共空間」を移動する者であり、そこでは「運動」性がきわめて重要なファクターとなる。さらに、最終的には、発話主体ばかりか受信者である共—発話者も匿名の、あるいは無名の主体であることが多く、ここにこそ「公共空間」を形成するもっとも根源的な軸としての間主観的な発話空間の形成という問題が浮かびあがってくる（「規則」、「法」、「道徳」といった倫理的次元の形成のあり方も問題となってくる）。すなわち、マルチモーダルの言語学が要求されるのである。われわれの研究は、フランスと日本の「公共空間」を対象にしており、それぞれの文化の特性による「公共空間」の形成の微妙な差異

なども浮き彫りにされるが、最終的には、「公共空間」一般がそれによって形成される「短文」という言語的発話一般の類型論を理論化することを目指すものである。

＊

われわれの研究活動は、基本的に、年３回開催する研究集会を通して、個々の成果を発表し、討議することで問題を共有することにしている。

2019 年 8 月 3 日：公開研究会

第１回の研究集会は、2019 年 8 月 3 日に、公開研究会として本学において開催された。研究の対象、データ収集、視点、方法は一見統一性がないように見えるが、このようなアプローチの多様性が新たなパースペクティヴを生むことは最後に掲げる 2020 年 3 月 1 日のオンライン・フォーラムの紹介の中で明らかにする。

全部で 11 の数に上る研究を１つだけの視点から分類することには無理が伴うが、最終的には様々なネットワークが 11 の研究がお互いに無関係に見えるにも拘らず、やがて再統合を通して〈短文のジャンル〉の構築を志向することをタイムラインに沿って示すためには不可欠であろう。

われわれはこの時点における研究を４つに分類した。まず（1）〈短文のジャンル〉は公共空間という制約の中では不特定多数の受信者の注意を引かなければならない。オノマトペ、テクストの分類（お願い、注意、警告）、擬似外国語という３つの問題提起をここにおいた。（2）注意を引くという目的は構文・談話・文形式などの言語技術の活用によって実現する。名詞構文、展覧会タイトルの重層構造、広告における命令形はまさにこの視点から同一分類に属す。（3）語彙・構文そして談話的重層構造は発信者側のストラテジーと捉えうるが、受信者を考慮に入れるとどうなるのだろうか。情報構造のレヴェルに重なってコミュニケーション・レヴェルを想定することで、公共空間では一見不可能に見える発信者と受信者の間のインターアクションを再構築できるという仮説の下に、対話関係が皆無と見える地名表示、広告における仮想受信者への働きかけ、音声アナウンスによる直接の話かけという３つの研究を纏めた。（4）最後に公共空間そのものへの問いかけを置いた。共同研究の基盤であるこの概念の議論は様々なアプローチへの広がりと提携、そしてそこに決定的役割を果たす言語のあり方が議論される。

A．注意喚起の形態としての〈短文のジャンル〉

1.「公共空間におけるオノマトペの使用について」

オノマトペはそれ自体がきわめて短い表現であり、かつ都市空間に現れる広告や看板などできわめて高い頻度で用いられる。われわれは、オノマトペは西欧でしばしば考えられているように、単なる「音の模倣」の表現なのではなく、感覚的な経験を総合的に「声」に転換し、さらにはそれを「演出」する表現であるという仮説を提出したい。そして、ここでは、漫画（新たなオノマトペの創造空間）、商品販売用のカタログ（ステレオタイプ的オノマトペの使用空間）、公共空間における看板という三つの異なったテクスト・ジャンルの具体例を検討することを通じて、オノマトペは、たとえそれがきわめて高い連想性を発揮するにしても、かならずある「場面」の知覚表象が必要であり、この表象は販売カタログの場合には現実（または仮想）経験が、漫画の場合には画像が可能にすることを論じる。

公共空間における言説には少なくとも二つの異なった様態（モード）がある。ひとつは経験が関与する様態で、知覚主体が広告が提示する「場面」に同一化する場合であり、もうひとつは、公共空間を移動する受け手の注意を一瞬で引きつけるという目的のために、語用論的かつ修辞的戦術レヴェルにおいてごく短いと同時にインパクトの大きいオノマトペの創造が動員される場合である。

France Dhorne（青山学院大学文学部フランス文学科・教授）

2.「日本の公共表示における「見出し」について」

本研究では、日本の公共表示における「見出し」を分析対象とする。「見出し」とは、通常公共表示の最上部に位置する短い名詞表現で、フォント、印刷の向きなどから後続テクストからは明らかに峻別された物理的特徴を持つ。具体的には「お願い」「お知らせ」「ご案内」「（ご）注意」「警告」などである。一見すると、「見出し」は、後続テクストの内容を簡潔に伝える情報機能を持っているように見えるが、実際には、後続テクストが同一でも、異なる「見出し」が使われる場合もあり、むしろ受信者に対する権威的な印象を和らげたり、逆に厳しく要請したりする対人関係の調整マーカーであるように推察される。とりわけ、商業施設で使われる要請や依頼を行う表示では、受信者を不快にせずに要請をする「お知らせ」や「ご案内」が「お願い」の代わりに使われていた。なお、このような「見出し」は、フランス語や英語の公共表示では非常に少なく、「見出し」が要請ストラテジーとして日本語特有のものなのか、公共表示の日本語のテクスト構成を知る手掛かりになることを示唆した。

中尾和美（東京外語大学・非常勤講師）

3.「日本の公共空間における「フランポネ」の表記の特徴」

日本の公共空間の中では、主に店名や商品名において、フランス語またはフランス語「ら

しい」表現を用いた名称がしばしば観察される。本発表では、日本の公共空間に観察される「フランス語らしさ」を構成する要素について特に書記表記を中心に分析した。

フランス語由来の外来語は他の言語要素の利用と同様に音や意味のレベルでしばしばずれが起こるが、特に商業的戦略として用いられるフランス語の文字や語彙では、ただ音や意味がずれるというのではなく、フランス語の規範を逸脱して、規範文法を参照する限り誤用と判断される事例も見られる。これを日本でだけ通じる「フランス語らしさ」（フランポネ）と規定する。この「フランポネ」において特に目につくのが、フランス語のアクセント記号の多用である（Délifrance, pléchef, pêche など）。これは、それぞれの語の意味ではなく、むしろ文字として、日本で最も一般的に見られる英語表記と異なった「フランスらしさ」の視覚的効果を狙ったものだと考えられる。言葉の本来の意味ではなく、文字の形態が新しい「意味」を生み出すのであり、そこには、漢字という表意文字の文化を根底にもつ日本に特有の造語的創造性が見られるのである。「日本的フランス語」の定義は困難なものであるが、英語に現れにくい綴り字記号に記号論的に興味深い意味操作が認められ、伝統的な記号論では説明しきれない簡略化操作 court-circuitage を見いだすことができる。

松田理沙（筑波大学大学院韻文社会科学研究科博士課程）

B．広告の技法としての短文のジャンル

4.「日本語とフランス語の広告に見られる、指示詞を含む名詞文について」

この研究では、日本とフランスの化粧品の広告ポスターなどにおいて観察される、「この肌のハリ！」、Cette fraîcheur du teint !（この顔色の瑞々しさ！）といった指示詞を含む名詞文を比較した。まずどちらの言語でも、この構文では、「ハリ」、「瑞々しさ」といった身体感覚を表す名詞が頻出すること、さらに感嘆の意味が表されることを指摘した。そして、こうした名詞文は通常、なんらかの画像と共に現れるが、日本語の広告にはしばしば商品のイメージしか見られないのに対して、フランスの広告には商品の使用者であるモデルのイメージが見られる、という違いがあることを指摘した。さらに広告文の目的は、それを目にする消費者に、これらの文の（仮想的）発話者に同化するよう促すことであるが、そのように消費者が一体化する発話者は、日本語の場合には、当該の商品を使用しその効果に驚く消費者の一人と考えられるのに対し、フランス語の場合には、商品の使用者であるモデルを眺め賛美する者と考えられると主張した。

金子　真（青山学院大学文学部フランス文学科・教授）

5.「公立美術館の展覧会タイトルについて」

本研究は、関東地方にある国立、都立、県立の美術館において開催された展覧会のタイトルを分析する。調査対象としたのは、公共空間に掲示されたポスターや、公共施設において

流布されたチラシなどの広告媒体に掲載された展覧会タイトルである。一般的に美術館は文化遺産として歴史的な価値を有する作品を保存・展示するとされる公的施設であり、そこで開催される展覧会のタイトルには絶対的時間マーカーとして機能する語彙（様式や制作年など。（例）「1950 年代の日本美術―戦後の出発点」）があらわれやすい傾向にあるということが想定される。この傾向はスイスの美術館で開催された美術展タイトルを分析した研究においても認められている。一方で、本研究で収集したデータにおいては、相対的時間マーカーの特徴的な使用が観察された。このような観点から、本研究では、相対的時間マーカーとして機能する語彙（（主タイトルの前に置かれる、記念行事としての展覧会のきっかけ。（例）「日伊国交樹立 150 周年記念　カラヴァッジョ展」）の分析をおこない、展覧会タイトルにおいて、歴史的要素をコミュニケーション状況の現在へと結びつけようとする言説ストラテジーが認められることを示した。　須藤佳子（日本大学商学部・准教授）

6.「広告のキャッチコピーにおける命令形」

本研究は、日本とフランスの広告のキャッチコピーに見られる命令形について考察する。フランスの広告キャッチコピーには対象商品の分野に関係なく命令形が多く観察されたが、これらは提案、勧め、誘いを表す。雑誌広告では、抽象的で広告の対象商品とは無関係の内容（例：Réveillez l'énergie qui est en vous. あなたの中のエネルギーを目覚めさせよ。Peugeot）が多いが、駅や街中の広告は、対象商品に密接で具体的な内容（例：Venez découvrir toute la gamme Bose dans votre nouvel espace Bose Alésia. 新しいあなたの Bose Alésia スペースに Bose の全商品を見つけに来てください。）である。日本の広告キャッチコピーに命令形は少なかったが、ターゲットが若者である学校、教育関係の広告で観察された。（例：世界は君を待っていない。君が世界をつかみに行け。学習院大学。）ターゲットに対する親しさ、親身さが感じられ、躊躇する心に対する激励と捉えることができる。日仏共に、命令形で表現されている内容の実現は、広告のターゲットにとって望ましいことと発信者が想定するものである。命令形は発話に対話者を前提とし、読み手との間に対話を作り出す効果がある。広告の場合、対話に状況がなく、それを画像で表現し、広告の読み手に何らかの感情を引き起こそうとし、対話は広告の中で完結する。広告の発話はその意味で特殊であり、その命令形も、通常の会話では見られない、広告の特有のものが多い。

志村佳菜子（東海大学・非常勤講師）

C. ディスコースの戦略としての〈短文のジャンル〉

7.「インフォメーションとコミュニケーション：公共空間における場所の表示について」

本研究の目的は鎌倉市の入り口に「鎌倉市」とある表示の類の性質を探ることにある。この表示は多くの国や共同体で観察できるものだが、これを場所の情報を与える表示であると

考える静的な考察が不十分であり、コミュニケーションという動的なディメンションがより重要であると考える。

情報とコミュニケーションとの区別を次のように規定しよう。情報Ｉはそれを発信するものＥとそれを受信するものＲとを前提とする。古典的にＥがＩをＲに伝えるという形式である。それに対してここでいうコミュニケーションとはＲが何らかのプロジェクトＰを持ち、このプロジェクトの遂行にＩが前提となる時、Ｉが単なる情報ではなくてＰ実現の必要条件であり､ＩとＰとの関係を考察するきっかけをＲに与えるという発想である。例えば「鎌倉市」の表示は単に鎌倉市に到達するという目的を持ってＲが移動するわけではなく、むしろその場所で何らかの、例えば友人の訪問とか何らかの購買などの目的を実現するというＰをもっての移動であると考える。ここではＲが移動することが前提とされていて、表示の傍に居住する住民には関係がない。

一般にＩのソースとしてのＥは忘れられ無視されるが、ＥはＩという情報のソースとしての責任者であり、その意味でＲとの隠れたネゴシエーションが成立していると考えるのである。

川口順二（慶応義塾大学・名誉教授）

8.「公共空間における日本のビール広告に関する考察」

本研究では、公共空間に掲示された日本の大手ビールメーカーの広告を取り上げた。自ら市街で収集した実例とインターネット上で収集した例、合わせて 85 例に見られる言語的、言語外的特徴を整理した。ビールの広告は、他の商品同様、様々な要素から構成される。言語的な要素として、メーカー名、商品名、広告スローガン、アルコール摂取に関する注意を挙げることができる。非言語的な要素には、メーカーのロゴ、ビールの容器（ジョッキ、グラス）、ビールそのもの、人物、背景がある。広告スローガンについて、その特徴を以下のように記述した。統語的特徴として、動詞文もあれば非動詞文もある。非動詞文には、名詞句で終わるタイプと格助詞を伴うタイプがある。意味内容の特徴として、味、泡、原材料、製法、そしてビールと直接的な関係を持たない価値に言及するものがみられた。動詞文に関しては、社会言語学的特徴として、丁寧体、普通体、そして無標の形式を確認できた。最後に、同じ商品の異なる媒体による広告を比較した結果、一人称を伴うスローガンは、人物が現れるバージョンのみに限定されるのではないかと考えた。

山本大地（福岡大学人文学部・準教授）

9.「公共空間における音声アナウンスの特徴」

本研究では、発車間際の電車に駆け込もうとする利用者に対して、駅員が「駆け込まないでください」と注意するホームでのアナウンス（日本）や、監視カメラ付きの公園の敷地内で地面にゴミを捨てた利用者に「Madame, ici la police municipale. Veuillez ramasser vos

déchets s'il vous plaît.（こちら警察です。ゴミは持ち帰るようお願いいたします）」とカメラとともに設置されたスピーカーを通して警察官がその場で注意するアナウンス（フランス）の事例を取りあげた。これらの発話場面でのメッセージのように、公共空間における音声アナウンスには、特定の相手に直接呼びかけることで双方の存在が特定される種類がある。そして、このような伝達場面では特定の対象がメッセージの宛先であるが、同じ空間にいる周囲の不特定多数の利用者もまたメッセージの受信者となる。本件では、このように異なる立場の主体が関わる特徴的な発話主体間関係について言及した。さらに、特定の対象に注意喚起や協力要請を呼びかける言語形式が、周囲の不特定多数の対象に行為の遂行を促す「二次的な波及効果」を生みだす可能性についても指摘した。

安齋有紀（島根大学法文学部・准教授）

D．公共空間の多元的な形態

10.「日本における言語景観に関する社会言語学的および商業記号学的考察」

日本における公共空間ならびに商業空間で見られる広告や商品に付随する言語表記（特にフランス語）に焦点を絞り、日本人の語彙や関連する言語知識（音韻・音素、表記、意味、統語）の変化を通して、日本の社会言語学的表象を明らかにした。それに従って、日本の言語景観に占めるフランス語に関するコーパスを収集し、類型を確立しながら、背後にある社会言語学的動態を分析する。また、付随する非言語情報も分析に取り入れて、商業記号学的な考察を加える。理論的に、公共空間における言語実践や空間利用の文化習得の問題を扱うために、都市社会言語学と都市人類学を援用している。前者ではコード・スイッチング、社会・地域コード（レジスターなど）や、クレオール研究にも見られる新たな言語コードの生成の視点から考察し、言語社会学のマクロなアプローチを取り入れる。後者は、建築物や都市施設の物理的側面から、利用者によるさまざまな空間実践（占有、変容、演出、正当化、合法化、不使用など）に至るまで、多様な見方を可能にする。両者とも、リチャード・ドーキンスの「ミーム学」で扱われている文化的特徴の変容を扱う点で共通している。

木田　剛（獨協大学外国語学部フランス語学科・教授）

11.「公共空間における言語の機能について」

言語を通してどのように公共空間を定義できるかという基本的な問題設定に対して、ここでは「空間」という概念の機能を検討することでアプローチする。まず第１に、「空間」とは、短文のメッセージ（駅やホテルの廊下、道路などの掲示や看板など）の叙述内容が「状況」として演出される場であるが、それは、その度ごとに、その特定の状況に固有のさまざまな関係話者のシステム（駅における鉄道利用者、広告における消費者など）が構築されるということを含意している。すなわち、「空間」という概念は、ここでは、ある種の「切り

取り」découpage、すなわちフレーム設定という、連続的なものとされる一般的な「空間」概念とは異なった機能を果している。そして、この演出的な「切り取り」効果は、なによりもその言語メッセージの受け手そのものを、ある意味では、「つくり出す」機能を果す。その度ごとに、たんなる通行人をある商品の（潜在的）消費者に、（公共トイレの場合では）非特定の利用者を「公共的な規則」をまもるよき市民へとつくり直すという「演出」がそこでは仕掛けられているのである。

Baptiste Puyo（東京外国語大学大学院総合国際学研究員・専任講師）

なお、この公開研究会のあと、発表した研究メンバーの内の４名（Dhorne, 金子、須藤、中尾）が、発表の成果を踏まえて、2019 年 10 月 10 日～ 12 日フランスの Bayonne の U.P.P.A. 大学において開催されたシンポジウム（「語彙とジャンルの境界」）に参加し研究発表を行った。

*

2019 年 12 月 8 日：講演会

2019 年 12 月 8 日には、社会言語学者 Peter Backhaus（早稲田大学教育学部教授）を本学に招き、講演「社会言語学から見た東京の Linguistics Landscape」を行ってもらった。

Backhaus 氏は、すでに 1990 年代から、社会言語学の領域で、公共空間における多言語、多文化現象を、とりわけ東京をフィールドとして研究してきているこの分野のパイオニアでもある。かれの研究は、すでに *Linguistics Landscapes – A Comparative Study of Multilingualism in Tokyo*（2006, Multilingual Matters）として出版されており、その業績は国際的に評価されている。そこでは「linguistics landscape」という問題設定を通して、多言語文化の公共空間における広告看板についての考察など、――文法や言語理論へのフォーカスは行われてはいないものの――われわれの研究と重なるものが多い。今回の講演では、かれは、かれ自身がまだ研究に着手していない多くの広告・看板のコーパスを取り上げ、またとりわけ「危険」喚起の表象や書き文字の「イコン性」（iconicity）について独自の見解を発表した。われわれにとっても、隣接領域からの「もうひとつも異なった視線」を学ぶ貴重な機会となった。

*

2020年3月1日：オンラインのフォーラム

2020年3月1日、当該年度3回目の研究会をオンラインで行った。3時間にわたる研究会では、それぞれのメンバーが事前に提出したレジュメに従って、これまでの研究を総括しつつ、そこから見えてきた新しい研究課題について意見交換した。

本稿で提示した各メンバーの研究の要約から今後の展望についていくつかの指摘が可能になった。多様な研究分野に加えて用いられる方法の違いがあるがそれらに共通する視点、共有する問題が浮き上がってきたと考えられるのである。これはそれぞれの研究の視点の範囲を超えて、共同研究全体により一般的な展望と新たな視点の導入を導く強力な契機となることは注目に値する。

本研究は言語表現を中心にして公共空間に観察される様々な現象を画像や音声表現をも考慮に入れて考察した。公共空間における簡潔ジャンル genre bref は、広告（商品の推奨）、注意書き（禁煙）、警告（危険！）、商品名（みすず飴）、地名表示（鎌倉市）、道路標識（一時停止）など多様なジャンルにより構成され、オノマトペ（ベトベト）、名詞構文（この柔らかさ！）、感嘆文、擬似外国語（pléchef）、同音反復（頭韻、脚韻）、リズム構造（5・7・5）などの表現技術の頻繁な使用はそこに統一性を予想させる。ここでは次に述べる2つの特徴に基づいて成果をまとめると同時に今後の展望に言及したい。（1）簡潔さは俳句やソネットのような文学的サブジャンルが短さを必要条件とするのと異なり、公共空間のテクストとして広告、警告、地名表示などのサブジャンルを超えて共有される。（2）公共空間のテクストは知覚者がそれに注意を集中して解釈に時間を掛けることは稀であり、従って瞬間的な知覚と理解が前提となる。

（1）は簡潔ジャンルが言語学的に規定されうる概念であることを示すが、その背後にテクストのソース（広告主、地方共同体、ＪＲ）もターゲット（デパートなどの客、通行人、地下鉄利用者）も共に特定の個人を想定して構築されるものでないという特徴がある。ただしその機能を果たすためには特定の知覚者が必要であり、不特定多数のターゲットが個に転換する契機が重要になる。発話に関与する様々な主体・参加者がそれぞれテクストにおいてどのように機能するのかは本研究のメインテーマである。例えば広告は商品に興味を持ちうる不特定多数の人々をターゲットとして設定するが、ターゲットの性質・特性の規定と広告のテクストや画像の選択の間に作られる緊張関係、そして不特定多数が個に収斂する時点でのプロセスを発話理論の中でどのように記述できるのかが話題になる。

（2）で述べる一瞬の知覚・理解の要請を考えよう。（A）「禁煙」は電車や役所などに掲げられることで瞬時の理解が可能になるわけで、高速道路の真ん中では理解を伴わない。テク

ストはその置かれた空間やその近傍の特性が理解を可能にする。広告の画像などもこの機能を持つが、広告に注意を引くために画像やテクストに工夫がこらされる点で場所表示と対蹠的である。地名表示は設置される位置に基づく直示性が重要だが、商品名では創造性が求められるのであり、ここに不特定多数の知覚者が個に転換する契機を探ることが可能である。またテクストの媒体（看板、貼紙、垂れ幕、のぼり；車内放送、町内放送）もこれに深く関与する。(B）瞬時の理解という概念そのものも問われなければならない。理解に直観 intuitif と論理 discursif を両極とする軸を想定すると、瞬時の理解とは直観領域か近傍ゾーンを活性化するという仮説が考えられる。テクストはあくまで言語表現であるがその狙う理解が直観的な把握なのである。直観的理解とは対象の前言語的把握である。オノマトペがその代表的言語形式であり、音的特徴はテクストの論理的把握の前段階に位置する。他方場所表示はその知覚が移動主体のプロジェクト（パリで友人に会う、鎌倉でパンを買う）実現の場を示すことができるが、それ以前に地理的・社会的・文化的イメージを喚起するものであり、ここに直観的理解のモチーフがある。公共空間における簡潔ジャンルはそれを構成するそれぞれのメンバーがこの瞬時的把握を発話理論、語用論、命名論、社会言語学などのパラメータを特徴的に活用することで出現する言語領域であると考えられるのである。

研究プロジェクト「動詞とその項 ―英語とフランス語の格構造を中心に―」報告書

On the Verb and Its Arguments: With Special Reference to the Syntax and Semantics of Case in English and French

プロジェクト代表　尾形こづえ
OGATA Kozue

本プロジェクトは英語とフランス語の格構造研究をテーマとし、特に2019年度は与格、位格、対格、および状況補語等の対立を言語事実に基づき研究することを目指した。各研究者の理論的背景の違いは尊重しつつ、テーマをめぐる言語事実を明確に提示し、分析・考察を進めた。

英語は世界で最も研究されている言語であり、フランス語も英語に続いて研究されていると考えられるが、英語・フランス語を専門とする研究者がそれぞれの言語についてこの分野のこれ迄の研究と現状はどのようなものかが明らかになるように心がけた。分析は一定量以上の実例分析を基本とし、両言語において格関係（＝統辞機能）が文のタイプを特徴づけていて、これらの文のタイプが体系を成している点に特に注目した。

以下に続く7点の研究報告は英語、フランス語、さらにロシア語の言語事実の観察に基づく、与格、位格、対格をめぐる言語現象の研究で、多様な視点から格関係が幅広く論じられている。次に述べる事情で2019年度中は研究成果をもとに対面で議論する機会を持つことはできなかったが、近い将来そのような機会を持ち、意見交換することにより、一層の成果が得られることが期待される。

このグループのプロジェクトとしての活動は2019年6月にプロジェクトが成立して以来であるが、その出発点はメンバーの英米文学科中澤和夫教授、同高橋将一教授が長年主催してきた研究会ALL（Aoyama Linguistics and Literatureの略称）にある。この研究会にフランス文学科金子真教授、尾形が参加し、4名が同じ学部に所属し、英語・フランス語、ひいては言語一般の格にまつわる問題に関心を持っていることから、格構造研究を大きな共通のテーマとして、共同研究を進めることを計画したものである。開始にあたり、格構造をめぐって際立った研究を発表しているフランス語分野の3名の研究者、敦賀陽一郎東京外国語大学名誉教授、井口容子広島大学教授、武本雅嗣山口大学教授に学外メンバーとして参加

していただくことに決定し、7 名のメンバー間で緊密に連携して研究を進めてきた。

年度末の 2020 年 2 月 28 日に本学で公開の研究発表会を開催すべく、互いの発表要旨に基づく意見の交換を行ってきたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により寸前に中止せざるを得なくなった。

幸い 2020 年度も高橋将一教授を代表者として同じ学内・学外構成員で共同研究を継続することが決まっており、引き続き、英語、フランス語、場合によっては他の言語も加えて格構造をテーマとする研究を進めていく予定である。

【研究報告】

動詞の語彙的意味と対格をめぐって
―統語的機能構造の観点から―

中澤和夫
青山学院大学　文学部英米文学科

さまざまな動詞がさまざまな構文を取ることは当然と言えば当然であるが，ある場合には，似ているタイプの動詞が異なる振舞いをすることがある。そういった事実について，可能な説明がある場合は，それらを示唆したい。以下，例を若干取り上げ検討する。

まず，次のような例を考える。

(1)　a. John believes that Mary is a genius.
　　b. John believes Mary to be a genius.
　　c. Mary is believed to be a genius.
　　d. It is believed that Mary is a genius.（= We believe that Mary is a genius.）

(2)　a. John said that Mary is/was a genius.
　　b. *John said Mary to be a genius.
　　c. Mary is said to be a genius.
　　d. It is said that Mary is a genius.（= I hear that Mary is a genius.）

(3) a. *John rumored that Mary is/was a genius.
b. *John rumored Mary to be a genius.
c. Mary is rumored to be a genius.
d. It is rumored that Mary is a genius. (= Rumor has it that Mary is a genius.)

(4) a. John murmured that Mary was a genius.
b. *John murmured Mary to be a genius.
c. *Mary is murmured to be a genius.
d. It is murmured that Mary is a genius.

(5) a. John mumbled that Mary was a genius.
b. *John mumbled Mary to be a genius.
c. *Mary is mumbled to be a genius.
d. *It was mumbled that Mary was a genius.

(6) a. John muttered that Mary was a genius.
b. *John muttered Mary to be a genius.
c. *Mary is muttered to be a genius.
d. *It was muttered that Mary was a genius.

(7) a. John whispered that Mary was a genius.
b. *John whispered Mary to be a genius.
c. Mary is whispered to be a genius.
d. It was whispered that Mary was a genius.　(以上，中澤　2015: 268-269)

従来の格理論による説明では，believe のように例外的格付与が可能で（1b），しかし格付与がなかったならばその名詞句は受け身の主語に移動可能（1c）というものだが，一方 say は例外的格付与を持たないので（2b），名詞句はどこかに移動せねばならず主語位置に納まることになる（2c）。しかし，例文の（3）から（7）を考えると，とてもそのような一般化が成り立たないことが見て取れる。これらの例の文法性の在り様は，ひとえに個々の動詞の意味と密接に関係していると思われる。結論的に述べると，be Ven の部分が，聞き手に対して話者が命題を伝達する意図があるかないか，によると思われる。(cf. 中澤 2015)

同趣旨のことは，allege という動詞の奇妙なふるまいにも成り立つと思われる。

(8) a. *I alleged John to be a fool.
b. John, I alleged to be a fool.
c. John is alleged to be a fool.

(9) a. *I assure you John to be the best candidate.

b. ?John, I assure you to be the best candidate.（Lasnik（2008: 37））

（10）a. *I assert Joe to be a genius.

b. Joe, I assert to be a genius.

c. Joe is asserted to be a genius.

上例についても，要点は，I allege/assure/assert の部分が，一種のモダリティを表わす機能的構成素（（中澤 2015）では MOD と呼ぶ）とみなされることによって，文法性の説明がつくと思われる。（cf. 中澤 2015）この場合も，個々の事例については，似た構文であっても動詞の語彙的意味によって，文法性が異なってくる例といってよいと思われる。

さらに，中澤（2015）でも積み残しになっていた問題を考える。下例参照。

（11）a. Which Hollywood actress had alleged to have had sex with an entire football team which included John Wayne?（BNC）

b. These pictures inside a local hospital allege to show children who've been injured in airborne chemical attacks.（COCA）

c. The young women who allege to have been involved with Willie Smith say that they didn't come forward before because of the prominence of his family.（COCA）（いずれも中澤（2015: 275-276）より）

これらは，動詞 allege のさらに奇妙な振る舞いで，例えば OED Online にも記述がない。すなわち，allege to が準助動詞の振る舞いをしている。しかし，この奇妙さも，allege to を MOD とみなすことによって，説明は可能と思われる。この準助動詞化の場合も，動詞 allege の持つ固有の意味が深くかかわっている。

参考文献

江頭浩樹他編（2015）『より良き代案を絶えず求めて』開拓社.

Freiden, Robert, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta（eds.）（2008）*Foundational Issues in Linguistic Theory*, MIT Press, Cambridge/MA.

Lasnik, Howard（2008）"On the Development of Case Theory: Triumphs and Challenges," Freiden et al.（eds.）, 17-41.

中澤和夫（2015）「統語的機能構造について」江頭他編 267 － 278.

資料

BNC: The British National Corpus（via Shogakukan Corpus Network）
COCA: Corpus of Contemporary American English
OED Online: The Oxford English Dictionary Online

英語とフランス語における「経験者」主題役割を担う項の統語的振る舞いの違いについて

髙橋将一
青山学院大学　文学部英米文学科

本研究プロジェクトでは、英語とフランス語の「経験者」という主題役割を担う項の統語的振る舞いの違いについて研究することを目的としていた。英語では、（1）でのように、「経験者」主題役割を担う項である「to Mary」を飛び越える形で、名詞句である「John」が、従属節内から主節の主語位置に移動することが可能である。

（1）　$[_{TP}$ John$_1$ seems to Mary $[_{TP}$ t$_1$ to be nice]].

「経験者」主題役割を担う「to Mary」は、移動前は従属節内にある名詞句「John」より主節の主語位置に構造上近いため、（1）の文における名詞句の移動は、局所性条件に違反しているように思える。しかしそれにも関わらず、この移動が文法的に認可されるという問題については、これまでも研究が行われてきた。

髙橋（2019）では、「経験者」主題役割を担う項は、非顕在的に移動するという Landau（2010）の提案を採用し、この非顕在的な移動が適用されることで、（1）において、名詞句の移動が局所性条件の違反を回避することができると提案した（詳細については、髙橋（2019）を参照）。

髙橋（2019）でも触れられているが、英語で観察される現象に対するこの分析は、フランス語のデータの観点から検証する必要がある。（2a）で示されているように、フランス語では、名詞句は、「経験者」主題役割を担う項を飛び越えて、従属節内から主節の主語位置に移動することができない。「経験者」主題役割を担う項が存在しない（2b）では、名詞句の移動が認可されることから、（2a）の非文法性は、「経験者」主題役割を担う項が存在することに起因すると考えることができる。

（2）　a. ??Jean semble à Marie avoir du talent.
　　Jean seems to Marie to have of talent
　　‘Jean seems to Marie to have talent.’
　　b. Jean semble avoir du talent.
　　Jean seems to have of talent
　　‘Jean seems to have talent.’

（McGinnis 1998:90）

このような英語とフランス語の「経験者」主題役割を担う項の統語的振る舞いの違いに対して、原理的な説明を探求することを計画していたが、ここで報告できるような結果を得ることはできなかった。今後も引き続き、言語間の違いについて考えていきたいと思っている。

参考文献

Landau, Idan. 2010. *The locative syntax of experiencers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
McGinnis, Martha Jo. 1998. Locality in A-movement. Doctoral dissertation, MIT.
髙橋　将一 . 2019. 介在する経験者 .『英文学思潮』92:1-28. 青山学院大学英文学会 .

譲渡不可能所有構文再考

井口容子
広島大学大学院総合科学研究科

フランス語の譲渡不可能所有構文のうち、本研究では例文（1）のように所有者が与格の再帰接語代名詞として表されるものに注目し、他のタイプの譲渡不可能所有構文との関係を考察する。本年度は再帰構文の振る舞いに関して、フランス語と微妙な重なり合いと相違を示すロシア語と対照することにより、現象をより深く理解することを目指した。

（1）　Elle se　lave　les mains.
　　she　REFL（dat.）　washes the hands　‘She washes her hands.’

身体がかかわる動作の代名動詞のうち、再帰代名詞の se が対格におかれる「体を洗う」のような概念を表す場合は、ロシア語でも再帰の接辞を伴ういわゆる「ся 動詞」が用いられる。だが、たとえば「手を洗う」のように身体部位が明示された場合、フランス語では（1）の構文を用いるが、ロシア語では（2）のような表現になる。

（2）　мыть　руки

to wash　hands

（2）では再帰を表す接辞は現れておらず、フランス語で言えばむしろ（3）のような、Guéron（2003）が「I 型」と呼ぶ譲渡不可能所有構文に近い。

（3）　Elle lève　la　main.

she　raises　the　hand　'She raises her hand.'

ロシア語は定冠詞を持たないという点においては（3）と異なるが、Guéron（2006）のいう « null determiner » と考えるならば、ロシア語の（2）も「I 型」ということになる。

ロシア語には「ся動詞」のほか、自立した再帰代名詞として機能するсебяがあり、これの与格себеを用いた（4）のような文も存在する。

（4）　Я　переломил　себе　ногу.

I　broke　REFL（dat.）　leg　'I broke my leg.'（研究社『和露辞典』）

これはフランス語の（1）（Guéron の「II 型」）に近い。だが水野・藤村（2004）によるとこの構文は使用がかなり制限されている（p. 84）。いずれにしてもフランス語では与格の再帰代名詞を用いて II 型の構文で表す事象のかなりのものが、ロシア語では I 型で表されていることは注目に値する。

一方、水野・藤村（2004）は、ロシア、フランス両語における「A ハ（自分ノ）B ヲ C ニ～スル」という、身体部位の移動を含意する 3 項文に注目し、この構文がそれぞれの言語において再帰 / 非再帰いずれの形態で実現されるかを決定する要因を示して対照させている。ここで示された制約は、この事象を表すロシア語のｃ я動詞が、中動（middle voice）の意味的な連鎖において中心的な領域に位置することを示唆する。これはロシア語がｃя動詞に加えて、独立した「再帰マーカー」のｃｅбяを有し、Kemmer（1993）のいう two-form language であることも関係するものと思われる。これに対してフランス語の（1）のタイプの構文は、Guéron のⅡ型の再帰ヴァージョンとして、「再帰」にかなり近いところに位置するといえる。

今後は冠詞の問題に特に注目しながら、英語の譲渡不可能所有構文との対照も含めて、分析を行いたいと考えている。

参考文献

Guéron, J. (2003). « Inalienable possession and the interpretation of determiners », Coene, M. and Y. D'hulst (eds.), *From NP to DP*, vol. 2, John Benjamins, Amsterdam, 189-220.

Guéron, J. (2006). « Inalienable Possession », Everaet, M. and H. van Riemsdijk (eds.), *The Blackwell Companion to Syntax*, vol. 1, 589-638.

Kemmer, S. (1993). *The Middle Voice*, John Benjamins, Amsterdam.

水野晶子・藤村逸子 (2004).「身体部位名詞を伴う再帰構文における格の問題 ― ロシア語とフランス語の比較 ―」,『国際開発研究フォーラム』26, 65-87.

抽象的な移動と与格

武本雅嗣
山口大学人文学部

代名詞の与格を保持しているフランス語では、代名詞は Recipient の場合も Experiencer の場合も与格標示される。

(1)　Son père **lui** a donné un terrain.
　　'His/Her father gave him/her a plot of land.'

(2)　Un malheur **lui** est arrivé.
　　'Something unfortunate happened to him/her.'

これらの文は、与格標示の存在の「空間的な場所」ではなくその「抽象的な領域」への対象の移送や事態の出現を表している。この種の与格構文には抽象的な移動が関与している。次のような与格表現も、与格標示の存在の所有領域や身体領域への対象の「主観的な移動」の捉え方に動機づけられて慣用化したものである。

(3)　Je **lui** donne environ quarante ans.
　　'I think he/she is about forty years old.'

(4)　Cette cravate **lui** va très bien.
　　'This tie suits him/her very well.'

また、次のような dative of equivalence の場合も、2 つの対象の対比には対象間の心的な移動または視線の移動が伴っている。この場合与格の指示対象は、対格の指示対象と同等ではないが、それに近い際立つ存在として捉えられている。認知的に重要な存在が言語的に重

要な対格と与格（文法関係で対応するのは直接目的語と間接目的語）で表されているわけである。

（5）　Il **lui** préfère Hélène.

‘He prefers Helen to him/her.’（Melis 1996）

（6）　Il **lui** compare Vincent.

‘He compares Vincent to him/her.’（Ibid.）

例外的に、語源的にもまったく移動がかかわっていないにもかかわらず与格をとりうる名詞派生の動詞があるが、与格と結合する場合にはやはり「方向性」は認められる。

（7）　a. Il **lui** a jumelé le Bas-Rhin.

b. Il a jumelé le Bas-Rhin et le Haut-Rhin.

c. Il a jumelé le Bas-Rhin avec le Haut-Rhin.

‘He coupled the Bas-Rhin and the Haut-Rhin.’（Ibid.）

（8）　a. Il **lui** a adjoint un canton, au département.

b.* Il a adjoint un département et un canton.

c.* Il a adjoint un département avec un un canton.

‘He has adjoined a canton to the department.’（Ibid.）

本研究では、recipient dative や experiencer dative だけでなく dative of equivalence にも抽象的な移動の認識が関与しているということを、事態の捉え方に着目して論じた。

参考文献

Kövecses, Zoltán. 2016. Conceptual metaphor theory. In Elena Semino & Zsófia Demjén（eds.）. *The Routledge Handbook of Metaphor and Language*. 31-45. New York: Routledge.

Melis, Ludo. 1996. The dative in Modern French. In W. Van Belle & W. Van Langendonck（eds.）. *The dative. Volume 1 : Descriptive Studies*. 39-72. Amsterdam: John Benjamins.

一方向的位格 locatif unilatéral と
双方向的位格 locatif bilatéral としての与格 datif

敦賀陽一郎

元東京外国語大学

（以下では , V: 動詞 , [　]: 直接目的 , <　>: 間接目的・与格 .）

フランス語において前置詞 à 付きの間接目的 $\grave{a}$N には一方向位格 $N_0 \rightarrow V$（$\rightarrow N_1$）$\rightarrow \grave{a}N_2$（On répond <à sa lettre> « They answer to his letter », On envoie [ce livre] <à Paris> « They send this book to Paris »）と双方向位格（N_2 の反応あり）である与格 $N_0 \rightleftarrows V$（$\rightleftarrows N_1$）$\rightleftarrows \grave{a}N_2$（On répond <à Luc> « They answer to Luke », On envoie [ce livre] <à Luc> « They send this book to Luke »）がある。多くの場合 , 両位格の交替は可である。これら以外に厳格な一方向位格（On pense à Luc « We think to（of）Luke »）があり , これは両方向にはなりえない。つまり , <y/lui>-V « <there/him>-V » と <y/*lui>-V がある。<*y/lui>-V のような V はないのではなかろうか。一方向位格と双方向位格（与格）で方向位格のクラスを構成し , 前者には後者になりえないものもあるが , 後者は全て前者になりうるようである。動詞例 : lui 傾向のもの（parler « speak », donner « give »), y 傾向のもの（aller « go », mettre « put »）, lui のみ（y を拒否 : なし ?）, y のみ（lui を拒否 : penser « speak », unir « unite »）。通常不可とされる ? On parle au mur « They speak to the wall » も限界的な On me parle comme si on y parlait, au mur « They me-speak, as if they there-spoke, to the wall » では可だが , *On pourrait lui penser, au mur « They could him-think, to the wall » は不可である。限界的例に頼らずとも，1, 2 人称接辞代名詞が直接目的になる次のような例により，<lui/leur> « him/them » の <y> « there » による置換可能性が見て取れる（cf. *[1，2 人称直接目的]-<3 人称与格 >-V は原則不可）。*On [nous] <leur> fait répondre « They us-them-make answer » → On [nous] <y> fait répondre, <à eux> « They us-there-make answer, to them », *On [nous] <leur> présente « They us-them-present » → On [nous] <y> présente, <à eux> « They us-there-present, to them ». これは 2 項 , 3 項の与格動詞での lui の y への原則的置換可能性を示唆している。

基本的に与格 $\grave{a}N_2$ はヒト N_0 とヒト N_2 の間での N_1 のやり取りでの「受け手」を表し，代名詞化では動詞の前の lui が義務的になる。これが不可で $\grave{a}$ lui となる場合は原則として y が可能になる。与格は方向的位格の一部であり，一方向的位格の中で双方向（与格）になりうるものには動詞の構文可能性と $\grave{a}N_2$ の N_2 の「+ ヒト」特性が関係している（例 . <lui/y> envoyer cela）。双方向になりえない場合は動詞の構文可能性による（例 . <*lui/y> penser）。

参考文献

BARNES, Betsy（1979）. *The Notion of Dative in Linguistic Theory and the Grammar of French*, Ph. D. dissertation, Indiana University.

BLANCHE-BENVENISTE, Claire（1975）. *Recherche en vue d'une théorie de la grammaire française,*

Essai d'application à la syntaxe des pronoms, Paris, Librairie Honoré Champion.

LECLÈRE, Christian（1978）. « Sur une classe de verbes datifs », *Langue française* 39, GROSS, M. et C. LECLÈRE（pr.）, 66-75.

POSTAL, Paul（1990）. « French Indirect Object Demotion », POSTAL, P. M. & B. D. JOSEPH（ed.）*Studies in Relational Grammar* 3, Chicago, The University of Chicago Press, 104-200.

所有者が与格で表される不可分離所有構文
―英語とフランス語の相違点と共通点―

金子　真

青山学院大学　文学部フランス文学科

本研究では、不可分離所有を表す構文のうち、所有者が与格 / 間接目的語で表され、被所有物が定冠詞を伴う名詞句で表される構文（所謂「外的所有者構文」）を扱った。（1）に見られるように、被所有物名詞句が直接目的語にあたる場合、仏語では外的所有者構文が容認されることがあるのに対し、標準的な英語ではこうした構文は通常容認されない。

（1）　a. Je　*lui*　prends　le bras.（Guéron 2017: 1968）
　　I　*to-him(her)*　takes　the hand

　　b. *I took *him* the hand. / I took *his* hand.（*idem.*1969）

一方、（2）/（3）が示すように、被所有物名詞句が前置詞句内に位置する場合、仏語と同様に英語でも、外的所有者構文が容認されることがある。こうした例は英語には「外的所有者与格」は存在しないという、いくつかの先行研究の主張の反例となる。

（2）　a. les sacrifices d'enfants *lui* revinrent à l'esprit（*Hérodias*）
　　'*He* called to mind stories of child sacrifice'（*Herodias*）

　　b. This idea came *to me* in the head a few years ago at a party.（google）

（3）　a. Léa　*m'*　a chuchoté　quelque chose　dans l'oreille.（Lamiroy 2002: 265）
　　Léa　*to-me*　whispered　something　in the ear

　　b. he whispered to me in the ear（Google）

先行研究の中では、Guéron（2017）らは 、(i)（1a）と（1b）の容認度の違いは、英語と仏語の定冠詞の性質の違いに起因する、(ii)（1）のように被所有物名詞句が直接目的語にあたる場合と、（2）/（3）のように前置詞句内に位置する場合では、定冠詞の性質が異なる、と主張している。

一方本発表では、(1) の定冠詞と（2）/（3）の定冠詞は同様の分布を示すことを指摘し、さらに（1a）と（1b）の容認度の違いは、標準英語と仏語の動詞が、どの程度与格 / 間接目的語を許容するかの違いから生じると提案する。さらにこうした許容範囲の違いを、「主格を与格より優先する」という傾向がどれだけ文法化しているかの違いに帰する Lamiroy（2002）の分析を紹介する。そして、(i)（2a）に見られるように、フランス語では与格で表される所有者名詞句が、英語では主格で表されることが多いこと、また（ii）（2b）/（3b）のような例を許容しない英語話者もいることは、Lamiroy の分析の妥当性を裏付けると提案する。

今後は、(4) に見られるような所謂 personal datives も考慮に入れ、与格についての英仏対照を進めたい。

(4)　I have *me* a new car.

参考文献

Guéron, J. 2017. Inalienable Possession, Primarily in French. In Everaert, M. & H. Van Riemsdijk（eds.）*The Wiley Blackwell Companion to Syntax*. Blackwell, 1966-1995.

Lamiroy, B. 2002. Grammaticalization and external possessor structures in Romance and Germanic languages. In M. Coene & Y. D'hulst（eds.）. *From NP to DP*, vol.2, John Benjamins, 257-280.

動詞 mettre の構文における間接目的について

尾形こづえ
青山学院大学　文学部フランス文学科

フランス語で間接目的 à N を取る動詞は、à N が代名詞化されると動詞に前置される lui 等の与格人称代名詞、または中性代名詞 y に換えられるか、動詞に後置される à lui 等の à + 強勢代名詞に換えられる。à N 型の間接目的を取る現代フランス語動詞は、どの代名詞と共起するかによって次の 4 つのタイプに分けられる（*cf.* Blanche-Benveniste, 1978）。

（Ⅰ）lui, y, *à lui : donner（to give）, appartenir（to belong）, mettre（to put）

（Ⅱ）lui, *y, * à lui : parler（to speak）

（Ⅲ）*lui, y, à lui : penser（to think）

（Ⅳ）*lui, y, *à lui : remédier（to remedy）

このうち、（I）のグループの動詞については、与格人称代名詞（以下では lui）と中性代名詞 y による代名詞化が可能であるが、どのように lui, y が選択されているのか。文法の教科書などに一般的に見られる「人間」なら lui、「非人間」なら y といった説明は、実際の使用例を見てみると、不十分であることが明らかになる。この lui と y が可能なグループ（I）に分類される動詞間の異なりに注目して、実例の観察に基づき、動詞の語彙的特徴と lui, y の現れ方との関係を探っていく。

このグループの中で与格をとる動詞の典型としてしばしば例に挙げられる donner は（I）グループの動詞の中でも lui への偏向が著しい動詞であり、「人間」以外のものも lui で受ける傾向が認められる。この lui を好む傾向が donner のどのような特性と関わっているのか、尾形（2005）では実例の観察に基づいて考察した。

本研究では（I）に分類される動詞の中でもう一方の極をなし、lui も可能ながら y への偏向が強い動詞 mettre（to put）:

（a）　Elle a mis du fard à l'actrice.（She put make-up on an actress）

→ Elle *lui* a mis du fard（She-her-put make-up）

（b）　Elle a mis *un bouton* à une veste.（She put a button to a jacket）

→ Elle *y* a mis un bouton.（She-there-put a button）

に注目し、一つの動詞の構文可能性の中で lui と y がそれぞれどのように特徴づけられるのか、実例の観察に基づいて検討してみたい。

参考文献

Barnes, Betsy.1979. *Notion of 'Dative' in Linguistic Theory and the Grammar of French.* PhD thesis. Indiana University.

Blanche-Benveniste, Claire. 1978. « A propos des traits sémantiques utilisés en syntaxe : critique du trait +/-humain ». *Cahiers de Linguistique*. 9, 1-15.

Gross, Maurice. 1981. « Les base empiriques de la notion de prédicat sémantique» *Langages*. 63, 7-52.

尾形こづえ . 2005.「間接目的 lui と y の対立 : 動詞 donner の場合」

『フランス語を探る－フランス語学の諸問題 III』. 三修社, 60-75.

西村牧夫 . 1994.「間接補語 *y* vs *à lui* vs *lui*」.『フランス語を考える－フランス語学の諸問題 II 』. 三修社, 112-122.

「現代詩人ケネス・レクスロスの日米に亙る文学活動についての基礎的研究」の研究状況についての報告

A Report on the Progress of Research on Kenneth Rexroth's Literary Works in Japan and the United States

研究代表者　小松靖彦
Yasuhiko KOMATSU

1. 本研究の目的と研究内容

本研究は、日本文学を翻訳し、第二次世界大戦下には日系アメリカ人の支援を行うなど、日本文化の深い理解者であったアメリカの現代詩人ケネス・レクスロス Kenneth Rexroth（1905-1982）の、日本および中国に関わる業績を、本学の以下の日本文学・中国文学の研究者とアメリカ文学研究者の協力によって紹介することを目的とする。

小松靖彦（日本文学科教授、日本文学）
山崎藍（日本文学科准教授、中国文学）
メアリー・ナイトン（英米文学科教授、アメリカ文学・日本文学）
西本あづさ（英米文学科教授、アメリカ文学）
来馬哲平（英米文学科准教授、アメリカ文学）
杉山和也（日本文学・日本語専攻博士後期課程修了、日本文学）
安藤優一（日本文学・日本語専攻博士後期課程、日本文学）
内村文紀（日本文学・日本語専攻博士後期課程、日本文学）

具体的には、以下の二つの角度から研究を進めることを計画した。

(1)　ケネス・レクスロスのエッセイの日本語訳の作成

数多くあるレクスロスのエッセイのうち、①日本関係、②中国関係、③翻訳関係、④戦争関係（レクスロスの日本理解に深く関わるため）のものについて、日本語訳を作成する。中国関係を含めたのは、レクスロスが日本だけでなく、Orient という広い視野を持っており、

日本詩歌だけでなく、中国古典詩歌の翻訳も行っていたからである。
(2)　神田外語大学図書館所蔵ケネス・レクスロス・コレクションの書込みの調査
神田外語大学図書館は約１万 6,000 点のレクスロス蔵書を所蔵する。同図書館では、レクスロスの書込み情報も含む目録を作成しているが、書込みについての詳細な情報は全冊には及んでいない。日本文学に関わる蔵書のレクスロスの書込みの原本調査を行う。

当初、研究期間にこの二つの研究を完成させる予定であったが、新型コロナウイルス感染症感染拡大により、(1) については翻訳を十分に練り上げる時間を確保できず、(2) については、2020 年２月に予定していた原本調査（神田外語大学図書館に申請済み）が不可能なり、現在も研究を継続中である。以下、現段階で明らかになっていることを簡略に報告する。

2. ケネス・レクスロスのエッセイについて

レクスロスの、①日本関係、②中国関係、③翻訳関係、④戦争関係のエッセイの主要な資料としては、以下がある。

i　*World outside the Window: The Selected Essays of Kenneth Rexroth*. A New Directions Book. Ed. Bradford Marrow. New York: New Directions, 1987.
ii　*One Hundred Poems from the Japanese*. A New Directions Book. Trans. Kenneth Rexroth. New York: New Directions, 1955 の Introduction
iii　Rexroth, Kenneth. *Classics Revisited*. A New Directions Book. Reprint. New York: New Directions, 1986. Originally published (Second edition, first paperback issue): New York: Avon, 1969.
iv　Rexroth, Kenneth. *More Classics Revisited*. A New Directions Book. Ed. Bradford Marrow. New York: New Directions, 1989.
v　Rexroth, Kenneth. *Bird in the Bush: Obvious Essays*. A New Directions Book. New York: New Directions, 1959.
vi　Rexroth, Kenneth. *Assays*. A New Directions Paperbook. New York: New Directions, 1961.
vii　Rexroth, Kenneth. *With Eye and Ear: Essays*. An Azimuth Book. New York: Herder and Herder, 1970.
viii　Rexroth, Kenneth. *The Elastic Retort: Essays in Literature and Ideas*. A Continuum

Book. New York: The Seabury Press, 1973.

ix　ウェブサイト Bureau of Public Secrets（http://www.bopsecrets.org/rexroth/）

これらに収められた上記①・②・③・④のエッセイを、内容ごとに整理すると以下である。

［①**日本関係**］

1. Six Japanese Novelists（Hiroshi Noma, Osamu Dazai, Yasunari Kawabata, Yukio Mishima, Shohei Ooka, Junichiro Tanizaki）. *The Nation*（29 September 1956 and 23 November 1957）.［viii］［ix］
2. Japanese Literature. *The Nation*（15 December 1956）.［vii］［ix］
3. The Poetry of the Far East in a General Education. Originally presented at a conference on "Oriental Classics in General Education"（New York, 1958）. Printed in *Approach to the Oriental Classics* (Ed. William Theodore de Bary. New York: Columbia University Press, 1959).［ix］
4. Kabuki Theater. *San Francisco Examiner* column（10 July 1960）.［ix］
5. Japanese Arts of Grace and Modesty. *San Francisco Examiner* column（18 September 1960）.［ix］
6. East versus West in Art. *San Francisco Examiner* column（9 September 1962）.［ix］
7. The World of *Genji*. *Chicago Tribune*（*Book Weekly*, 29 November 1964）.［viii］［ix］
8. Contemporary Japanese Art. *San Francisco Examiner* column（9 May 1965）.［ix］
9. Hong Kong and Japan. *San Francisco Magazine* column（October 1967）.［ix］
10. Tourist Tips for Japan. *San Francisco Magazine* column（December 1967）.［ix］
11. Haiku and Japanese Religion. *The Nation*（6 May 1968）.［ix］
12. *Classic Japanese Poetry*（1969）.［iii］［ix］
13. Lady Murasaki, *The Tale of Genji*（1969）.［iii］［ix］
14. Japanese Nô Plays. *New York Times*（1971）.［viii］［ix］
15. The Influence of Classical Japanese Poetry on Modern American Poetry. Speech delivered at a P. E. N. conference（November 1972）.［ i ］［viii］［ix］
16. A Visit to Japan. *San Francisco Magazine* column（February 1973）.［ix］
17. Changes in Japan. *San Francisco Magazine* column（December 1974）.［ix］
18. Lafcadio Hearn and Japanese Buddhism. Originally published as the Introduction to *The Buddhist Writings of Lafcadio Hearn*（Santa Barbara: Ross-Erikson, 1977）.［ i ］［ix］
19. Sei Shōnagon, *The Pillow Book*（Collected in 1989）.［iv］

20. *Heike Monogatari* (Collected in 1989). [iv]

[②中国関係]

1. Matteo Ricci's China Journals. *The New Republic* (21 December 1953). [ix]
2. Science and Civilization in China. *The Nation* (10 November 1956). [vi] [ix]
3. The Tao of Painting. *The Nation* (11 May 1957). [vii] [ix]
4. The Poetry of the Far East in a General Education. Originally presented at a conference on "Oriental Classics in General Education" (New York, 1958). Printed in *Approach to the Oriental Classics* (Ed. William Theodore de Bary. New York: Columbia University Press, 1959). [ix]
5. The Chinese Classic Novel in Translation: The Art of Magnanimity (1958). [v] [ix]
6. Sung Culture. Originally published in *Portfolio & ART News Annual* #3 under the title "Speculations on the Times of Sung" (1960). [i] [vi] [ix]
7. The Tao of Fishing. *San Francisco Examiner* column (7 August 1960). [ix]
8. The Tao of Politics. *San Francisco Examiner* column (15 August 1962). [ix]
9. East versus West in Art. *San Francisco Examiner* column (9 September 1962). [ix]
10. Moscow and the Chinese Communists. *San Francisco Examiner* column (27 January 1963). [ix]
11. The Chinese Theater. *San Francisco Examiner* column (4 August 1963). [ix]
12. More on the Chinese Theater. *San Francisco Examiner* column (14 August 1963). [ix]
13. Recognition of Red China. San Francisco Examiner column (29 January 1964). [ix]
14. Hong Kong and Japan. *San Francisco Magazine* column (October 1967). [ix]
15. Tu Fu, *Poems* (1969). [iii] [ix]
16. Tsao Hsueh Chin, *The Dream of the Red Chamber* (1969). [iii] [ix]
17. Nixon's China Ploy. *San Francisco Magazine* column (September 1971). [ix]
18. Nixon's China Trip. *San Francisco Bay Guardian* (28 March 1972). [ix]
19. Old Chinatown. *San Francisco Magazine* column (September 1973). [ix]
20. Lao Tzu, *Tao Te Ching* (Collected in 1989). [iv] [ix]
21. Ssu-ma Ch'ien, *Records of the Grand Historian of China* (Collected in 1989). [iv]

[③翻訳関係（日本文学・中国文学と関わる）]

1. Introduction (1955). [ii]
2. The Poet as Translator. Presented as a lecture at the University of Texas.

Published in *The Craft and Context of Translation* (Ed. William Arrowsmith and Roger Shattuck. Austin: University of Texas, 1961). [i] [vi] [ix]

[④戦争関係（レクスロスの戦争・平和思想)]

1. New Forms of Politics? *San Francisco Examiner* column (14 February 1960). [ix]
2. The Peace Corps. *San Francisco Examiner* column (5 March 1961). [ix]
3. The More Peace Corps. *San Francisco Examiner* column (12 March 1961). [ix]
4. Atoms and Irresponsibility. *San Francisco Examiner* column (10 May 1961). [ix]
5. Morality Crisis. *San Francisco Examiner* column (5 July 1961). [ix]
6. Remembering the Spanish Civil War. *San Francisco Examiner* column (2 August 1961). [ix]
7. The Russian H-Bomb Test. *San Francisco Examiner* column (29 October 1961).[ix]
8. General Strike for Peace? *San Francisco Examiner* column (20 December 1961).[ix]
9. The Atomic Arms Race. *San Francisco Examiner* column (25 April 1962). [ix]
10. Patriotism. *San Francisco Examiner* column (4 July 1962). [ix]
11. Research for Peace? *San Francisco Examiner* column (15 July 1962). [ix]
12. Nuclear Power and Free Speech Radio. *San Francisco Examiner* column (9 January 1963). [ix]
13. The Cold War in the South. *San Francisco Examiner* column (14 March 1965).[ix]
14. The Strategy of Peace. *San Francisco Examiner* column (30 May 1965). [ix]
15. Petitioning for Peace. *San Francisco Examiner* column (31 July 1966). [ix]
16. Nature and Nationalism. *San Francisco Examiner* column (20 September 1966). [ix]
17. Invisible Power. *San Francisco Magazine* column (November 1970). [ix]
18. The Invasion of Laos. *San Francisco Magazine* column (April 1971). [ix]
19. The War in Indochina. *San Francisco Bay Guardian* (7 June 1971). [ix]

本研究は、①・②・③・④からレクスロスの日本理解・中国理解に関わって重要と思われるものを選び、日本語訳の作成作業を進めている。日本文学・中国文学・アメリカ文学の研究者の協力によって、必要箇所に注記を加えた形に仕上げる予定である。

3. 神田外語大学図書館所蔵ケネス・レクスロス・コレクションの書込みについて

2018 年 2 月に研究代表者・小松は、神田外語大学図書館所蔵ケネス・レクスロス・コレクションのレクスロスの書込みについての予備調査を、同図書館作成の目録を手がかりに行った。その結果、以下の日本関係の書物に重要なレクスロスの書込みが数多く見られ、集中的な調査が必要であることがわかった（著者名等書誌情報の表記は目録による）。

❶ Aston, W. G. *A History of Japanese Literature*. Short Histories of the Literatures of the World. New York: D. Appleton, 1899.

❷ Sansom, G. B. *Japan: A Short Cultural History*. Rev. ed. New York: D. Appleton-Century, 1943.

❸ Sansom, George. A History of Japan [2]. Stanford Studies in the Civilizations of Eastern Asia. Stanford: Stanford University Press, 1961.

❹ *Tale of Ise: Lyrical Episode from Tenth-Century Japan*. Trans. Helen Craig McCullough. Stanford: Stanford University Press, 1968.

この中でも、❶・❹はレクスロスの日本文学理解を知るうえで特に重要な資料と目され、詳細な原本調査と翻刻を行う必要がある。新型コロナウイルス感染症拡大が収束した時点で、調査を改めて行いたい。

貴重な研究機会を賜った本学文学部附置人文科学研究所に心より感謝の意を表するとともに、研究期間内に十分な研究が行えなかったことを深謝いたします。研究期間の終了した現在も研究を継続しており、その成果の詳細については、次年度以降に改めて報告いたしたく思います。

「雑誌を用いた日本現代史研究」について

Research on Japanese Contemporary History Using Magazines

小宮　京
Hitoshi Komiya

プロジェクトの目的

本研究プロジェクトの目的は、雑誌を通して、日本現代史の様々な側面を明らかにすることであった。

研究代表者の小宮京は、日本現代史に関する論文を読む中で、意外なほど、雑誌に関する歴史研究が存在しないことに気付いた。例えば、いわゆる論壇誌に関する研究（竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌：教養メディアの盛衰』創元社、2014 年）を含め、社会学者による研究が多く、歴史研究はほとんど存在しない。

小宮は 2018 年度末に「「読者モデル」の歴史的源流　1970 年代の女性ファッション誌を中心に」『青山スタンダード論集』14 号（2019 年 1 月）を刊行した。同論文は、あくまでも試論にとどまるが、あるテーマを設定して様々な雑誌を調査すると、日本現代史の様々な側面を明らかにできるとの確信を得た。その延長線上に、本プロジェクトは位置付けられる。

共同研究者の佐藤信（特別研究員）は、前著『60 年代のリアル』（ミネルヴァ書房、2011 年）では『朝日ジャーナル』の、近著『日本婚活思想史序説』（東洋経済新報社、2019 年）ではこれまで知られていない結婚雑誌の雑誌研究を行った。雑誌研究を通じて戦後社会の新たな側面を明らかにしようとする問題関心は研究代表者とも共通しており、共同でプロジェクトを展開することで、戦後社会の多面性を明らかにすることを企図した。

以上、本研究プロジェクトは、雑誌というメディアを通じた歴史研究の端緒となることを目指した。

プロジェクトの実施状況

小宮と佐藤は各自、国会図書館や大宅文庫などでの資料収集を積極的に行い、論文執筆に活用した。

それから複数の雑誌関係者にインタビューを行った。とりわけ、小宮が実施した『nicola』創刊に関与した山元琢治氏インタビューは論文執筆に有用であった。

成果物について

佐藤と適宜打ち合わせを行いつつ、その成果を『史友』52 号（2020 年 3 月刊）に掲載することを目指した。最終的に、『史友』52 号における「特集　雑誌研究」として結実した。「特集　雑誌研究」は以下の三部構成となった。

第一に、論文である。小宮京「『nicola』小史　チャイドルからニコ㋣へ」は、ローティーン向け雑誌『nicola』（ニコラ）の創刊の経緯を探った。佐藤信「世紀末の結婚雑誌『結婚潮流』から『ゼクシィ』まで」は、1980 年代以降の 20 世紀末の結婚雑誌を通時的に分析した。

第二に、雑誌編集者のインタビューである。この間、実施したインタビューのうち、二つを活字化した。一人目は、かつて『大航海』(新書館刊）の編集者であった松田健氏である。松田氏には当時の舞台裏と現在の出版業界について語って頂いた。二人目は、朝日新聞社のウィズニュース（withnews）編集長である奥山晶二郎氏である。奥山氏には五年間の足跡を振り返って頂いた。お二方のインタビューに共通するのは、雑誌というメディアが技術の進歩やインターネットの登場により、どのような影響を被ったのかといった視点である。これら同時代の証言は、後年、状況を理解するために活用されるだろう。

第三に、書評である。森岡恭子が、長谷川晶一『ギャルと「僕ら」の 20 年史：女子高生雑誌 Cawaii ！（カワイイ！）の誕生と終焉』(亜紀書房､2015 年）を取り上げた。同書はギャル雑誌「Cawaii ！」の編集者による回顧録であり、非常に興味深い内容を含む。

このように『史友』52 号の特集では 1980 年代や 1990 年代、さらに 2010 年代といった、一次史料に基づく雑誌研究が十分に進展していない時期の雑誌を対象として、歴史学による雑誌研究に取り組んだ。

さらに、活字化したインタビューの一部を、「花田（栗尾）美恵子『Olive』の頃を語る」として、『史友』53 号（2021 年 3 月刊）に掲載する。これも雑誌に関する貴重な証言となるだろう。

ここからは個別論文の内容を紹介したい。

小宮京「『nicola』小史」の内容紹介

小宮は「「読者モデル」の歴史的源流」で、国会図書館や大宅壮一文庫、新聞等の検索方法に始まり、現物の調査の仕方を細かに記した。これに対して、「『nicola』小史」では「「読者モデル」の歴史的源流」で用いなかった関係者へのインタビュー、『nicola』の創設時から関わった山元琢治氏へのインタビューをふんだんに用いた（以下、敬称略）。さらに、日本現代史の課題であるネット情報をどう活用するかに僅かながら取り組んだ。具体的には、『nicola』創刊時の編集長である宮本和英の twitter や消滅した HP におけるインタビューの引用である。

女子小中学生向けの雑誌である『nicola』を論じる意義は、以下の三つにまとめられよう。

第一に、女性ファッション雑誌における『nicola』や『ニコ☆プチ』の占める重要性である。雑誌読者が急減する中、安定的な読者を確保した『nicola』『ニコ☆プチ』は女性ファッション雑誌の売り上げを見た場合、重要な地位を占めている。それにもかかわらず、大人向けの雑誌のみを論じていては、雑誌研究として大きな欠落であろう。

第二に、小中学生向けの雑誌についての研究がほぼ存在しない。そもそも雑誌研究自体が低調であることと、あまりに多くの雑誌が存在し調査できないことがその状況に拍車をかけている。もちろん個別の論壇雑誌の研究は存在するが、女子小中学生向けの雑誌についてはほとんど論じられていない。

第三に、女性ファッション誌における「読者モデル」の歴史を研究する中で、読者モデルと雑誌の専属モデルとの違いについて論じる必要性を痛感した。現在も大きな注目を集めているニコ㋣の源流を論じることには一定の意味があろう。これは「「読者モデル」の歴史的源流」以来の問題意識に基づく。

以上を踏まえ、『nicola』の歴史について論じた。とはいえ、『nicola』は 1997 年創刊だから 20 年以上の歴史を持つ。その全体像を論じるには紙幅も時間も足りない。そこで創刊の経緯に焦点を絞り、基本的な事実関係を明らかにすることに絞った。同時に、ニコ㋣と読者モデルについても可能な範囲で論じた。これにより以後の『nicola』研究の基礎を築くことを目指した。

その結果をまとめる。1997 年に『nicola』が創刊されるまでの経緯について、二代目の編集長となった山元によれば、もともと『SPA ！』で篠山紀信を担当していた山元が、篠山や中森明夫が注目したチャイドル（チャイルド・アイドルの略）を取り上げたファッション雑誌を作ろうとしたことに始まる。アミューズの関連会社である藝神出版社から『野村佑香のかわいくなりたい！』が刊行されたものの、その後の雑誌化は頓挫した。同書は『nicola』の原型と位置付けられる。山元が各社に当たり、新潮社が持ち込んだ企画を採用

した。こうして『nicola』が誕生した。また、初代編集長に就任した宮本和英も篠山紀信を担当していた。その経緯から創刊号の表紙は篠山が撮影したし、初期の『nicola』には篠山の連載が存在した。だがすぐに路線転換し、篠山路線と決別した。そして、女子「中学生」のための雑誌となったのである。この路線転換は、隔月刊化される４号で行われたと推定される。また、『nicola』創刊時から、ビジネス志向の宮本とファッション雑誌志向の山元という二つの路線が併存していた。

同時期に女子小中学生向けの雑誌は複数刊行されていた。そうした中で『nicola』は大きく躍進した。飛躍をもたらしたのは読者アンケート重視という基本方針だと考えられる。読者受けの良かった企画、あるいは読者受けの良いモデルを登場させることで、読者目線の雑誌作りを徹底した。読者モデルに注目すると、編集部は最初期から積極的に起用し、地方在住者でも不利ではないというメッセージを繰り返し発した。読者参加型の誌面は、特に隔月刊化した４号以降に出現した「クラブ活動」に顕著だったと評価できよう。

それから、創刊の経緯からチャイドルたちが初期の誌面に登場した。だが、ローティーンのジャストを狙うという山元の方針から、彼女たちはいずれ「卒業」することが予定されており、必然的に世代交代を余儀なくされた。当時、事務所に所属するローティーンのモデルが少なかったため、誌面に起用するモデルをオーディションで選出するという方策を採用した。こうして読者出身の専属モデルが誕生した。さらに、ニコ㋣の中でも特筆すべき成功例としての新垣結衣についても論じた。なぜ新垣が「ガッキー」と呼ばれるのかを資料と証言を用いて論じた。新垣自身については、愛称「ガッキー」の名付け親でもある山元の証言や、宮本による「東京から一番遠い場所」からニコ㋣に選ばれた「象徴的な存在」という評を紹介した。宮本の評は『nicola』が初期から、東京ではない地方在住者を読者モデルに起用することを重視したことの延長線上にある。

以上が「『nicola』小史」で明らかにしたことである。

創刊から20年以上を経た今、『nicola』の歴史について十分に明らかになっているとは言い難い。派生した『ニコ☆プチ』についても論じる必要があろう。そのためには競合他誌や『nicola』の戦略にも触れなければならない。論文でわずかしか論じられなかった『nicola』におけるニコ㋣と読者モデルの展開についても検討する必要があるし、『ニコ☆プチ』における読者モデルの現状も残された課題である。

小宮京「『nicola』小史」追記

刊行後に、４号（1998年４月号）を確認した。その結果、きわめて興味深い事実が判明したので、この機会に追記したい。以下、カッコ内に頁数のみを記した場合は『史友』52

号掲載の「『nicola』小史」の頁を指す。

まず、3号まで掲載されていた篠山による「新少女シリーズ」について、論文では「「新少女」シリーズは5号には掲載されていない」としたが（124頁）、4号の時点で掲載されていなかった。3号に終了が告知されなかったことに鑑みても、路線転換が急激に行われたことが分かる。つまり隔月刊化に伴う誌面改革に伴い、篠山の連載が打ち切られたと考えられよう。

次に、隔月刊化したことによる新企画の開始である。表紙の雑誌タイトルの右下という目立つ場所に「クラブ活動スタート！」とタイトルと同じ色で書かれている。具体的には「読者のみんなとつくるページ、「クラブ活動」をスタートしました。この号が初めてだったので、97年秋号までにクラブ会員に登録してくれたコに、誌面に参加してもらったり、アンケートに協力してもらったよ」とある。それから「新入部員には、ミュンミュンの「ニコラクラブカード」を送ります」とある（4号、158頁）。

関連して、巻末の「ニコラ愛読者アンケート」には「電話取材に答えていい」と記載されていた。これは3号までを踏襲したものである。一方、3号まではアンケートに答えると、ニコラクラブに登録され、カードが配布される予定であった（125頁。134頁の注55も参照）。これに対して、4号のアンケートでは、カードの配布に関する記載は存在しない。前述の「クラブ活動」が始まったため、分離したと考えられる。

それから、「読者モデル」の募集も掲載された。現在の「ニコラモデルオーディション」の原型である。「「読者モデル」についてのお知らせ」と書かれ、「夏休み第1回読者モデル・オーディション」の開催を決定したことを伝えている。「くわしいことは次号を見てネ」とあり、詳細が決まっていなかったことが分かる（4号、143頁）。次号である5号には二次にわたる審査の詳細が書かれている（127頁）。

最後に、前述した「ニコラ愛読者アンケート」とは別に、4号にはもう一つ「読者アンケート」が存在する。これはその他の号では確認できず、4号のみの特殊事例と考えられる。きわめて興味深いため、やや長くなるが引用したい。4号の144頁に「＜読者アンケートのお願い＞」というコーナーがある。パっと見、異様な雰囲気が漂う。直前までモデルたちの裏話のコーナーがカラーで掲載されていた。その裏面に当たるため、144頁もカラーで掲載することは可能なはずである。しかし白黒である。たしかに右上にニコラのマスコットであるミュンミュンを配置してはいるが、文字だけが浮かんでいる。巻末の「ニコラ愛読者アンケート」と比較しても、フォントがそっけなく、4号の中で浮いている印象が残る。その中身も「ニコラ愛読者アンケート」とは全く違った内容である。端的に言えば、この「読者アンケート」はニコラについて何も質問していない。その質問をいくつか引用すると「問1　あなたが近々購入したいものや欲しいと思われるものを次の中からすべてお知らせください」。選択肢には「洋服」「靴」「バッグ」化粧品」「ビデオカメラ」「パソコン・ワープロ」

「オーディオ」などが並ぶ。「問７　あなたの１ヶ月のおこづかい（毎月自由に使えるお金）はだいたいどれぐらいですか」「問８　では、そのおこづかいの使い道を次の中からすべてお知らせください」といった具合である。これは「読者」に関するアンケートであり、読者の収入や嗜好を把握したいという直接的な動機が垣間見える。あまりに直接的過ぎたのか、5号以降には存在しない。つまり「愛読者アンケート」と「読者アンケート」が綴じこまれているのは4号だけである。

この「読者アンケート」は目次にも記載されていない。そうした点から推測するならば、誌面の最終段階で突如として入れ込んだ結果、フォントや配色などに手間をかけられず、唐突感の残るページとなったように思われる。質問内容を踏まえると、ニコラ本誌ではなく、ニコラ事業の方との関連が強く推測されるが、現時点では推測にとどまる。

以上、4号を確認した結果である。

まとめると、4号は創刊前から関係の深かった篠山紀信の路線と決別したと位置付けられ、『nicola』史上における重大な分水嶺に当たることを再確認した。篠山の「新少女」シリーズは隔月刊化に伴い、突然消滅したことが判明した。それからクラブ活動の開始によって、ニコラクラブカードの運用も変化した。さらに読者モデルオーディションの告知も行われていた。特記すべきは「愛読者アンケート」と「読者アンケート」という二種類のアンケートが綴じこまれていた事実である。隔月刊化に伴う路線転換と同時に、その後の展開を予想させる様々な種が散見される、実に興味深い号と評価できよう。

なお、4号とは直接的に関係はないが、論文に誤りが存在した。「5号以降に存在する「モデルになりたいぞ、選手権」というコーナー」としたが（126頁）、4号に「前号から始まったこのコーナー」とあるように（4号、147頁）、正しくは3号から始まった新企画であった。同コーナーは「読者モデル」と密接に関係するため論文でも取り上げた。以上、論文での記述が誤っていたため、この場を借りて訂正する。

佐藤信「世紀末の結婚雑誌」の内容紹介

佐藤論文の内容を紹介する。

佐藤によれば、「婚活」という語が世に広く知られるようになったのは2008～09年のことである。婚活（結婚活動）とは、皆婚社会が失われ、未婚化・晩婚化の進むなかで、結婚するためには「活動」が必要であることを強調するために提唱された言葉である。佐藤はその著書『日本婚活思想史序説』東洋経済新報社（2019年）のなかで、これを「婚活1・0」と位置づけたうえで、1983年に創刊された雑誌『結婚潮流』を中心として、いわば「婚活0・0」とでも呼ぶべき結婚・結婚観が前駆として存在していたことを指摘した。

佐藤論文は雑誌研究の観点から『結婚潮流』を再分析するとともに、続いて登場した「結婚雑誌」群を紐解くことで、20 世紀末の結婚雑誌と社会との関わりを読み解こうとする。課題は、第一にバブルとその崩壊という世紀末的時代変化のなかで独身男女における結婚像がいかに変化したのか明らかにすること、第二に社会状況や社会規範の変化のなかで雑誌がいかに戦略的に対応し、その経営戦略が誌面にどのような影響を与えたのか明らかにすること、第三にこうした結婚雑誌の変遷がいかに「結婚 1・0」を準備したのかを明らかにすることである。この分析過程で、雑誌への多様な分析方法の限界と可能性を示した。

そもそも結婚雑誌を対象とした研究は少ないわけではない。そんななか佐藤論文は、とりわけ雑誌の編集部や経営といった点にも目配りしながら 80 年代から 90 年代にかけての結婚雑誌を検証した。論文冒頭に掲げた課題は、第一にバブルとその崩壊の独身男女の結婚像への影響、第二に結婚雑誌の社会状況への戦略的対応と誌面への影響、第三にこうした結婚雑誌の変遷と「婚活 1・0」との連続性であった。佐藤論文が明らかにしたのは以下のようなことである。

個人が配偶者や結婚のかたちを選択できるようになる「婚活 0・0」の状況下で、はじめあらゆる要素が混沌と詰め込まれた「結婚雑誌」が生じた。『結婚潮流』は結婚生活までをも射程に入れながら配偶者選択についての指針を示すことを試みたという点で、極めて特徴的な雑誌であった。この雑誌においては、想定読者層と編集部員の社会的属性が重複しているという特殊事情も相俟って読者からのフィードバックは強くなく、むしろ編集部による執筆者の開拓や、また執筆者の執筆意欲と雑誌の編集方針との幸福な相互関係によって論調が作り出されていったことを論じた。

しかし次第に結婚雑誌は結婚情報雑誌へと変化した。『ウエルド』の初代編集長・阿部多希子が同誌を「現代社会の時代が生んだ「結婚情報誌」」と呼んだのは正しい。求められたのは「結婚とはなにか」ということより、結婚についてのより具体的な情報であった。そこで登場したのがパートナー選びの情報を提供する配偶者選択情報雑誌であった。こうした変化は、独身男女が生活スタイルの多様化とバブルに向かう好況の下で「よりよい相手」を求める配偶者選択が―とりわけ都市部で部分的に―生じつつあったことを反映していた。そしてまた結婚雑誌も販売収益、広告収入に加えて、こうした配偶者選択についての情報提供に活路を見出したのであった（逆にこれを無料で提供した『ウエルド』は速やかな退場を余儀なくされた）。配偶者選択という独身脱出のライフステージへの注目は、しぜん結婚生活のライフステージへの注目を減じたから、初期の『結婚潮流』が持っていた結婚生活へのヴィジョンは次第に失われることになった。

これら 80 年代の雑誌自体は失われたが、90 年代に登場した結婚雑誌の一部（『Mr. Partner』や『XY』）は当初は配偶者選択情報雑誌の要素を引き継いでいた。ところが、これらは結婚情報サービスと競合関係に立つなど、雑誌の経営面から行き詰まり当該各雑誌は

方向転換を余儀なくされ、結婚式に注力した結婚式情報雑誌が生き延びることになった。そこでは『けっこんぴあ』のように主として販売収益に期待するものと、『XY』のように主として広告収入に期待するものとに分かれたが、優位に立ったのは後者であり現在の『ゼクシィ』全盛が用意された。80年代以降の結婚雑誌は、広範な記事を取り込んだ「結婚雑誌」から「配偶者選択情報雑誌」を経由して「結婚式情報雑誌」へとたどり着いたのである。

これら結婚式情報雑誌は創刊間もないころからバブル崩壊の影響を受け、安価な結婚式の提案を頻りに行った。これは一見すると広告主であるホテルや式場に不利のようだが、これらの産業もその生き残りのために「ハデ婚」を賄えなくなった若者たちにリーチするため、こうした結婚式情報雑誌を必要としていた。90年代以降の結婚式情報雑誌はバブル崩壊を抜きにしては論じられない。

結婚式情報提供への特化は誌面に現れる結婚像にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。たとえば創刊直後の『XY』はあくまで「ふたり」に注目し、そのなかでは時に「ネオパートナーシップ（ネオパ）」など多様なパートナーシップのあり方を提示しもした。ところが、結婚式情報に特化し、ホテル・式場や指輪などの広告収入に依存する雑誌経営を行う限り、予算やファッションなど結婚式のスタイルの多様性は示しえても、結婚式を挙げない、指輪を渡さない、新婚旅行をしない、といった選択肢を提示することは困難である。まして、配偶者（ないしパートナー）選択や結婚（ないし事実婚）生活の多様性の探究は削り取られざるをえなかった。

では、「婚活１・０」とはどのように接続したのであろうか。蓋し、事前に目ぼしい結婚雑誌の存在しないなかから『結婚潮流』が登場した「婚活０・０」と同様、「婚活１・０」も空洞のなかから生まれたと言える。結婚式について豊富な情報とイメージが提供される一方で、配偶者選択、まして結婚生活を見据えた配偶者選択についての情報提供が欠如していたことから、その空洞を埋めるべく書籍やウェブサイト、また個々の設定した条件による配偶者選択を可能にするオンラインのプラットフォームが陸続と勃興したのである。

こうした21世紀以降の「婚活１・０」の流れのなかで、『ゼクシィ』も読者の要請に応えて結婚式の多様化に対応してきた。すなわち、地味婚やナシ婚の流れもフォローし、さらに『ゼクシィ Premier』では同性婚（2020年現在の日本では自動的に非法律婚である）カップルも積極的に取り入れてきたのである。これらは結婚式の情報がインターネットで容易に得られるようになるなか、新たな結婚像のスタンダードを設定する動きとみることができる。

また、『ゼクシィ』は単なる結婚式情報雑誌からの転換の兆しも見せている。たとえば2010年４月に編集長に就任した伊藤綾は自身の出産・育児経験を踏まえて、「3時間の結婚式から60年の結婚式へ」というコピーに象徴されるように、結婚式のみならず結婚生活も重視する立場を打ち出した。リクルートはさらに15年、それまで式場・ホテル情報の対面提供を主としていた子会社ゼクシィなびにおいて、マッチングサービス「ゼクシィ縁結び」

をスタートした。『ゼクシィ』のブランド力を活かし、またすでに各地に店舗を構えていた利点を活かして、結婚式情報のみならず配偶者選択情報をも提供する経営の多角化を目指しているのである。

以上の知見はより一般化すれば次のようにまとめることができよう。第一に経済状況などの社会情勢や結婚雑誌の経営戦略が雑誌における編集方針に少なからざる影響を与えていること、第二に雑誌の論調形成にあたっては編集部や執筆陣、とりわけ編集部員の属性と、執筆者の開拓、執筆者との相互作用とが重要であること、第三にこうした雑誌の存在と不存在が―「婚活 0・0」や「婚活 1・0」のような―社会的事象を用意しうることである。これらは必ずしも結婚雑誌のみならず、雑誌全体の分析に益するものである。すなわち、それぞれの雑誌の論調は、各雑誌の漠然としたイデオロギーに左右されているというより、編集部の性格、執筆者の発掘と各執筆者との相互作用、想定読者、そして社会状況、これらを前提にした経営戦略といった具体的な事項の組み合わせによって形成されるものなのである。これらを可能な限り解析的に観察することで、雑誌とその論調への理解、ひいては雑誌を通した社会（ないし部分社会）への理解をより深めることが可能になるであろう。

プロジェクトの総括

プロジェクトを総括する。雑誌というメディアを通じた歴史研究が少ない現状で、『史友』52 号に掲載した小宮京「『nicola』小史」や佐藤信「世紀末の結婚雑誌」といった論文は、貴重な貢献となろう。また、小宮京「「読者モデル」の歴史的源流」と「『nicola』小史」を併読すれば、雑誌を使った論文の執筆に活用できるはずである。データベースの使い方に始まり、インタビューやネットを活用する方法を示した。

そのうえで、『史友』52 号の「特集　雑誌研究」を踏まえつつ、その間に発生した問題や今後の課題をまとめたい。

小宮は論文執筆時に想定外の事態に直面した。それは、第一に、分析対象とした『nicola』本誌が入手できないことであった。国会図書館や東京都立図書館には創刊号と 2007 年以降しか所蔵されていない。創刊号は収集されることが多いのだが、それ以降の号が確認できないという問題にぶつかった。ある程度は自力で集めたものの全てを揃えることは不可能だった。これは雑誌研究に付きまとう問題であろう。今回、「『nicola』小史」刊行後に確認した 4 号について、追記して分析した。

第二に、『nicola』本誌のみならず、関連書籍も所蔵されておらず、こちらも自力で入手せざるを得なかった。具体的には『nicola ガッキーブック（ニコラ四月号別冊）』（新潮社、2004 年）である。国会図書館には所蔵されていない。古書は非常に高価であった。1990 年

代後半から 2000 年代初頭を対象としていても、このような資料状況であったことは、今後の研究を行うに際しても留意せねばならないだろう。

最後に、今後の課題ともつながる問題である。今回は twitter や消滅したウェブサイトから引用を行った。ネットメディアからの引用の際に、どのような形式ならば問題がないのか、苦慮した。これは雑誌研究にとどまらず、現代史が直面する課題であろう。ネットメディアに関するインタビューも含め、同時代の記録をいかに残すかは課題だと考えられる。

そのうえで、雑誌研究の重要性を再確認したことを強調したい。本研究プロジェクトの成果を踏まえつつ、今後も「雑誌を用いた日本現代史研究」を進めたい。

執筆者

佐　伯　眞　一	所　　長	文学部附置人文科学研究所
秦　　邦　生	准　教　授	東京大学総合文化研究科
DHORNE, France	教　　授	文学部フランス文学科
尾　形　こづえ	教　　授	文学部フランス文学科
小　松　靖　彦	教　　授	文学部日本文学科
小　宮　　京	教　　授	文学部史学科

青山学院大学文学部附置人文科学研究所報告　第２号

2021 年 2 月 19 日　印刷
2021 年 3 月 1 日　発行

〒150-8366　東京都渋谷区渋谷 4－4－25
編集兼発行者　青山学院大学文学部附置人文科学研究所
代表者　佐　伯　眞　一

〒102-0072　東京都千代田区飯田橋3－11－7
印刷所　株 式 会 社 ワ　コ　ー